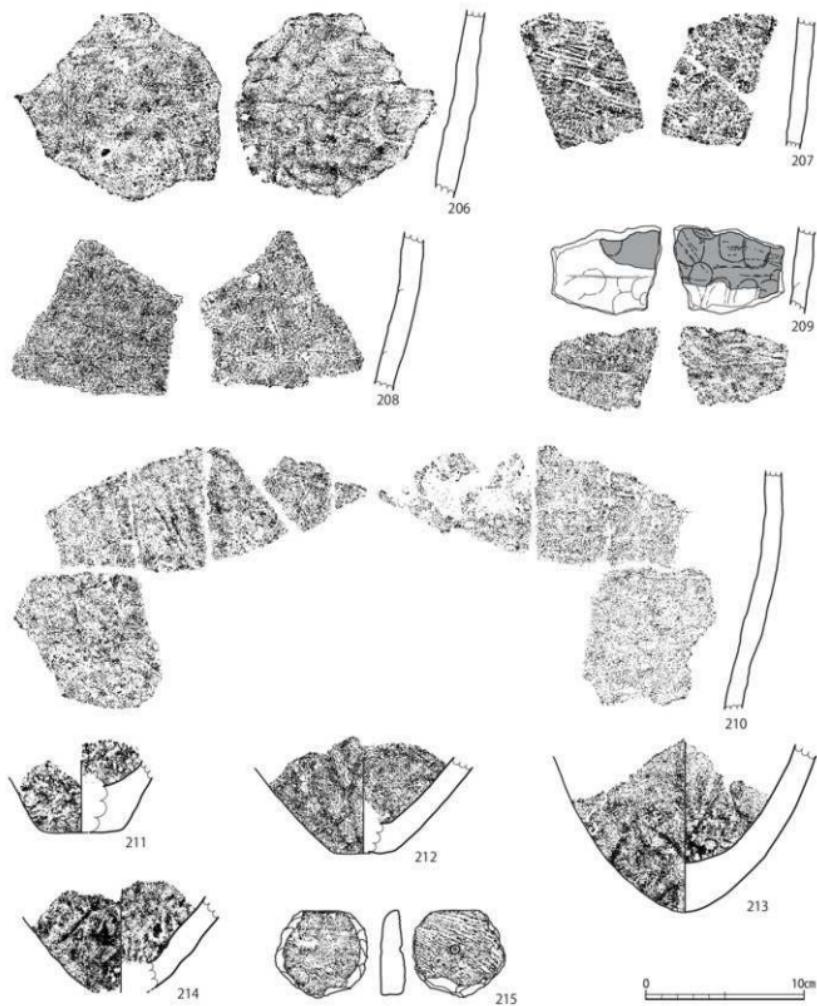


第70図 A地点 繩文時代早期土器実測図4 (S=1/3)



第71図 A地点 繩文時代早期土器実測図5 (S=1/3)

V類（第68図177～181）

V類は押型文を有する一群で、2類に細分される。

Va類は梢円の押型文を横方向に走らせるもので、177～179が該当する。177は口縁部が直口し、押型文を横方向に施文後、下位の部分をナデ消している。178・179は押型文施文間に無文帯が認められる。これらは、押型の原体が小粒であることや口縁部内面には原体条痕が認められないこと、外面上に無文帯が認められること等から、稻荷山式段階に相当すると考えられる。

Vb類は山形の押型文を有するもので、180・181が該当する。180は大半が横位、一部斜位に押型文が施されている。180は風化が著しいが、横位の押型文が認められる。胴部片であるため時期認定に苦慮するが、原体の大きさや単位、器形等から稻荷山式～早水台式段階に相当すると考えられる。

VI類（第68図182～190、第69図191～198、第70図199～205、第71図206～210）

VI類は無文土器で、A地点の主体を成す一群である。これらは陽弓遺跡（大分県国東町）等で出土している土器群と器形や調整等で類似する点が認められる。また土器多くには、胎土に纖維が混入する。

Via類は、器壁が薄い一群で、182～190が該当する。183の内面に貝殻条痕調整を施す他は内外ともナデ調整が認められる。器形は190の尖底の存在から砲弾型を呈する。また182は焼成後、外面から穿孔が施されているが、未貫通である。

Vib類は厚手で瘤状の突起を有する一群で191～195が該当する。191は波状口縁下に所謂瘤文を貼付け、瘤の尖端中央部分に平坦面を作り出し、その平坦面から周辺にかけては、指頭圧により整形を行っている。192～194は口縁部上に瘤文を貼付け、ナデ調整により、中央に稜を持たせている。瘤文部分の口縁部は少し盛り上がり、波状気味になる。195にも口縁部上に突起を有するが、191～194のように肥厚させず、斜めに張り出すように整形を行っている。内外面とも指頭圧痕が顕著である。

Vic類は厚手の土器群で、199～205が該当する。口縁部の形状はバリエーションに富み、器面調整は内外ともナデ調整が施されている。196～198は波状口縁を有するタイプで、口縁部は外反ぎみに開く。199・200は口縁部が外反しながら口唇部がやや開くタイプである。201は直線的に立ち上がり、202～205は口縁部が内傾している。そのうち205は口縁部が肥厚し、口唇部は丸味を帯びる。

206～210は胴部片で、大半が内外面ともナデ調整を施すが、指頭圧痕が顕著なもの（例えば206の内面及び209等）も認められる他、207のように貝殻条痕を施した後、ナデ消しているものも認められる。また209は内外面の一部に赤色面が認められる（トーン部分）。色調が鈍く、薄いことから化粧土によるものと考えられる。

VII類（第68図176）

VII類は上記の分類に該当しないものである。176はヘラ状工具により縱位に沈線が施された後、棒状工具を用いて横位に沈線文を巡らしているが、これらを施文する以前にも格子状に浅く沈線文を配している。また固化していないが、C4グリッドには、竹管状工具による連続刺突文を施したものも出土している。

底部（第71図211～214）

211・212は底径が比較的小さく、底端が丸みを帯びながら、斜めに立ち上がる。213～214は尖底である。そのうち213の内面には炭化物が付着している。

土器片加工品（第71図215）

1点のみの出土。215は口唇部を残し、その他の周縁を両方向から打ち欠きによる整形を行っている。

また外面中央には未貫通の穿孔が認められる。D 4 グリッド出土。

国番 番号	器種 部位	出 土 地 点	剖 位	手法・調整・文様はか		成 形	色 調		胎 土 の特 徴	備 考
				外 面	内 面		外 面	内 面		
145	深 鉢 部	A S 17	-	丁寧なナデ	丁寧なナデ	良好	に赤い褐色 灰黄褐色	に赤い褐色 灰黄褐色	2 mm以下の乳白色・灰白色・暗褐色。 3 mm以下の灰褐色・黒色柱状光沢を含む。	
146	深 鉢 部	A S 19	-	ナデ	目股条痕 工具ナデ	良好	に赤い褐色 灰黄褐色	に赤い褐色 灰黄褐色	2 mm以下の灰褐色・灰白色。 5 mm以下の灰褐色・黒色柱状光沢・透明光沢を含む。織縫痕を含む。	
147	深 鉢 部	A S 17	-	斜方向に丁寧な工具ナデ	丁寧なナデ	良好	明黄褐色 黑色	黑色	織縫痕・透明光沢有り。黒色柱状光沢有り。 4 mm以下の灰褐色・灰白色。 内部の一部黒度の灰白色の羽片を含む。	
148	深 鉢 部	A S C 10 S 128	-	ナデ	ナデ	良好	に赤い褐色 灰黄褐色	に赤い褐色 灰黄褐色	2 mm以下の黒色柱状光沢有り。 4 mm以下の灰褐色・灰白色。 8 mm以下の灰白色・灰褐色を含む。	外面は薰化氣味
149	深 鉢 部	A 口縁部 S P 6	-	斜め方向の目股条痕	横方向のナデ	良好	黑褐色	に赤い褐色 灰黄褐色	織縫痕・透明光沢有り。 2 mm以下の黑色柱状光沢有り。 5 mm以下の灰褐色・不透明な光沢。 5 mm以下の灰白色を含む。	内部は一部薰化
150	深 鉢 部	A S C 15	-	斜方向に櫛糸文	横・斜め方向のナデ	良好	に赤い褐色 灰黄褐色	に赤い褐色 灰黄褐色	2.5 mm以下の黒色柱状光沢有り。 4 mm以下の灰褐色・5 mm以下の灰褐色。 7 mm以下の灰白色を含む。	外面は一部剥落
151	深 鉢 部	A S C 17	-	ナデ	ナデ	良好	に赤い褐色 灰黄褐色	に赤い褐色 灰黄褐色	織縫痕・黑色柱状光沢有り。 6 mm以下の褐色 灰色・に赤い褐色を含む。	内部は薰化が著しい
152	深 鉢 部	A S C 15	-	斜方向に櫛糸文	横・斜め方向のナデ	良好	に赤い褐色 灰黄褐色	に赤い褐色 灰黄褐色	2.5 mm以下の黒色柱状光沢有り。 4 mm以下の灰褐色・5 mm以下の灰褐色。 7 mm以下の灰白色を含む。	外面は一部剥落
153	深 鉢 部	A S C 17	-	ナデ	ナデ	良好	に赤い褐色 灰黄褐色	に赤い褐色 灰黄褐色	織縫痕・黑色柱状光沢有り。 6 mm以下の褐色 灰色・に赤い褐色を含む。	内部は薰化が著しい
154	深 鉢 部	A 底部 S C 19	-	工具ナデ	ナデ	良好	に赤い褐色 灰黄褐色	に赤い褐色 灰黄褐色	1 mm以下の灰褐色・黒色柱状光沢有り。 透明光沢有り。	6 mm以下の褐色 灰色を含む。
155	深 鉢 部	A S H 11	-	風化が著しく調整不明。ナデか	風化が著しく調整不明。ナデか	良好	に赤い褐色 明赤褐色	明赤褐色	2 mm以下の不透明な光沢有り。 3 mm以下の灰白色・黒色の柱状光沢有り。 5 mm以下の茶色光沢。 6 mm以下の黑色を含む。	外面に黒変
156	深 鉢 部	S 19 E 4	I	口縁部に斜方向の目股条痕による過剝刻文 横方向に斜め方向による過剝刻文	口縁部による過剝刻文 横・斜方向による過剝刻文	良好	灰黄褐色 褐色	灰黄褐色 褐色	3 mm以下の黒色柱状光沢有り。 4 mm以下の黑色光沢・6 mm以下の灰白色。 8 mm以下の灰褐色を含む。	内外とも風化が著しい
157	深 鉢 部	S 19 E 4	V	口縁部による過剝刻文 横方向による過剝刻文	口縁部による過剝刻文 横方向による過剝刻文	良好	灰黄褐色 褐色	灰黄褐色 褐色	織縫痕・透明光沢有り。 2 mm以下の黒色柱状光沢有り。 3 mm以下の黑色光沢・4 mm以下の灰白色。 8 mm以下の灰褐色を含む。	
158	深 鉢 部	A	I	口縁部による過剝刻文 横方向による過剝刻文	口縁部による過剝刻文 横・斜方向に丁寧なナデ	良好	黑褐色	暗灰黄色	織縫痕・透明光沢有り。 2 mm以下の黒色・黒色柱状光沢有り。 透明光沢有り。 4 mm以下の灰白色・褐色 光沢。 5 mm以下の灰褐色を含む。	
159	深 鉢 部	A 口縁部 D 3	V	口縁部による押し引き 横の刃刻文、縦に2段に のびる過剝刻文による過剝刻文	口縁部による押し引き 横の刃刻文、縦に2段に のびる過剝刻文による過剝刻文	良好	に赤い褐色 灰黄褐色	に赤い褐色 灰黄褐色	2 mm以下の黒色・黒色柱状光沢有り。 透明光沢有り。 4 mm以下の灰白色・褐色 光沢。 5 mm以下の灰褐色を含む。	
160	深 鉢 部	A 口縁部	V	口縁部に貝故痕跡突起 横方向に貝故痕跡突起	口縁部に貝故痕跡突起 横方向に貝故痕跡突起	良好	に赤い褐色 灰黄褐色	に赤い褐色 灰黄褐色	3 mm以下の透明光沢有り。 黒色柱状光沢有り。 多量に含む。 3 mm以下の灰褐色・灰 褐色。	口縁部は風化が著し い。
161	深 鉢 部	A E 4	V	貝故痕跡(短次痕状) ナデ	貝故痕跡(短次痕状) ナデ	全体的に風化	良好	灰黄褐色	織縫痕・透明光沢有り。 6 mm以下の黒色柱状光沢有り。	
162	深 鉢 部	A E 4	V	斜方向の貝故痕跡、条痕 の上から棒状工具による 過剝刻文(等間隔に3段)	斜方向の貝故痕跡、条痕 の上から棒状工具による 過剝刻文(等間隔に3段)	良好	褐色	に赤い褐色 灰黄褐色	2 mm以下の黒色・黒色柱状光沢有り。 金色光沢有り。 5 mm以下の灰白色。 10 mm以下の赤い 黄褐色を含む。	
163	深 鉢 部	A D 3	V	斜方向の貝故痕跡、表面の上 から棒状工具による過剝 刻文(等間隔に3段)	斜方向の貝故痕跡、表面の上 から棒状工具による過剝 刻文(等間隔に3段)	良好	に赤い褐色 灰黄褐色	に赤い褐色 灰黄褐色	織縫痕・透明光沢有り。 黒色柱状光沢有り。 4 mm以下の灰白色。 5 mm以下の灰褐色を含む。	
164	深 鉢 部	A 口縁部	I	斜方向の貝故痕跡の後、 貝故痕跡による過剝刻文(8 段) 口縁部はナデ	斜方向の貝故痕跡の後、 貝故痕跡による過剝刻文(8 段) 口縁部はナデ	良好	灰黄褐色 灰黄褐色	灰黄褐色 灰黄褐色	2 mm以下の黒色柱状光沢有り。 透明光沢有り。 3 mm以下の灰褐色。 4 mm以下の灰褐色。	内部は風化が著しい 以下の赤色・灰褐色を含む。
165	深 鉢 部	A 口縁部	V	横方向の櫛糸文 口縁部はナデ	横方向の櫛糸文 口縁部はナデ	良好	に赤い褐色 指頭痕	暗灰色	5 mm以下の透明光沢有り。 黑色柱状光沢 粉を多く含み。 2 mm以下の灰褐色。 3 mm以下の灰白色。 5 mm以下の灰褐色 粉を含む。	
166	深 鉢 部	A 口縁部	II	斜方向の櫛糸文 口縁部はナデ	斜方向の櫛糸文 口縁部はナデ	良好	に赤い褐色 黑色	灰黄褐色 黑色	5 mm以下の黒色柱状光沢有り。 黑色柱状光沢。 5 mm以下の灰白色を含む。	
167	深 鉢 部	A C 3	M	斜方向の櫛糸文	横方向のナデ	良好	に赤い褐色 灰黄褐色	に赤い褐色 灰黄褐色	2 mm以下の黒色柱状光沢有り。 4 mm以下の 褐色光沢。 5 mm以下の灰白色。 6.5 mm以下の灰 褐色光沢。 7 mm以下の灰白色を含む。	6 mm以下の黒變
168	深 鉢 部	A B 4	V	斜方向の櫛糸文 口縁部は横方向のナデ 指頭痕	横方向のナデ 横方向のナデ	良好	に赤い褐色 灰黄褐色	灰黄褐色	2 mm以下の黒色柱状光沢有り。 4 mm以下の 褐色光沢。 5 mm以下の灰白色。 6.5 mm以下の灰 褐色光沢。 7 mm以下の灰白色を含む。	以下に赤い褐色を含む。
169	深 鉢 部	A B 4	V	斜め方向の櫛糸文	丁寧なナデ ナデ	良好	灰黄褐色 灰黄褐色	灰黄褐色 灰黄褐色	2 mm以下の白色・灰白色。 4 mm以下の 透明光沢。 黑色柱状光 沢光沢有り。 黑色柱状光 沢粉を含む。	外面ス付着 灰白色を含む。

第10表 A地点 織文時代早期土器觀察表1

画面 番号	器種 部位	出土 地点	剖面	手法・調整・文様ほか		焼成	色調		胎土の特徴	備考
				外面	内面		外面	内面		
170	深鉢 削部	A C 4	V	構・斜め方向の櫛文 一部その上からナデ	ナデ 一部分にスス付着	良好	に赤い黄褐色	灰褐色	3mm以下の白色・灰色・灰褐色・透 明光沢粒、黒色柱状光沢粒を含む。	
171	深鉢 削部	A	B	斜め方向の櫛文 ナデ	ナデ	良好	明赤褐色	に赤い褐色	繊細な透明光沢粒、3mm以下の白色粒、 黒色柱状光沢粒、4mm以下の茶色粒を 含む。	
172	深鉢 削部	A B 4	V	ナデの後、斜方向の櫛文	ナデの後、竪方向の 櫛文	良好	褐色	明赤褐色	繊細な透明光沢粒、2mm以下の黑色柱 状光沢粒、3mm以下の茶色粒、4mm以 下の灰褐色粒を含む。	
173	深鉢 削部	A B 4	V	ナデの後、斜方向の 櫛文	ナデの後、斜方向の 櫛文	良好	灰黃褐色	に赤い褐色	2mm以下の黑色柱状光沢粒、灰褐色・ 5mm以下の白色・赤褐色・灰褐色粒を 含む。	
174	深鉢 口縁部	A B 3	V	二列の轉写工具による 豊文、その下に竪・斜 方向のナデ	良好	に赤い褐色	に赤い褐色	に赤い褐色	繊細な透明光沢粒、2mm以下の透明 光沢粒、3mm以下の赤褐色・白色粒 を含む。	
175	深鉢 削部	A C 2	B	竪方向の櫛文の一部 横方向の櫛文、櫛文の上 に沈線文	ナデ	良好	明赤褐色	灰褐色	1mm以下の黑色柱状光沢粒、灰褐色、 2mm以下の灰褐色粒、3mm以下の赤 褐色粒を含む。	
176	深鉢 口縁部	A C 4	V	竪方向にぐら状工具によ る花線文、横方向に棒状 工具による沈線文	ナデ	良好	に赤い黄褐色	に赤い黄褐色	繊細な透明光沢粒、2mm以下の黑色柱 状光沢粒、3mm以下の茶色粒、6mm以 下の灰褐色粒を含む。	
177	深鉢 削部	A C 5	V	横方向の横円押壓型(押 型文)の一部を消し ナデ	ナデ	良好	に赤い褐色	に赤い褐色	1mm以下の灰褐色、2mm以下の赤 褐色を含む。	
178	深鉢 削部	A C 4	V	横方向の横円押壓型(押 型文間に無文部あり) ナデ	横および斜め方向 の具足底痕文	良好	黒褐色	灰黃褐色	1.5mm以下の不透明光沢粒、2.5mm以 下の灰褐色、3mm以下の褐色粒、7mm以 下の灰褐色粒を含む。	
179	深鉢 削部	A	V	横方向の横円押壓型(下 方に無文部) 指痕痕	ナデ 一部頗化	良好	褐色	に赤い黄褐色	1mm以下の透明光沢粒、1.5mm以下の不透 明な光沢粒・黒色柱状光沢粒、2mm以 下の褐色粒を含む。	
180	深鉢 削部	A S A 2	-	横方向の山形押壓型	ナデ	良好	褐色	黑褐色	1mm以下の透明光沢粒、黒色柱状光沢 粒、2mm以下の白色粒を含む。	内面とも風化が著 しい
181	深鉢 削部	A	I	横方向の山形押壓型	ナデ	良好	に赤い褐色	に赤い褐色	2.5mm以下の黑色柱状光沢粒、3mm以 下に赤い黄褐色粒、6mm以下の白色 内面一部頗化	
182	深鉢 口縁部	A D 4	V	構・不定方向のナデ 焼成後に未貫通の穿孔 口縁部はナデ	工具による横方向 のナデ	良好	灰黃褐色	灰黃褐色	繊細な白色粒、2mm以下の灰褐色粒、 5mm以下の明暗灰色粒を含む。織痕痕 を含む。	
183	深鉢 口縁部	A C 3	V	斜め方向のナデ	斜め方向の具足底 痕	良好	に赤い黄褐色	に赤い褐色	繊細な白色粒、2mm以下の灰褐色粒 を含む。織痕痕を含む。	
184	深鉢 口縁部	A D 4	V	ナデ 指痕痕	横方向のナデ 指痕痕	良好	灰褐色	に赤い褐色	繊細な透明光沢粒、2mm以下の黑色 柱状光沢粒、4mm以下の茶色粒、織 痕痕を含む。	
185	深鉢 口縁部	A B 4	V	横方向のナデ 指痕痕	横・斜め方向のナデ	良好	灰黃褐色	に赤い黄褐色	繊細な透明光沢粒、1mm以下の黑色柱 状光沢粒、2mm以下の灰褐色粒を含む。 織痕痕を含む。	
186	深鉢 口縁部	A B 4	V	構・斜め方向のナデ	横・斜め方向のナデ	良好	に赤い褐色	に赤い黄褐色	繊細な透明光沢粒、灰白色 2mm以下の白色粒を含む。	
187	深鉢 削部	A C 4	V	ナデ	ナデ	良好	褐色	に赤い黄褐色	1mm以下の透明光沢粒、灰白色、2 mm以下の灰褐色粒を含む。織痕痕を 含む。	実底 内面とも風化が著 しい
188	深鉢 底付 近	A	V	斜め・竪方向の工具ナデ 全体的に風化	構・斜め方向の工具 ナデ	良好	に赤い黄褐色	に赤い黄褐色	1.5mm以下の黑色柱状光沢粒、透明光 沢粒、2mm以下の黑色粒、4mm以下の明 暗灰色粒を含む。織痕痕を含む。	表面にスス付着
189	深鉢 底付 部	A B 4	V	ナデ	竪・斜め方向のナデ	良好	に赤い黄褐色	に赤い黄褐色	2mm以下の透明光沢粒、黑色柱状光 澤粒、4mm以下の灰白色粒を含む。織 痕痕を含む。	実底 内面とも風化が著 しい
190	深鉢 削部	A B 5	V	ナデ、指痕痕	ナデ	良好	褐色	淡黄色	1mm以下の白色粒、2mm以下の黑色柱 状光澤粒、灰白色粒を含む。織痕痕を 含む。	実底 内面とも風化が著 しい
191	深鉢 口縁部	A B 4	V	刷付コブ文 ナデ後、ナデ	ナデ	良好	明赤褐色	明赤褐色	2mm以下の黑色柱状光澤粒、2.5mm以 下の灰褐色、3mm以下の白色粒に赤褐色 粒、4mm以下の明暗灰色粒を含む。外 面は一部、内面は全体的に風化	
192	深鉢 口縁部	A D 4	V	刷付コブ文 ナデ後、ナデ	ナデ	良好	に赤い黄褐色	に赤い黄褐色	2mm以下の手写明褐色、黑色柱状光 澤粒、3mm以下の灰白色粒を含む。織 痕痕を含む。	波紋口縫 外表面は風化氣味 内面の一箇所に黒変
193	深鉢 口縁部	A B 4	V	刷付コブ文 工具によるナデ 指痕痕	ナデ 指痕痕	良好	褐色	褐色	2mm以下の黑色柱状光澤粒、3mm以 下の浅黄褐色粒、4mm以下の灰黃色粒を 含む。織痕痕を含む。	

第11表 A地点 織文時代早期土器観察表2

画面 番号	器種 部位	出土 点	剖面	手法・調整・文様ほか		横成	色調		胎土の特徴	備考
				外 面	内 面		外 面	内 面		
194	深 跖 口縁部	A C 4	V	貼付コブ文 横方向に工具によるナデ ナデ 指頭痕	ナデ 横方向のナデ	良好	明赤褐色	明赤褐色	1 mm以下の黒色柱状光沢粒。3 mm以下の灰白色粒。5 mm以下の黒褐色粒。6 mm以下の灰白色粒を含む。繊維脈を含む。	
195	深 跖 口縁部	A B 4	V	貼付突起(コブ文?) ナデ 指頭痕	ナデ 指頭痕	良好	に赤褐色	に赤褐色	微細な透明光沢粒・灰白色粒、1.5 mm以下の黒色柱状光沢粒。4 mm以下の灰白色に赤褐色を含む。繊維脈を含む。	
196	深 跖 口縁部	A B 3	V	ナデ 指頭痕	ナデ 指頭痕	良好	に赤褐色	明赤褐色	2 mm以下の黒色柱状光沢粒・透明白光粒・灰白色に赤褐色。5 mm以下の灰白色を含む。繊維脈を含む。	波状口縫 灰白色を含む。
197	深 跖 口縁部	A B 4	V	横・斜め方向のナデ	横・斜め方向のナデ	良好	明赤褐色	明赤褐色	1 mm以下の透明光沢粒。2 mm以下の半透明光粒・黒色柱状光沢粒。3 mm以下の灰白色粒を含む。繊維脈を含む。	波状口縫
198	深 跖 口縁部	A B 4	V	ナデ 指頭痕	ナデ	良好	灰黄褐色	褐色	2 mm以下の黒色柱状光沢粒。3 mm以下の灰白色・細胞粒。7 mm以下の灰白色粒を含む。繊維脈を含む。	波状口縫 内外面とも風化気味
199	深 跖 口縁部 ～ 肩 部	A B 4	V	横・斜め方向のナデ 口縁部はナデ	横・斜め方向のナデ	良好	に赤褐色	に赤褐色	2 mm以下の黒色柱状光沢粒。3 mm以下の白褐色。5 mm以下の灰白色粒を含む。繊維脈を含む。	
200	深 跖 口縁部	A B 4	V	横方向のナデ、ナデ	横方向のナデ 指頭痕	良好	に赤褐色	に赤褐色	透明光沢粒・黑色柱状光沢粒。3 mm以下の灰白色・細胞粒。5 mm以下の灰白色粒を含む。繊維脈を含む。	
201	深 跖 口縁部	A B 4	V	横方向のナデ、ナデ 口縁部はナデ	横方向のナデ、指頭 痕	良好	に赤褐色	に赤褐色	透明光沢粒・黑色柱状光沢粒。2 mm以下の灰白色・細胞粒。6 mm以下の灰白色粒を含む。繊維脈を含む。	
202	深 跖 口縁部	A S A 3	V	横方向のナデ 指頭痕 口縁部はナデ	横方向のナデ 指頭痕	良好	に赤褐色	に赤褐色	3 mm以下の黒色柱状光沢粒。4 mm以下の灰白色粒。7 mm以下のに赤褐色を含む。	
203	深 跖 口縁部	A B 4	V	横・斜め方向のナデ 口縁部はナデ	横・斜め方向のナデ	良好	灰黄褐色	に赤褐色	1 mm以下の黒色柱状光沢粒。2 mm以下の透明光沢粒。5 mm以下の灰白色粒を含む。	
204	深 跖 口縁部	A B 4	V	ナデ 指頭痕	ナデ 指頭痕	良好	に赤褐色	褐色	2 mm以下の透明光沢粒・黑色柱状光沢粒。2 mm以下の黑褐色・細胞粒。5 mm以下の灰白色・細细胞を含む。繊維脈を含む。	
205	深 跖 肩 部	A	I	ナデ 指頭痕	工具による斜方 向のナデ	良好	褐色	明赤褐色	2 mm以下の黒色柱状光沢粒。3 mm以下の灰白色・細胞粒。4 mm以下の灰白色・5 mm以下の茶色粒を含む。繊維脈を含む。	外側は一部黒変
206	深 跖 肩 部	A C 4	V	不定方向のナデ 一部風化	横方向にナデ後、縱 方向にナデ 横方向にナデ後、指 ナデ	良好	灰褐色	に赤褐色	2.5 mm以下の黒色柱状光沢粒。5 mm以下の灰白色・6 mm以下の灰白色・1.5 mm以下の褐色の剥離の外側を含む。繊維脈を含む。	
207	深 跖 肩 部	A B 4	V	斜め方向の条痕の後、ナ デ	ナデ	良好	に赤褐色	に赤褐色	2 mm以下の黒色柱状光沢粒。3 mm以下の灰白色・4 mm以下の茶色粒を含む。	内外とも全体的に風 化
208	深 跖 肩 部	A	I	縱方向のナデ 一部指頭痕	横方向に工具によ るナデ 縦方向にナデ後、横方 向にナデ	良好	に赤褐色	に赤褐色	1 mm以下の黒色柱状光沢粒。4 mm以下の灰白色・褐色・細胞粒。5 mm以下の灰白色に赤褐色の剥離の外側を含む。繊維脈を含む。	内面は全体的に風化
209	深 跖 肩 部	A B 4	V	ナデ 一部朱色に変色(化粧 土?)	条痕の上に部分的 にナデ、一部朱色に 変色(化粧土?)	良好	に赤褐色	に赤褐色	1 mm以下の黒色柱状光沢粒・透明白光粒・透明光沢粒。2 mm以下の灰白色粒を含む。繊維脈を含む。	
210	深 跖 肩 部	A B 4	V	指頭痕後、ナデ	指頭痕後、ナデ	良好	に赤褐色	褐色	2 mm以下の黒色柱状光沢粒・透明光沢粒・灰白色粒。5 mm以下の灰白色粒を含む。	内面は全体的に風化 気味
211	深 跖 底 部	A	V	工具による横・斜め方 向のナデ 細胞はナデ	ナデ	良好	に赤褐色	に赤褐色	2.5 mm以下の黒色柱状光沢粒。2 mm以下の灰白色・灰褐色・細胞粒。4 mm以下の灰白色・細细胞を含む。	推定底径 5.4cm 平底、内面風化気味 外側に入火跡有
212	深 跖 底 部	A D 4	M	縱方向のハラナデ 底部はナデ	ナデ	良好	に赤褐色	褐色	1 mm以下の黒色柱状光沢粒。1 mm以下の灰白色・黑色・灰褐色の剥離を含む。	推定 4.0cm、平底
213	深 跖 底 部	A B 4	V	斜め方向の工具によるナ デ ナデ	縱方向にナデ	良好	に赤褐色	灰褐色	1 mm以下の黒色柱状光沢粒・透明白光粒・3 mm以下の灰白色粒・4 mm以下の灰褐色・灰白色を含む。繊維脈を含む。	実底 内面に化物付着 有
214	深 跖 底 部	A	II	ナデ 指頭痕 粘土のたれ	ナデ 指頭痕	良好	明赤褐色	褐色	1.5 mm以下の透明光沢粒・黑色柱状光沢粒・4 mm以下の灰褐色・4 mm以下の灰白色・褐色・茶色・灰褐色を含む。繊維脈を含む。	
215	深 跖 口縁部	A D 4	V	斜め方向の擦系 ナデ	横方向のナデ	良好	灰黄褐色	に赤褐色	1 mm以下の黒色柱状光沢粒・透明白光粒・3 mm以下の灰白色・に赤褐色・粘土・土器片加工品・黑褐色を含む。	

第12表 A地点 織文時代早期土器觀察表 3

(3) 石器

A 地点では、1,536 点の石器が確認されている。石器群は C 3 グリッド南側から C 4 グリッド北側にかけて集中部が認められる。この集中部では、主にチャート製の剥片や碎片が多量に出土し、石器製作が行なわれていたことが窺い知ることができる。

石材はチャート I ~ VII 類(1,222 点)が全体の約 8 割を占め、流紋岩 I a ~ f 類(98 点)や流紋岩 III 類(11 点)、ホルンフェルス IV ~ VI 類(77 点)、砂岩(43 点)、水晶(7 点)、千枚岩(13 点)、頁岩(12 点)、尾鈴山酸性岩類(2 点)、花崗岩(2 点)、姫島産ガラス質安山岩(26 点)、緑色凝灰岩(17 点)、腰岳産黒曜石(2 点)、姫島産黒曜石(2 点)、産地不明黒曜石(2 点)が利用されている。なお器種別に分布図(第 72 図など)を掲載するが、点あげしたもののみの為、実数とは異なる。

打製石鎌(第 72 図 216 ~ 236)

打製石鎌は 35 点出土している。調査区南西部にまとまって出土しており、B 4 グリッドから C 4 グリッドにかけて 20 点が確認されている。石材はチャート II ~ V ~ VII 類が 31 点と約 9 割を占め、流紋岩 I a 類 3 点、姫島産ガラス質安山岩 1 点である。以下形態ごとに説明を加える。

I 類は二等辺三角形を呈し、平基のもので、216 ~ 218 が該当する。216 はチャート II 類製、217・218 はチャート V 類製で、そのうち 216 の裏面右側には素材時の剥離痕が残されている。217 は先端部が欠損する。

II 類は正三角形に近い形状を呈し、基部に浅い抉りを有する。219 のみの出土でチャート V 類製である。脚端が角張っている。

III 類は二等辺三角形を呈し、抉りを有するもので、220 ~ 231 をが該当する。227 が流紋岩 I a 類、231 が姫島産ガラス質安山岩で、それ以外はすべてチャート製(II ~ VII 類)である。そのうち 220 ~ 222 は抉りが浅く、220 は脚端が平らで 221・222 は脚端が尖る。223 の裏面は表面ほど加工が施されず、大半が素材時のままである。先端部の右側縁側の加工はリダクションの可能性が高い。224 は V 字状の抉りを持ち、脚端は丸く作り出している。なお右脚は欠損している。

229・230 は抉りが深く、全長の約 1 / 2 を有する。どちらも比較的丁寧な作りであり、細身の脚部を持つ。また 229 の脚端は尖るに対し、230 の脚端は平らに作り出されている。

その他、未製品(232 ~ 236)が 5 点確認されている。いずれも素材時の剥離面を多く残す。

尖頭状石器(第 72 図 237・238)

尖頭状石器は 3 点確認されている。237 のみ流紋岩 I 類、他はチャート II 製である。いずれも幅が広く、厚みがある。また 237 は基部がやや内湾するのに対し、238 は基部に丸味を帯びる。

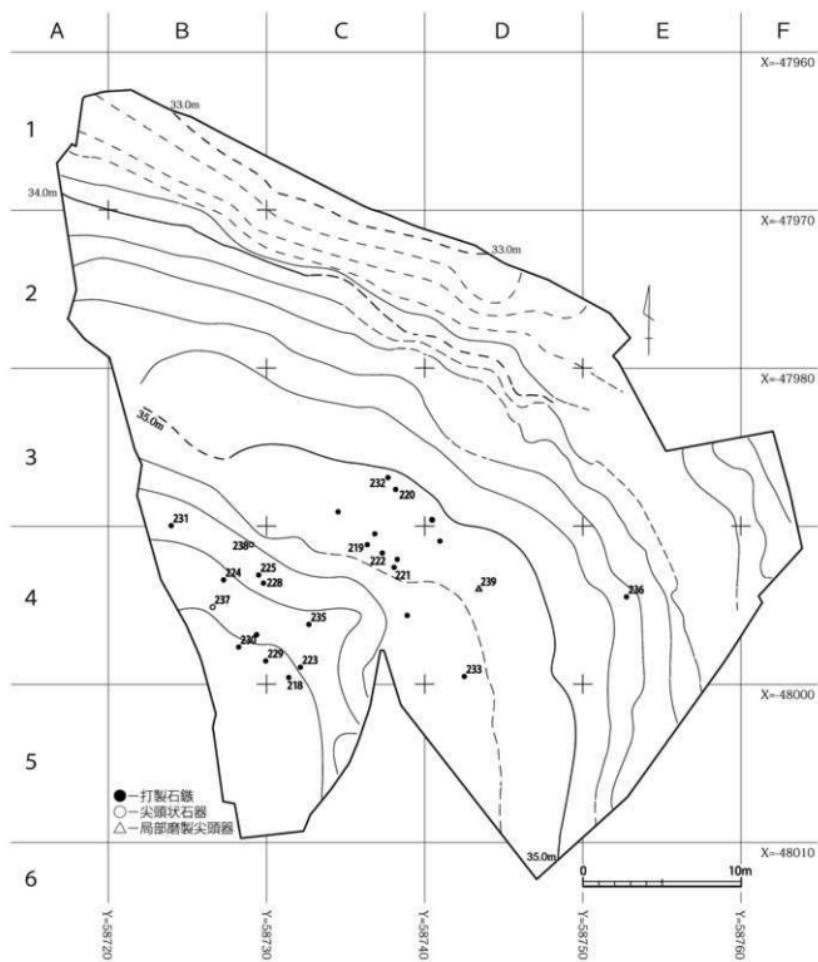
局部磨製尖頭器(第 72 図 239)

239 の 1 点のみの出土、D 4 グリッドで確認されている。千枚岩製。細身で基部を欠損している。表面の右側縁の剥離は新しく、リダクションの可能性が高い。

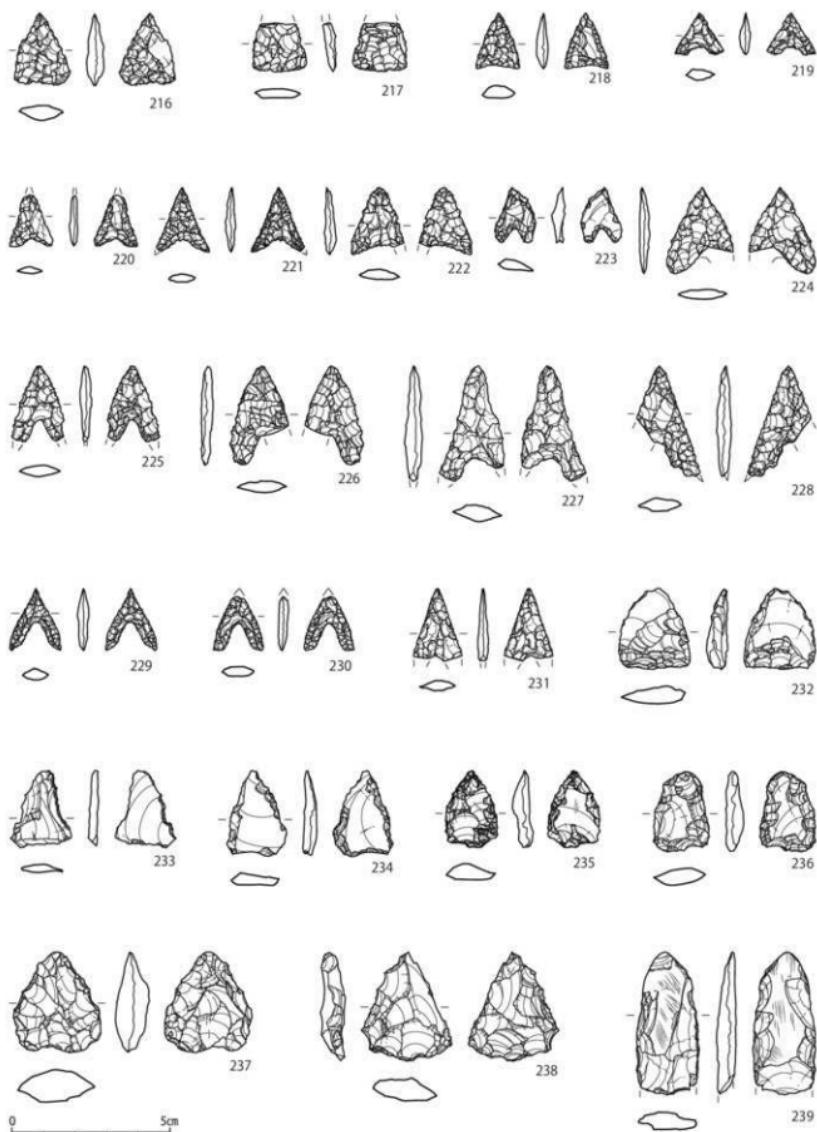
スクレイパー(第 74 図 240 ~ 249、第 75 図 250・251)

スクレイパーは 31 点出土し、D 3 グリッドから D 4 グリッドにかけて比較的まとまって出土している。石材はホルンフェルス(II・VI 類)8 点、チャート(II・III・VI 類)8 点、千枚岩 5 点、流紋岩 I (a・f) 類 4 点、砂岩 3 点、緑色凝灰岩 3 点、頁岩 2 点が利用されるなどバリエーションが豊富である。

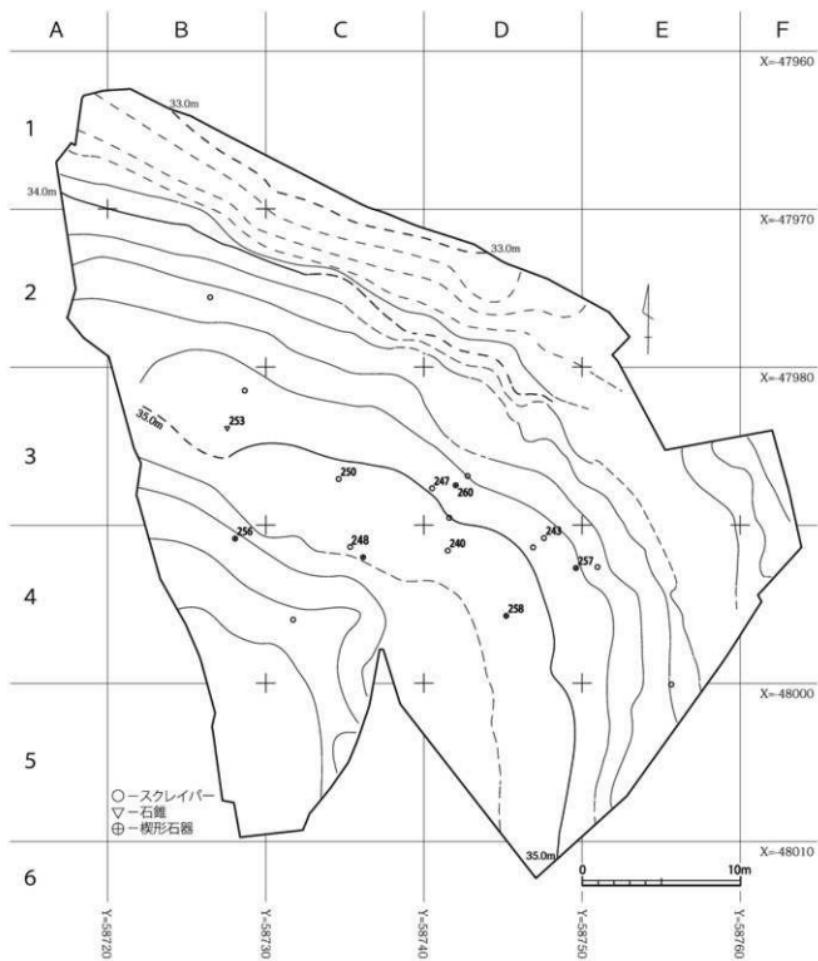
240・241 はラウンドスクレイパーである。千枚岩製。いずれも両面から縁周に加工を施し、刃部を作り出している。どちらも一部に礫面を残す。



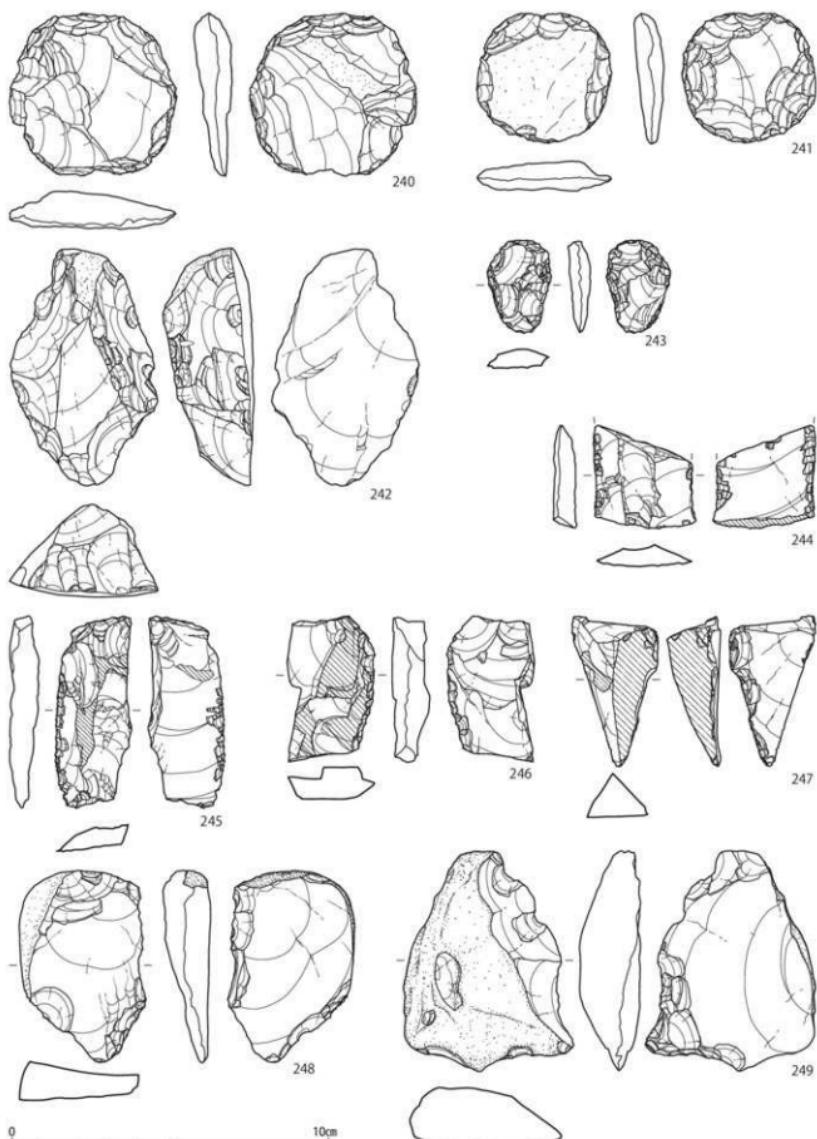
第72図 A地点 打製石器・尖頭状石器・局部磨製尖頭器分布図 (S=1/300)



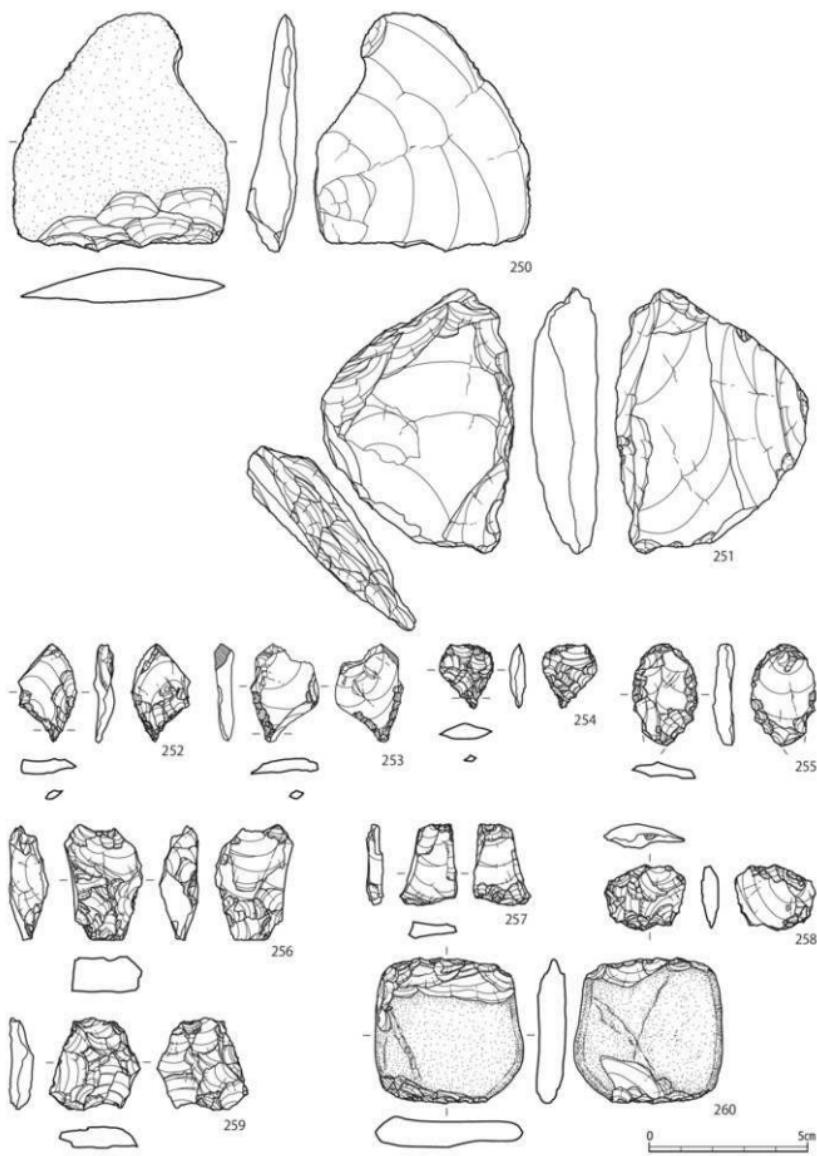
第72図 A地点 繩文時代早期石器実測図1 (S=2/3)



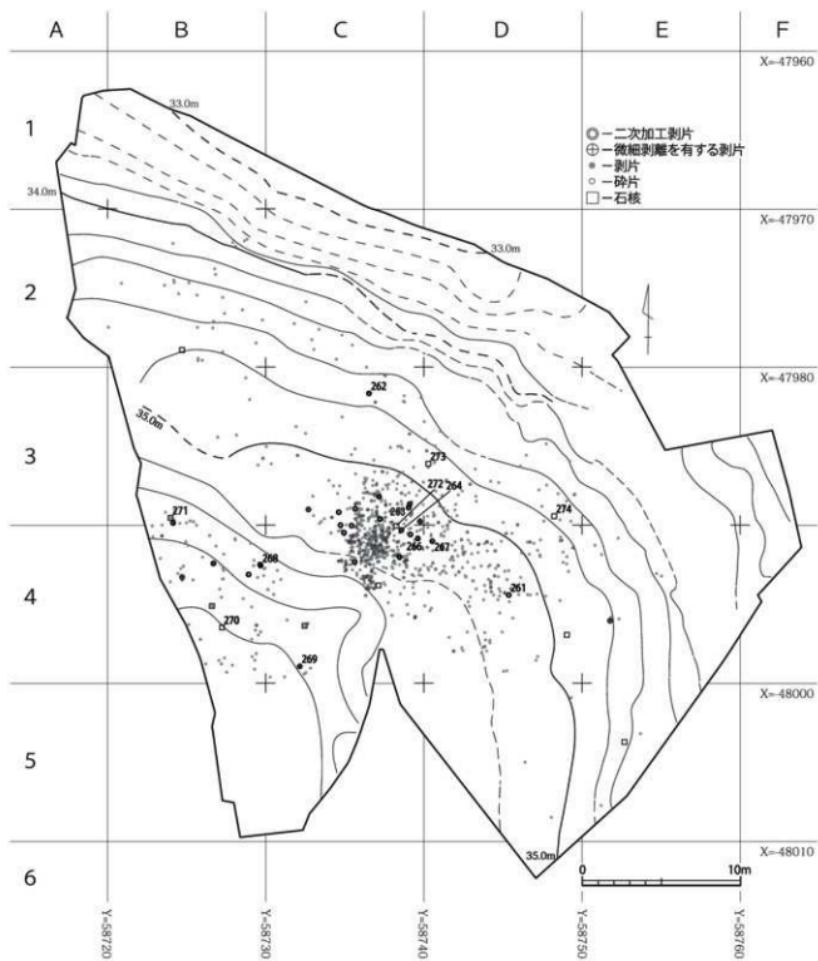
第73図 A地点 スクレイパー・石錐・模形石器分布図 (S=1/300)



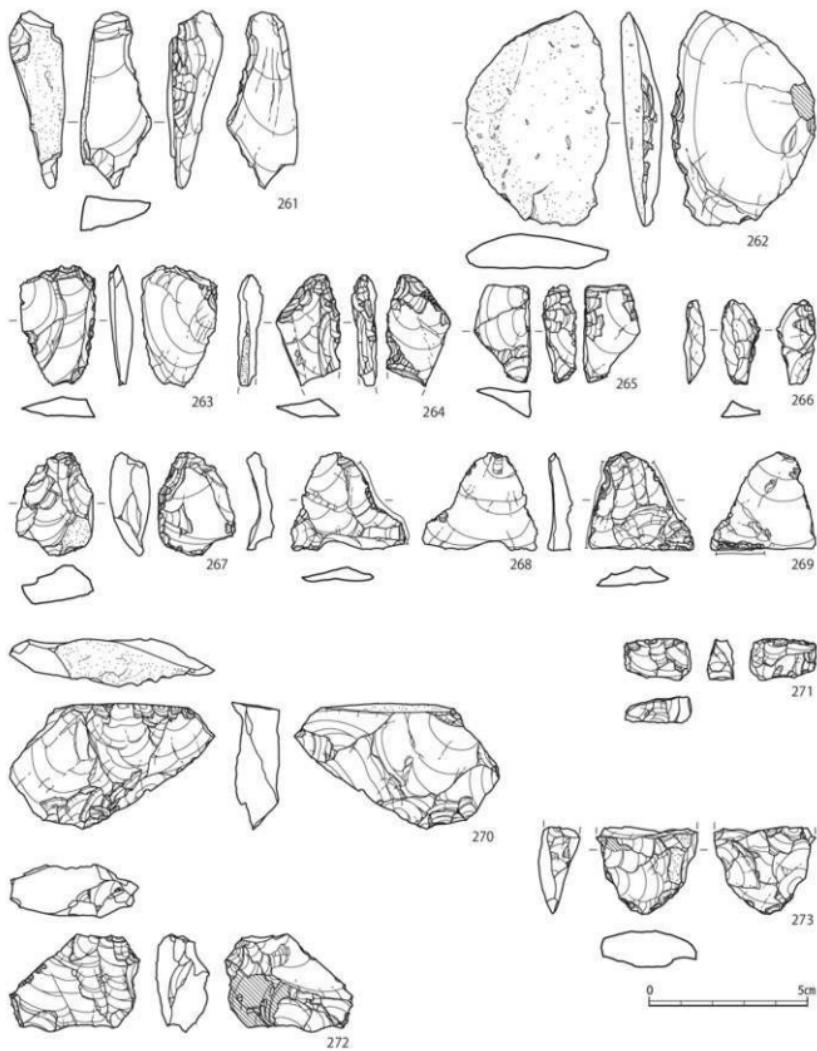
第74図 A地点 繩文時代早期石器実測図2 (S=2/3)



第75図 A地点 繩文時代早期石器実測図3 (S=2/3)



第 76 図 A 地点 剥片類・石核分布図 ($S=1/300$)

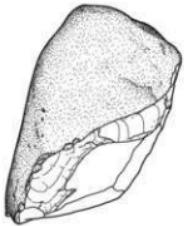


第77図 A地点 繩文時代早期石器実測図4 (S=2/3)

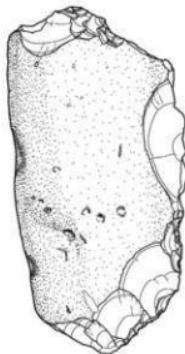
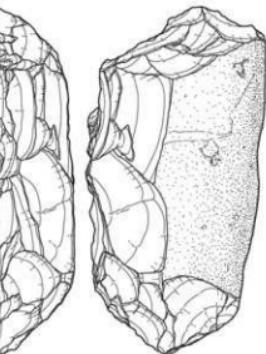
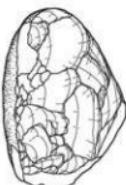
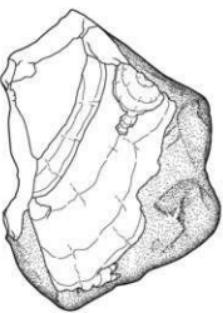
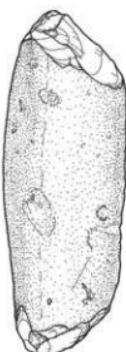
10cm

第78図 A地点 繩文時代早期石器実測図5 (5-1/2)

274



275



242はエンドスクレイパーである。主要剥離面より縁周に沿って加工を施す。石核を転用したものと考えられる。緑色凝灰岩製。

243～251はサイドスクレイパーである。そのうち243はチャートVI類製、244～246はチャートII類製である。243は小型で二側縁に刃部を作り出している。244～246は縦長剥片を素材して、244は両側縁に、245・246は一侧縁に両面から直線的な加工を施し、刃部を形成している。いずれもB4グリッド出土。247は頁岩製。248は緑色凝灰岩製。幅広の剥片を素材に右側縁から左側縁下部にかけて、右側縁下部のみ主要剥離面側から、その他は表面側より加工を行い、刃部を作り出している。249はホルンフェルスIV類製。礫面を有する幅広の剥片を素材として、末端を角状に作り出している。石錐の可能性も考えられる。259は末広がりの剥片を素材にして、右側縁側を主要剥離面側から加工を施し、直線的な刃部を形成している。251は縁周に加工が施されているが、右側縁以外は急角度であることから、整形のための加工と考えられる。

石錐（第75図252～255）

石錐は252～255の4点（254のみチャートIV類製、他はチャートII類製）出土している。254以外は両面とも素材時の剥離面を大きく残し、252は打面側に、253・255は末端側にそれぞれ錐部を作り出している。また254の作りは比較的丁寧であり、裏面上部以外は加工が全面に及ぶ。

楔形石器（第75図256～260）

楔形石器は8点出土し、3点のみ砂岩、その他はチャートII・V類製である。256～259はチャート製（259のみV類、他はII類）で石核や剥片を素材として対向する面に並行して剥離が並ぶ。いずれも断面形は紡錘形に近い形状であり、特に257・258では上下両端につぶれが認められる。それに対し、260は砂岩の扁平な礫を素材にして両端に剥離が施され、部分的につぶれが認められる。

二次加工剥片（第77図261～267）

二次加工剥片は24点確認されている。利用石材はチャート（II・III・VII類）18点、流紋岩I（a-f）類3点、ホルンフェルス（V・VI類）2点、緑色凝灰岩1点である。分布は大半がC3グリッド南側からC4グリッドにかけて認められる石器集中部と重なる。

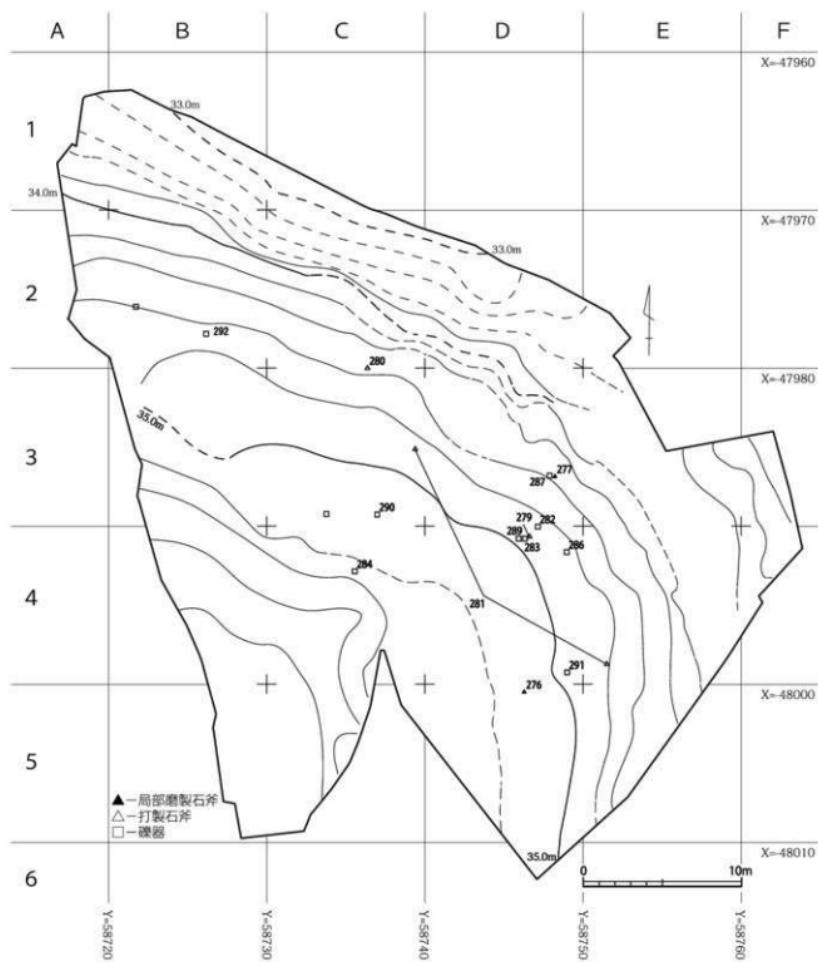
261は緑色凝灰岩製で、左側面に礫面を有する縦長剥片を素材に、右側縁に表面から急角度の加工を施している。262は表面に礫面を有する横長の剥片の末端の中央に二次加工が認められる。流紋岩Ia類製。263～267はチャート製（265・267はVII類、他はII類）である。263や265、266のように部分的に加工が認められるものや264や267のように打面除去を行うものなどが認められる。

微細剥離を有する剥片（第77図268・269）

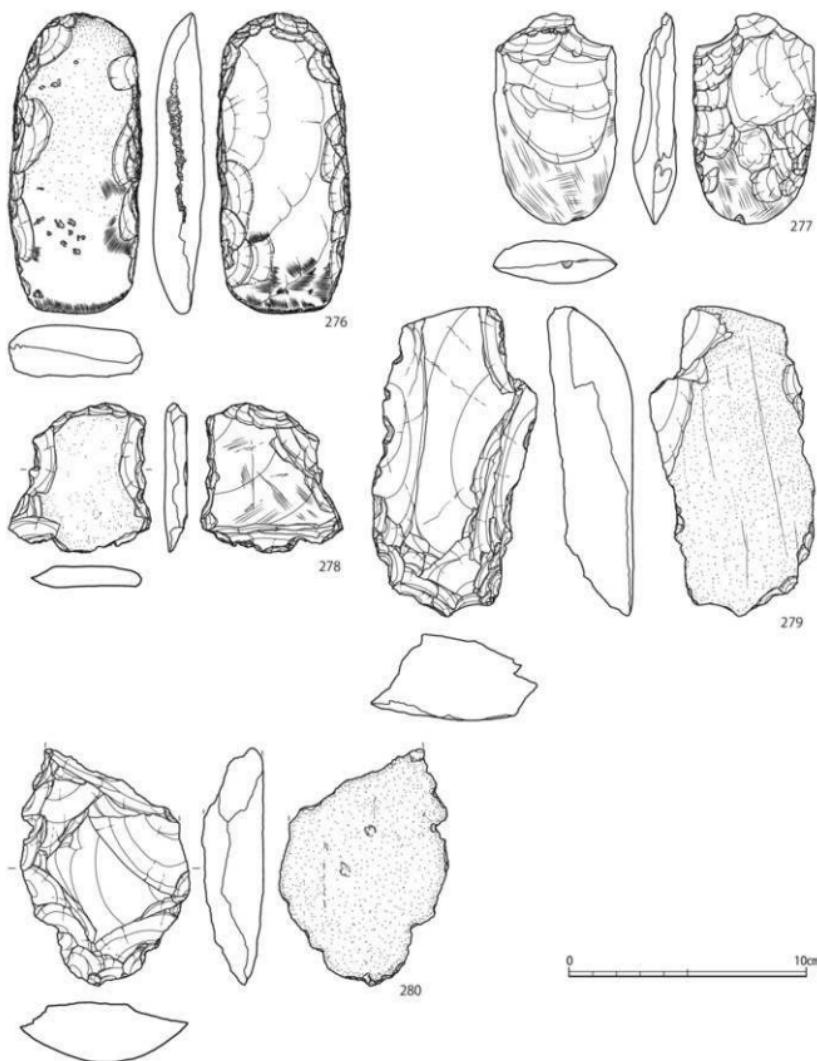
微細剥離を有する剥片は8点が確認されており、すべてチャート製（I～III・VII類）である。268・269はハの字に広がる剥片を素材に268は右側縁、269は両側縁及び下部に剥離痕が認められる。

石核（第77図270～273、第78図274・275）

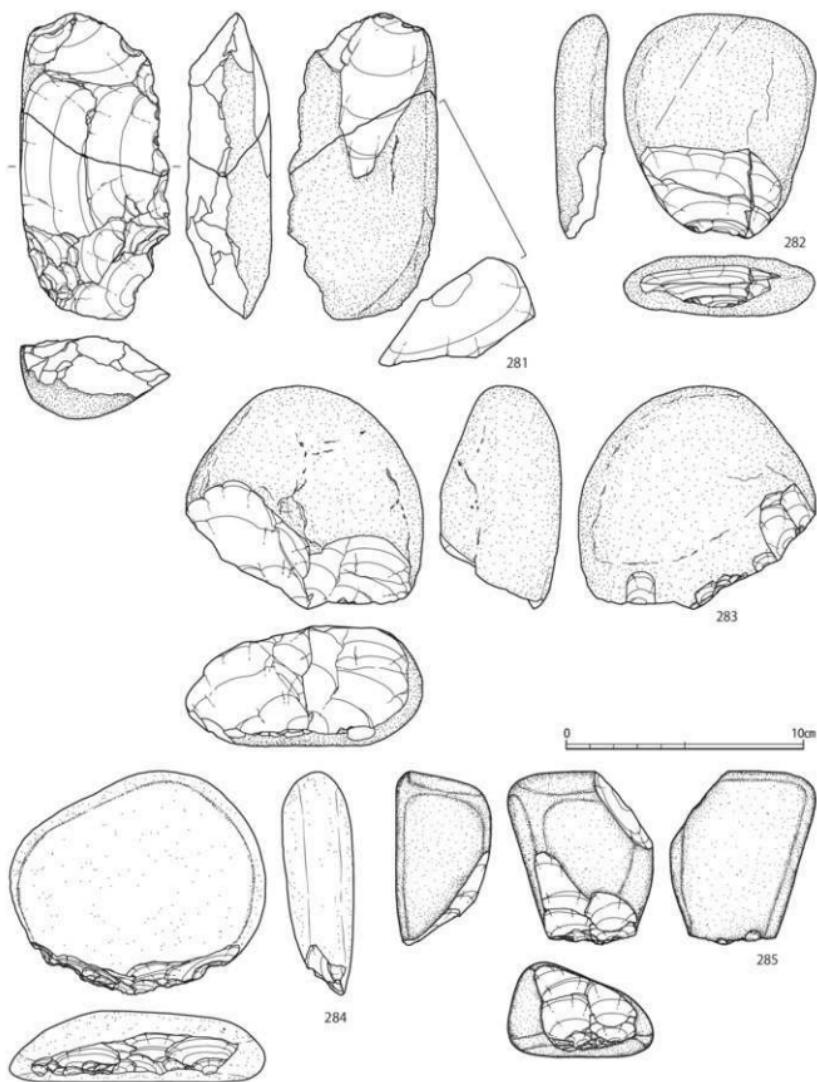
石核は18点出土している。利用石材はチャート（II・III・V・VII類）10点、ホルンフェルス（IV・VI類）4点、水晶3点、砂岩2点である。そのうち271～273はチャート製（272のみV類、他はII類）である。270は扁平な石核で上面には礫面を残す。主に礫面より剥離作業が行われており、下端には両極打法による小剥離が認められる。271は断面三角形を呈する石核で、上面及び裏面を作業面として小剥片の剥離を行う。272は厚みのある剥片を素材として、素材時の打面をそのまま利用し、主要剥



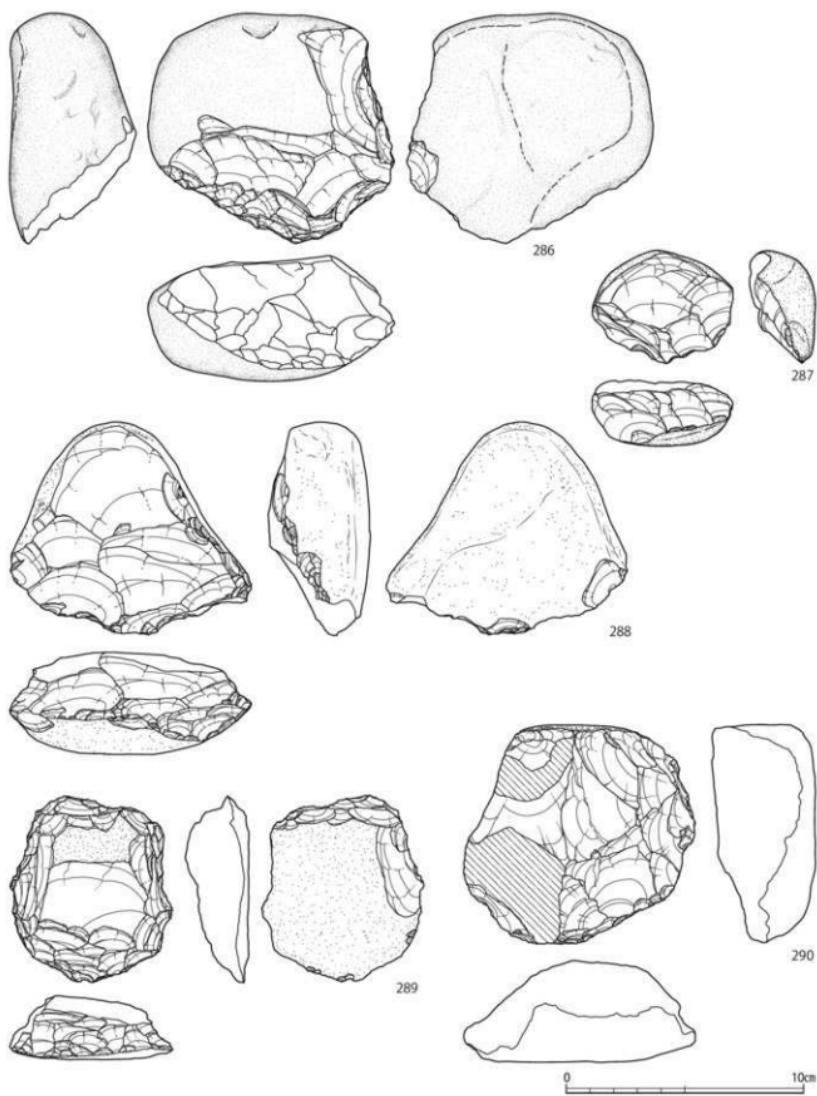
第79図 A地点 局部磨製石斧・打製石斧・穢器分布図 (S=1/300)



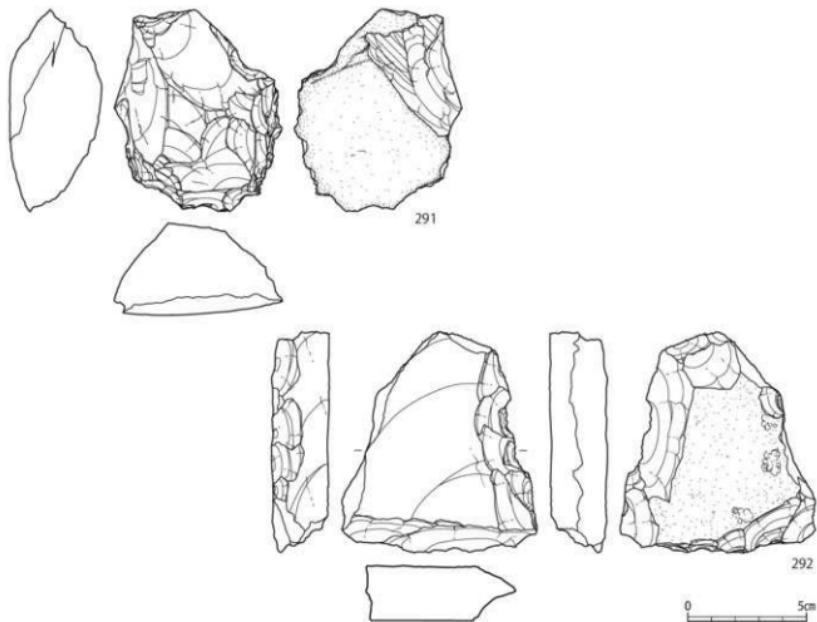
第80図 A地点 繩文時代早期石器実測図6 (S=1/2)



第 81 図 A 地点 繩文時代早期石器実測図 7 (S=1/2)



第82図 A地点 繩文時代早期石器実測図8 (S=1/2)



第83図 A地点 縄文時代早期石器実測図9 (S=1/2)

離面側を作業面としている。なお、左側縁には微細な剥離痕が認められる。273は剥片素材の石核である。表面及び主要剥離面の二面を作業面とし、そのうち表面側は右側面側を打面として作業を行うのに対し、主要剥離面側は求心状に剥片剥離を行なう。274はホルンフェルスVI類型である。礫面を打面に設定し、同一方向より剥離作業を行なっている。275は流紋岩I a類である。上面を打面に設定し、打面に調整を加えながら、左側面から正面、右側面の三面を作業面にして、剥片剥離が行われている。

局部磨製石斧（第80図276・277）

2点のみ出土。276は礫面を有する横長の剥片を素材にして、縁辺を表裏両面から加工を施した後、敲打による整形が行われている。その後、刃部を中心に研磨が両面で行われている。刃部は緩やかな弧状を呈する。流紋岩I a類型でD 5グリッド出土。277は円刃を呈する。表面側に残る大きな剥離は、基部欠損時のものであり、裏面では再加工が行われている。D 3グリッド出土で流紋岩I f製。

打製石斧（第80図278～280、第81図281）

未製品も含めて4点の出土である。278のみ千枚岩製、その他は砂岩である。そのうち278は左右非対称で、右側縁には部分的に敲打痕が認められる。基部及び刃部側は欠損しており、その部分及び左側縁にリダクションが認められる。なお、主要剥離面側に認められる擦痕は後世のものか。279はD 4グリッド出土。礫面を有する厚みのある横長の剥片を素材に、両側縁に主に礫面から粗い加工を施した後、同様に礫面から刃部周辺の加工を行なっている。280・281は未製品である。どちらも礫面を有する

横長の剥片を素材の縁辺に粗い加工を施している。いずれも明確な刃部を形成されておらず、製作途中で折損している。

礫器（第81図282～285、第82図286～290、第83図291・292）

礫器は19点出土している。D3グリッド南側からD4グリッド北側で比較的まとまっている。利用石材の内訳は砂岩7点、ホルンフェルス（IV・V・VI）6点、流紋岩I（a・f）類4点、緑色凝灰岩1点、頁岩1点である。そのうちの282～291はチョッピング・トュールである。282は砂岩製の楕円礫の一端に一回の剥離によって刃部を形成している。283は厚みのある砂岩製円礫を分割後、分割面から礫面に部分的に平坦な加工を施し、刃部を作り出している。

284・285は礫の一端に、一方向から複数回の粗い剥離を行った後、調整を行い、刃部を作り出している。284は砂岩、285は頁岩製。287・288は礫を分割後、284・285同様に一方向から複数回の剥離を行い、刃部を整形している。287はホルンフェルスV類製、288は緑色凝灰岩製である。286・290は加工が半周から2/3に及ぶもので、刃部には細かな調整が施され、比較的丁寧な作りである。286は流紋岩Ia類、290はホルンフェルスVI類製。289・291は撞器的な用途が想定されるもので、そのうち289は扁平な砂岩礫を素材に、全周に加工を施している。上面から左側縁にかけて両面から加工を行っているものの、基本的には裏面から急角度に整形されている。291は分割礫を素材に礫面から急角度の加工を施し、刃部は鋸歯状を呈する。292は砂岩製の分割礫を素材として右側縁に両面から加工を行い、刃部を形成する。また下半は欠損後、礫面側に再加工を行っている。削器的な用途が想定される。

磨石（第85図293～298）

磨石は11点出土し、B3グリッド～D4グリッドにかけて出土している。利用石材の内訳は砂岩7点、尾鈴山酸性岩類2点、花崗岩2点である。

293・294は表面のみ不明瞭な磨面が認められる。293は砂岩製、294は凝灰岩製である。295・297・298は砂岩製。そのうち295は、上面及び右側面の2箇所に磨面が認められる。また297は表面及び両側面の三面に磨面が認められ、特に両側面は平らに成形されている。298は下半を欠損している。表裏面及び両側面に四面に磨面が認められる。特に両側面の磨面は顕著であり、平らに成形されている。D4グリッド出土。296は花崗岩製。表裏および両側面の四面に磨面が認められる。そのうち両側面の磨面は顕著であり、平らに成形されている。B4グリッド出土。

敲石（第85図299～301）

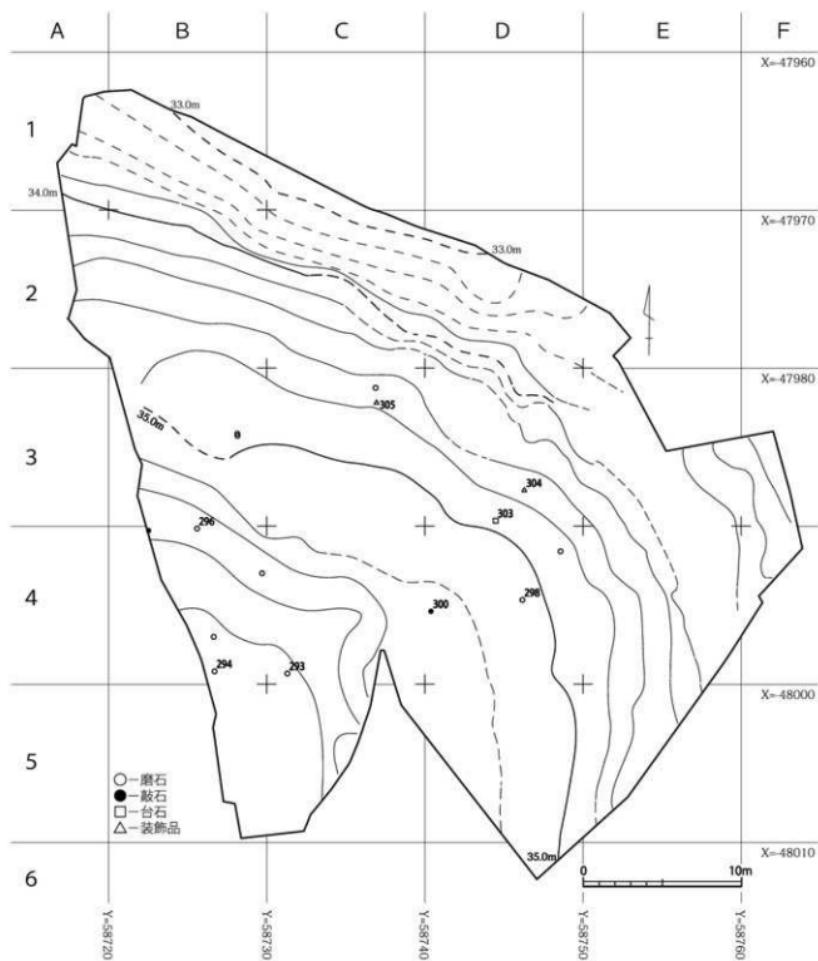
4点出土し、いずれも砂岩である。299は扁平な楕円礫の末端に敲打痕が認められる。また左側縁側には光沢な面が認められ、磨面と考えられる。300は楕円形礫の末端部分が敲打により、磨耗している。D4グリッド出土。301は棒状礫の下部側や左側面上部から表面中央にかけて敲打痕が認められる。C4グリッド出土。

凹石（第85図302）

2点出土で、302は砂岩製で全体的に赤化し、約半分は欠損している。中央に認められる凹痕はあまり発達しておらず、わずかに凹む程度である。なお上面には磨面が認められる。

台石（第85図303）

台石はD3グリッドで1点のみ確認されている。断面四角形の厚みのある礫の平坦な面には、部分的

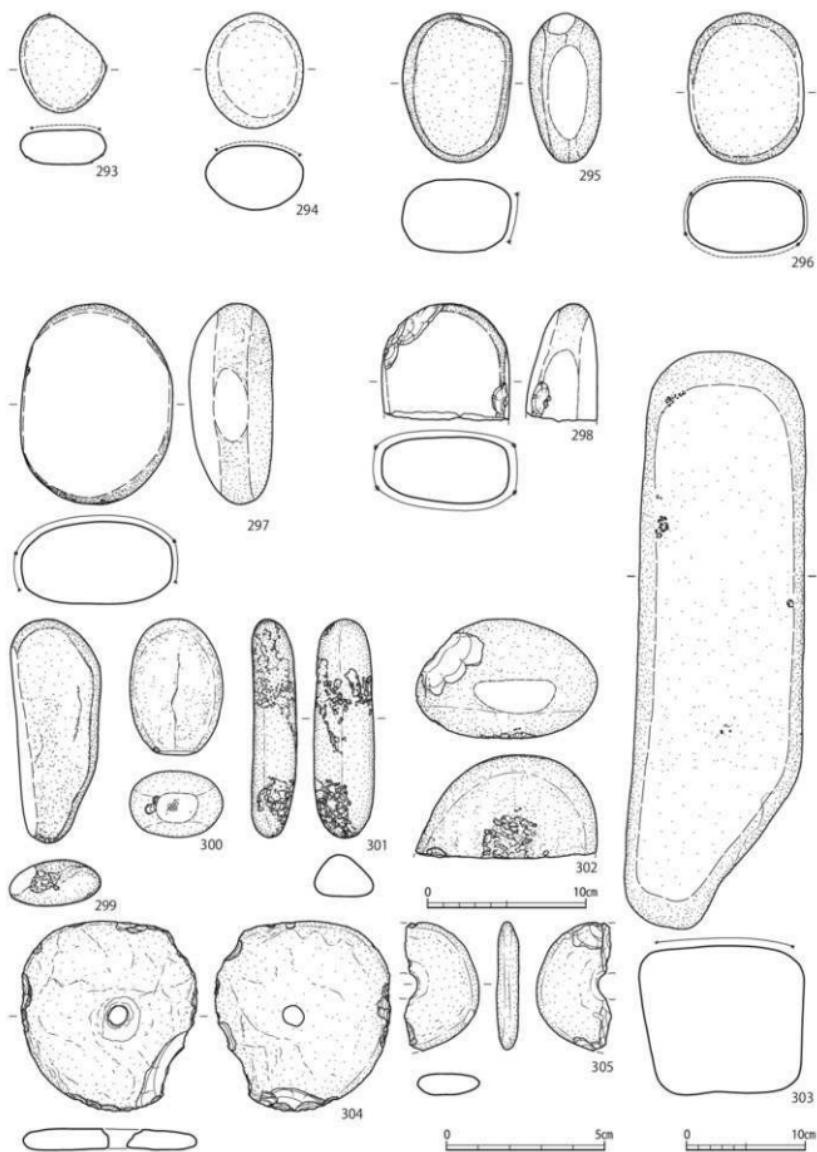


第 84 図 A 地点 磨石・敲石・台石・装飾品分布図 (S=1/300)

に敲打痕が認められる。

装飾品（第 85 図 304・305）

2 点の出土。304 は赤色頁岩製。D 3 グリッド出土で片面より穿孔を施している。また 305 は千枚岩製で、C 3 グリッド出土である。両面より中央に穿孔を施すが、約半分は欠損している。



第 85 図 A 地点 繩文時代早期石器実測図 10 ($S=1/4, 1/2, 2/3$)

図面番号	器種	注記番号	出土地点	層位	計測値				石材	備考
					最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)		
150	円石	A SP6	A・SP6	—	11.65	6.2	4.8	525.1	尾鷲山酸性岩類	
151	スクレイバー	A SC6	A・SC6	—	6.8	3.5	1.92	39.1	頁岩	
154	尖頭状石器	A SC19	A・SC19	—	4.37	2.9	0.75	10.6	チャートⅡ	未製品か
216	打製石器	A B4 V層	A・B4	V	2.25	1.8	0.55	1.54	チャートⅡ	
217	打製石器	A D4 V層	A・D4	V	1.55	1.7	0.4	1.1	チャートV	先端部欠損
218	打製石器	A V-1148	A・C4	V	1.3	1.5	0.4	0.38	チャートV	
219	打製石器	A V-2428	A・C4	V	1.75	1.35	0.4	0.65	チャートV	
220	打製石器	A V-2081	A・C3	V	1.6	1.35	0.3	0.4	チャートⅡ	先端部欠損
221	打製石器	A V-1958	A・C4	V	2	1.65	0.35	0.54	チャートVII	片脚欠損
222	打製石器	A V-1170	A・C4	V	2.1	1.7	0.4	0.88	チャートⅡ	片脚欠損
223	打製石器	A V-2437	A・C4	V	1.7	1.3	0.15	0.55	チャートVIII	
224	打製石器	A V-2608	A・B4	V	2.7	2.1	0.35	1.35	チャートVII	片脚欠損
225	打製石器	A V-2295	A・B4	V	2.4	1.65	0.35	0.94	チャートVII	脚端欠損
226	打製石器	A C5 V層	A・C5	V	3.14	1.85	0.4	1.7	チャートⅡ	片脚欠損
227	打製石器	A C4 V層	A・C4	V	3.65	1.6	0.65	2.33	流紋岩I a	内脚欠損
228	打製石器	A V-2521	A・B4	V	3.5	2	0.5	1.84	チャートⅡ	片脚、片脚端欠損
229	打製石器	A V-2358	A・B4	V	1.95	1.6	0.4	0.51	チャートVII	
230	打製石器	A V-2334	A・B4	V	1.7	1.6	0.35	0.51	チャートⅡ	先端部欠損
231	打製石器	A V-2585	A・B4	V	2.3	1.5	0.35	0.7	姫島産ガラス質 安山岩	内脚欠損
232	打製石器	A V-1197	A・C3	V	2.55	2.25	0.68	4	チャートⅡ	未製品
233	打製石器	A V-147	A・D4	V	2.4	1.9	0.3	1	チャートⅡ	未製品
234	打製石器	A V-レキ群	A・南側散謫	V	2.7	1.85	0.4	1.9	チャートⅡ	未製品
235	打製石器	A V-2445	A・C4	V	2.45	1.65	0.7	チャートⅡ	未製品	
236	打製石器	A V-466	A・E4	V	2.55	1.75	0.55	2.7	チャートVIII	未製品
237	尖頭状石器	A V-2268	A・B4	V	3.2	2.75	1.05	7.45	流紋岩I a	
238	尖頭状石器	A V-2303	A・B4	V	3.45	2.85	0.8	6.9	チャートⅡ	
239	局部磨製尖頭器	A V-1431	A・D4	V	4.5	2	0.6	5.6	千枚岩	基部欠損
240	スクレイバー	A V-1543	A・D4	V	5.15	5.3	1.2	26.3	千枚岩	
241	スクレイバー	A B4 V層	A・B4	V	4.1	4.25	0.95	16.9	千枚岩	
242	スクレイバー	A	A	—	7.55	4.7	2.9	87.5	緑色凝灰岩	
243	スクレイバー	A V-1609	A・D4	V	2.95	2.05	0.7	4.1	チャートVII	
244	スクレイバー	A B5 V層	A・B5	V	3.3	3.3	0.7	8.2	チャートⅡ	
245	スクレイバー	A B4 V層	A・B4	V	6.1	2.4	0.9	12.5	チャートⅡ	
246	スクレイバー	A V-レキ群	A・南側散謫	V	4.65	2.75	1.2	16.5	チャートⅡ	
247	スクレイバー	A V-1213	A・D3	V	4.75	2.7	1.7	13.2	頁岩	

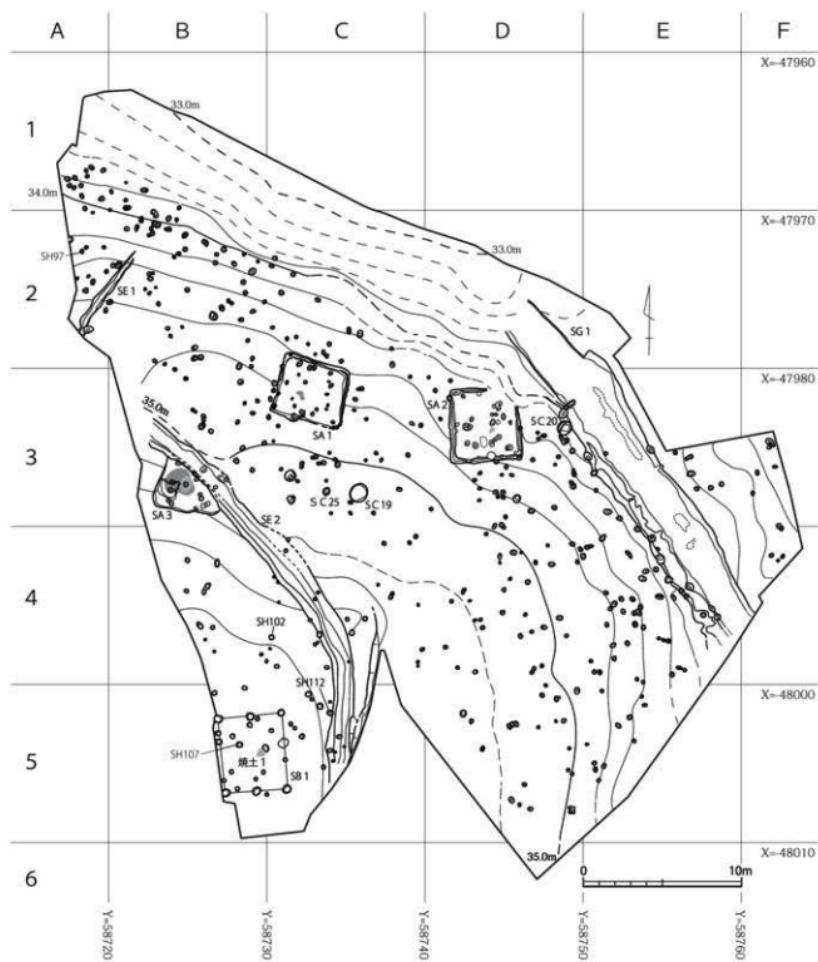
第13表 A地点 繩文時代早期石器計測表1

図面番号	器種	注記番号	出土地点	層位	計測値				石 材	備 考
					最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)		
248	スクレイバー	A SG1	A・SG1	—	6.95	5.4	1.93	72.8	ホルンフェルスⅣ	
249	スクレイバー	A V-962	A・C4	V	6.1	4	1.5	35.5	緑色凝灰岩	
250	スクレイバー	A V-206	A・C3	V	7.6	6.85	1.6	68.3	砂岩	
251	スクレイバー	A SA3	A・SA3	—	8.35	6.1	2.1	119.7	千枚岩	
252	石鏨	A V層	A	V	3.1	1.85	0.65	3.2	チャートⅡ	
253	石鏨	A V-42	A・B3	V	3.15	2.15	0.6	3.5	チャートⅡ	
254	石鏨	A B4 V層	A・B4	V	2.05	1.7	0.5	1.4	チャートⅧ	
255	石鏨	A B5 V層	A・B5	V	3.2	2.03	0.67	3.8	チャートⅡ	端部欠損
256	楔形石器	A V-2271	A・B4	V	3.65	2.5	1.2	12.5	チャートⅡ	
257	楔形石器	A V-1410	A・D4	V	2.55	1.85	0.5	2.5	チャートⅡ	
258	楔形石器	A V-1754	A・D4	V	2.1	2.55	0.75	3.6	チャートⅡ	
259	楔形石器	A B4 V層	A・B4	V	2.9	2.85	1.25	6.3	チャートⅧ	
260	楔形石器	A V-675	A・D3	V	4.6	4.7	1	30.2	砂岩	
261	二次加工剥片	A V-418	A・D4	V	5.63	2.2	1.65	17.6	緑色凝灰岩	
262	二次加工剥片	A V-142	A・C3	V	6.8	4.55	1.3	37	流紋岩Ⅰ	
263	二次加工剥片	A V-672	A・C3	V	3.85	2.35	0.75	6.5	チャートⅡ	
264	二次加工剥片	A V-1722	A・C4	V	3.5	2.05	0.8	4.6	チャートⅡ	
265	二次加工剥片	A V-レキ群	A・南側散羅	V	3.1	1.8	1.05	5	チャートⅧ	
266	二次加工剥片	A V-296	A・C4	V	2.7	1.25	0.65	1.7	チャートⅡ	
267	二次加工剥片	A V-343	A・D4	V	3.3	2.4	1.3	9.7	チャートⅧ	
268	使用痕剥片	A V-2484	A・B4	V	3.1	3.7	0.85	5.2	チャートⅡ	
269	使用痕剥片	A V-2437	A・C4	V	3.1	3.35	0.75	6.2	チャートⅡ	
270	石核	A V-2508	A・B4	V	3.95	6.45	1.5	33.6	チャートⅡ	
271	石核	A V-2538	A・B3	V	1.3	2.1	0.8	2.8	チャートⅡ	
272	石核	A V-425	A・D3	V	3.05	4.05	1.65	17.9	チャートⅤ	
273	石核	A V-1207	A・D3	V	2.8	3.2	1.3	9.8	チャートⅡ	
274	石核	A V-401	A・D3	V	7.4	12.7	9.3	863.8	ホルンフェルスⅥ	
275	石核	A I層	A	—	5.2	14.65	7.6	749.56	流紋岩Ⅰa	
276	局部磨製石器	A V-2073	A・D5	V	12.65	5.7	2.2	220.12	流紋岩Ⅰa	
277	局部磨製石斧	A V-681	A・D3	V	8.9	5.2	1.8	78.8	流紋岩Ⅰe	
278	打製石斧	A C4 V層	A・C4	V	6.3	6	0.95	46.1	千枚岩	
279	打製石斧	A V-408	A・D4	V	13.05	6.95	3.6	294.3	砂岩	
280	打製石斧	A V-143	A・C2	V	9.95	7.15	2.6	168.8	砂岩	石斧未製品
281	打製石斧	A V-439+ A V-355	A C 3・E 4	V	12.9	6.3	3.6	339.2	砂岩	石斧未製品
282	礫器	A V-404	A・D4	V	9.4	8.1	2.55	236.8	砂岩	

第14表 A地点 繩文時代早期石器計測表2

図面番号	器種	注記番号	出土地点	層位	計測値				石材	備考
					最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)		
283 砲器	A	V-1563	A・D 4	V	9.4	10	5.1	567.4	砂岩	
284 砲器	A	V-98	A・C 4	V	9.45	10.75	3	374.1	砂岩	
285 砲器	A	V屑	A	—	7.3	6.15	4	233.1	頁岩	
286 砲器	A	V-2011	A・D 4	V	9.8	10.4	5.4	615.6	流紋岩I a	
287 砲器	A	V-378	A・D 3	V	4.75	5.9	2.78	86.8	ホルンフェルスV	
288 砲器	A	A	—	9	10.2	4.3	402.4	緑色凝灰岩		
289 砲器	A	V-410	A・D 4	V	7.85	6.85	2.7	157.2	砂岩	スクレイバーの可能性あり
290 砲器	A	V-793	A・C 3	V	9.25	9.4	4.3	470.3	ホルンフェルスVI	
291 砲器	A	V-434	A・D 4	V	8.5	7.1	3.9	223.2	流紋岩I f	スクレイバーの可能性あり
292 砲器	A	V-155	A・B 2	V	9.3	9.25	2.4	231.9	砂岩	スクレイバーの可能性あり
293 磨石	A	V-2427	A・C 4	V	6.15	5.45	2.2	96.1	砂岩	
294 磨石	A	V-2514	A・B 4	V	7.25	6.15	4.05	254.4	尾鈎山酸性岩類	
295 磨石	A	V屑	A	—	9.35	6.9	4.56	450.5	砂岩	
296 磨石	A	V-2217	A・B 4	V	9.5	7.3	4.55	478.4	花崗岩	
297 磨石	A	A	—	12.6	9.55	5.19	954.3	砂岩		
298 磨石	A	V-420	A・D 4	V	7.3	8	4.2	387.4	砂岩	約1/2欠損
299 敷石	A	V屑	A	—	14	5.6	2.9	328	砂岩	
300 敷石	A	V-288	A・D 4	V	8.55	5.85	4.2	301.6	砂岩	
301 敷石	A	C4 V屑	A・C 4	V	13.8	3.8	2.6	228.5	砂岩	
302 門石	A	C4 V屑	A・C 4	V	6.5	11.4	7.55	716.7	砂岩	
303 台石	A	V-1475	A・D 3	V	48.9	15.2	14.8	14900	砂岩	
304 装飾品	A	V-677	A・D 3	V	6	5.55	0.7	34.7	赤色頁岩	
305 装飾品	A	V-2312	A・C 3	V	4.1	2.4	0.7	9.7	千枚岩	約1/2欠損

第15表 A地点 繩文時代早期石器計測表3



第86図 A地点 繩文時代晩期～中世遺構分布図 (S=1/300)

2. 縄文時代後期～晩期の遺構と遺物

(1) 遺構

遺構は焼土1、柱穴を確認した。そのうち柱穴については埋土の中位から上位にかけて遺物が確認されており流れ込みの可能性が高いが、327のようにほぼ完形に復元されるものも確認されている。

焼土（第87図）

焼土1はB5グリッドからC5グリッドにかけて確認されている。0.28m+α×0.25mの範囲に焼土が広がり、深さは5cm程度で、断面は皿状に凹む。遺構の北東側は時期不明の柱穴に切られる。出土遺物は、縄文時代晩期の土器片が出土しているため、同時代の所産と考えられる。しかし近世の掘立柱建物跡と分布が重なるため、同遺構の附属施設の可能性も捨てきれない。

遺物は焼土中より縄文時代晩期の土器片が15点、約3個体が出土している。ここでは、そのうち2個体について図化を行った。306は深鉢の口縁部片か。内外面とも横方向のミガキが認められる。307は深鉢の胴部片。外面に横位～斜位の貝殻条痕を粗く施し、内面には丁寧なミガキ調整が行われている。

(2) 土器（第88図 308～328）

A地点では縄文時代後期～晩期の遺物が出土しているが、大半は他時代の遺構への流れ込み等である。そのうち308～315は後期、316～328が晩期の所産と考えられる。

308～312は、口縁部及び胴部の資料である。そのうち308・310～312は胴部が張らず、外反しながら口縁部が開くもので、内外面とも、貝殻条痕調整やナデ調整が認められる。なお312には外面に貝殻腹縫による刺突文が斜位一列に施されている。また309は口縁部が外反するもので外面はナデ調整、内面は貝殻条痕の後、ナデ調整が行われている。口唇部はあまり整形されておらず、歪である。

313～315は底部の資料である。薄手で底端に丸みをもつもの（313）や厚手で底端がやや角張るもの（314・315）が認められる。

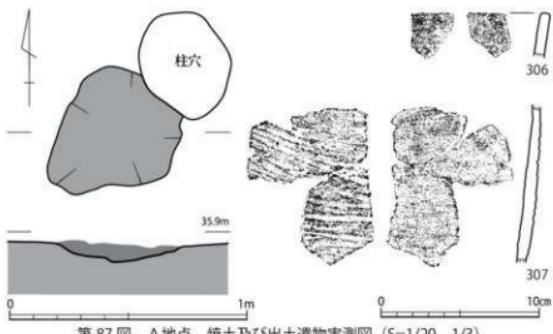
これらは、器形や条痕調整等の特徴から後期中葉の貝殻文系土器に併行もしくはそれ以降の所産と考えられる。

316～321は精製浅鉢、322～328は粗製浅鉢である。そのうち316・317・320は精製の浅鉢で、口縁部が大きく外反し、口径が胴部最大径よりも大きいもので、胴部外面に明瞭な稜が認められる。内外面ともヘラミガキが施されている。口縁部は316のように平らに整形されるものと317のように口

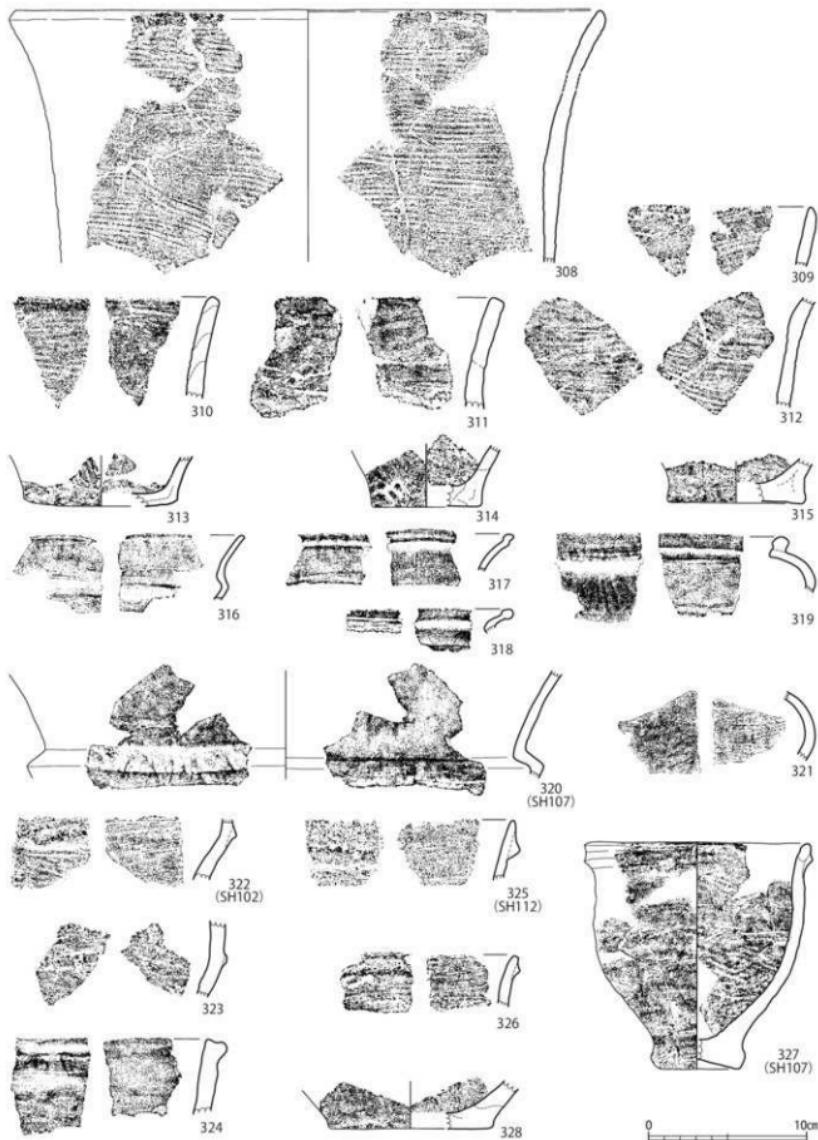
縁部は玉縁状を呈するものが認められる。これらは入佐式土器に相当すると考えられる。

318～320は黒川式土器の精製浅鉢に相当する。319・320は丸い胴部を有する一群で、そのうち319は短い玉縁状の口縁部を有する。また318は玉縁状の口縁を呈し、短い頸部を持つ。

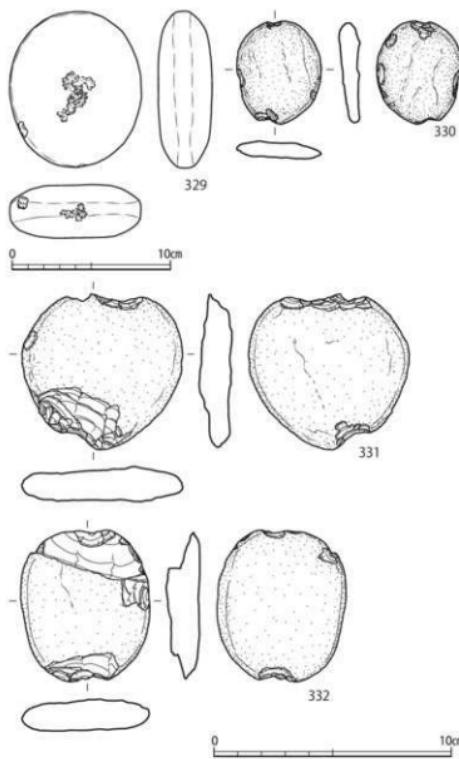
322・323は深鉢の胴部片資料で、「く」の字に屈曲し、屈曲部に突帯を有する。なお、



第87図 A地点 焼土及び出土遺物実測図 (5=1/20, 1/3)



第 88 図 A 地点 繩文時代後期～晩期土器実測図 (S=1/3)



第89図 A地点 縄文時代後期～晩期石器実測図 (S=2/3)

322の屈曲部下には貝殻条痕調整が認められる。突帯文期に相当されると考えられる。

324は深鉢もしくは鉢の口縁部で、厚みのある突帯を有する。表面はナデ調整を行い、口唇部はやや凹む。325～327は突帯を有する土器群で、胴部で膨らみ、外反しながら口縁部が開く器形で、底部は上げ底を呈する。これらの資料は黒川式に併行するものと考えられる。328は平底で表面にはナデ調整を施されている。

(3) 石器 (第89図 329～332)

表土中もしくはII層中で確認された石器のうち、縄文時代後期～晩期の可能性があるものを抽出し、図化を行った。

329は四石である。砂岩製で中央や下端に敲打痕が認められる。また磨面は表裏、側面に認められ、特に側面は使用により、稜が形成されている。

330～332は打欠石錘である。いずれも千枚岩製。そのうち331・332は扁平な礫の長軸側を両面から加工を行い、紐掛部を作り出す。また330は小型の扁平な礫の長軸・短軸の4箇所に紐掛部を有する。

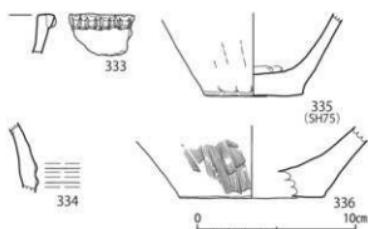
3. 弥生時代 (第90図 333～336)

A地点では、弥生時代の遺物がわずかながら確認されている。ここでは一部について紹介したい。

333は甕の口縁部である。口縁端部に貼付突帯を有し、逆L字状を呈する。突帯にはヘラ状工具による刻目を施し、外面には工具ナデが認められる。弥生前期末～中期前半の亀ノ甲系土器と考えられる。

334は甕の胴部片である。2条の貼付突帯が巡る。弥生中期の所産と考えられる。

335は甕、336は甕の底部と考えられる。そのうち336は外面にハケ目調整が認められる。



第90図 A地点 弥生時代土器実測図 (S=1/3)

表面 番号	器種	出土 地点	層位	手法・調整・文様ほか		焼成	色調		埴土の特徴	備考
				外 面	内 面		外 面	内 面		
306	深鉢	A 口縁部	地土 1	一	ミガキ	ミガキ	良好	黒褐色	黒褐色	1mm以下の灰白色粒を含む
307	深鉢	A 胴部	地土 1	一	横方向の貝殻条痕	ヘラミガキ	良好	黄褐色	黄褐色	1mm以下の灰白色・黒色粒を含む
308	深鉢	A 口縁部 ～胴部	S A 1	一	横・斜め方向の貝殻条痕	横・斜め方向の貝殻条痕	良好	に高い褐色	褐色	微細な透明光沢粒、1mm以下の黒色粒状光沢粒、2mm以下の灰白色粒、3mm以下の茶褐色粒を含む
309	深鉢	A 口縁部	S G 1	一	貝殻条痕	横・斜め方向の貝殻条痕	良好	に高い褐色	に高い褐色	1mm以下の透明光沢粒、3mm以下の灰白色を含む
310	深鉢	A 口縁部	A	V	横方向の貝殻条痕 後、ナデ	横方向の貝殻条痕 後、ナデ	良好	に高い褐色	に高い褐色	1mm以下の黒色・灰褐色・不透明光沢粒、2mm以下の灰白色・赤褐色粒を含む
311	深鉢	A 口縁部	S A 1	一	横方向のナデ 脂油痕	横方向のナデ 脂油痕	良好	に高い褐色	に高い褐色	微細な透明光沢粒、1mm以下の灰白色粒、2mm以下の茶褐色、3mm以下の不透明な光沢粒を含む
312	深鉢	A 胴部	S G 1	一	横・斜め方向の貝殻条痕	横方向の貝殻条痕	良好	に高い褐色	褐色	微細な光沢粒、1mm以下の灰褐色・灰白色粒、2mm以下の透明光・赤褐色粒を含む
313	深鉢	A 底部	S A 2	一	斜め方向の貝殻条痕 ナデ	ナデ 脂油痕	良好	に高い褐色	明赤褐色	2mm以下の灰褐色・褐色・茶褐色を含む
314	深鉢	A 底部	S A 1	一	斜め方向のナデ	斜め方向のナデ	良好	に高い褐色	に高い褐色	1mm以下の不透明光沢粒、4mm以下の灰褐色粒を含む
314	深鉢	A 底部	A	I	縦方向・横方向のナデ 脂油痕	縦方向のナデ 脂油痕	良好	に高い褐色	に高い褐色	1mm以下の不透明光沢粒、1.5mm以下の黒色状光沢粒、1.5mm以下の灰白色・灰褐色を含む
316	浅鉢	A 口縁部 ～胴部	A	II	横方向のミガキ	横方向のミガキ	良好	暗灰褐色 開灰色	黄褐色	1mm以下の白色・灰白色粒を含む 外面スリッピング
317	浅鉢	A 口縁部	S A 3	一	横方向のミガキ	横方向のミガキ	良好	暗褐色	暗灰褐色	0.5mm以下の灰白色・透明光沢粒
318	浅鉢	A 口縁部	A	I	沈線文 貝殻条痕	丁寧な横ナデ ミガキ	良好	暗褐色	暗褐色	微細な黒色状光沢粒、透明光沢粒を含む
319	浅鉢	A 口縁部 ～胴部	A	V	横方向のミガキ	横ナデ ミガキ	良好	暗褐色 黒褐色	開灰色	1mm以下の灰褐色・灰白色・黒色粒を含み、1mm以下黒色状光沢粒を少量含む
320	浅鉢	A 胴部	S H 107	一	横方向のミガキ	横方向のミガキ	良好	暗褐色	黑褐色	微細な透明光沢粒、1mm以下の灰白色粒を含む
321	浅鉢	A 胴部	A S A 3	一	横方向のミガキ	横方向の貝殻条痕の上 方ミガキかナデ	良好	灰褐色 黒褐色	開灰色	1mm以下の灰褐色・黒色粒、2.5mm以下の灰白色粒を含み、1mm以下の黒色状光沢粒を少量含む
322	深鉢	A 口縁部	S H 112	一	貼付空隙、ナデ 貝殻条痕後、ナデ	貝殻条痕後、丁寧なナデ	良好	褐色	に高い褐色	2mm以下の灰褐色・灰白色・赤褐色・3mm以下の茶褐色を含む 外面は模化が著しい
323	深鉢	A 胴部	S G 1	一	貼付空隙 脂油痕	丁寧な横ナデ 脂油痕	良好	に高い褐色	に高い褐色	1mm以下の灰褐色・灰白色粒、黑色柱状光沢粒、透明光沢粒を含む
324	深鉢	A 口縁部	S A 3	一	ナデ 口縁部に脂油痕	丁寧な横ナデ 脂油痕	良好	灰褐色	開灰色	1mm以下の茶褐色光沢粒、1mm以下の白褐色・茶褐色光沢粒を含む 外面スリッピング
325	深鉢	A 口縁部	S H 102	一	貼付空隙 ナデ	横ナデ	良好	褐色	明褐色	2mm以下の白褐色・半透明光沢粒、3mm以下の灰褐色を含む 外面とも全体的に模化が著しい
326	深鉢	A 口縁部	S A 1	一	貼付空隙 脂油痕	横方向に条痕	良好	黑褐色	開灰色	2mm以下の黑褐色・灰白色を含む
327	深鉢	A 口縁部 ～底部	S H 107	一	貼付空隙 横ナデ 脂油痕	工具による条痕 脂油痕	良好	に高い褐色	暗褐色	3mm以下の黒色柱状光沢粒、褐色粒を含む 指定H11径 14cm、高さ 15.5cm、 指定底径 5cm、 外面にスリッピング。内面に黒変化が著しい
328	深鉢	A 底部	S A 1	一	ナデ 脂油痕	ナデ	良好	浅黃褐色 に高い黄褐色	1mm以下の不透明光沢粒、1.5mm以下の灰白色・灰褐色を含む 指定底径 10.1cm、内外とも風化が著しい	

第16表 A地点 繩文時代後晩期土器観察表

表面 番号	器種	注記番号	出土地点	層位	計測値				石材	備考
					最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)		
329	円石	A I層	A	I	9.8	8.3	3.4	417.7	砂岩	
330	石鍬	A I層	A	I	6.4	5.4	1.31	65.3	千枚岩	
331	石鍬	A C2 I層	A	I	6.55	6.75	1.5	90.3	千枚岩	
332	石鍬	A	A	—	4.35	3.55	0.87	18.4	千枚岩	

第17表 A地点 繩文時代後晩期石器計測表

番号	器種	出土地点	法量(cm)	手法・調整・文様ほか		焼成		色調		胎土の特徴	備考
				口徑	底部	底部	内面	外	内面		
333	壺	A 口縁部 SA 3		削り突滑、横方向にナデ	横方向ナデ後 斜め方向に工具ナデ	に削り方向の 口縁部は楕円形にナデ	良好	に赤い褐色	に赤い褐色	2mm以下の暗灰色粒、3mm以下の灰 白色・褐色粒を含む	
334	壺	A 肩部 SA 3		貼付突滑、ナデ	横方向のナデ	良好	に赤い褐色	黒褐色		3mm以下の黒色光沢粒、4mm以下の 灰褐色粒、6mm以下の暗灰色粒を含 む	
335	壺	A 底部 SH 7	6.3	工具ナデ、指捺え 底部はナデ	ナデ 全体的に楕化	良好	に赤い褐色	褐色	2mm以下の灰白色・灰褐色粒を含み、 2mm以下の透明光沢粒少許含む		
336	壺	底部 A	推定 9.1	楕方向のハケ目 底部はナデ	ナデ	良好	に赤い褐色	に赤い褐色	1mm以下の透明光沢粒、2mm以下の 灰褐色粒、3mm以下の灰褐色・灰色粒 を含む	外表面一部黒変 内面は全体的に楕化	

第18表 A地点 弥生時代土器観察表

第3節 古墳時代

1. 古墳時代の遺構と遺物

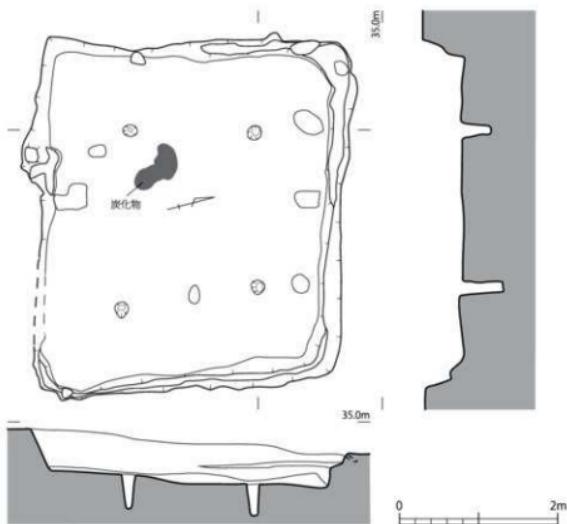
A地点では、V層面で古墳時代の竪穴住居跡が3軒と、それに伴う遺物が確認されている。

1号竪穴住居跡(SA 1)(第91図、第92図337~347)

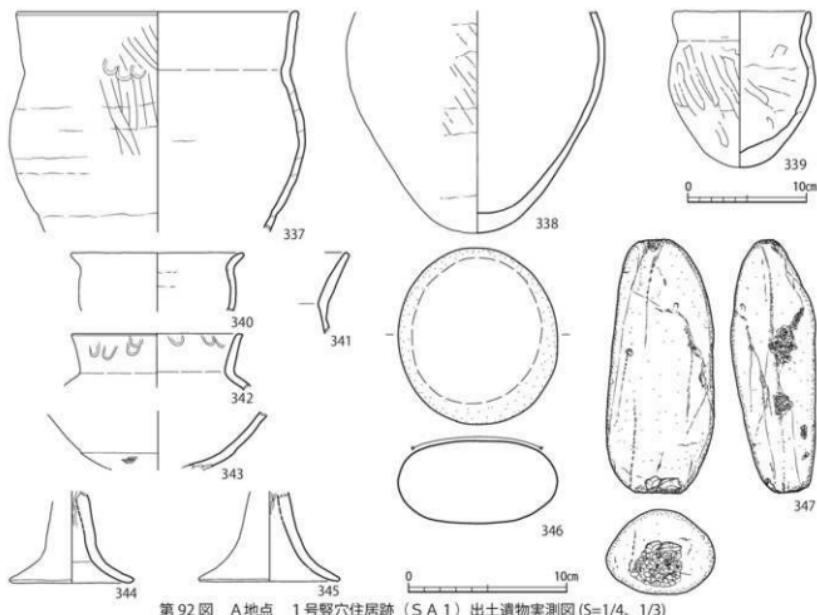
SA 1はC 2グリッド南西部からC 3北西部にかけて確認されている。主軸の方向はN-74.5°-Eをとる。4.45m×3.8mの長方形プランを呈し、床面積は13.7m²を測る。検出面からの深さは最深で0.52mである。住居の床面(掘削面)は地形に沿って北側に傾斜しており、東壁および北壁西側から西壁中央にかけて幅2cm~36cmの狭いテラスが認められ、この段差部分にはAT風成土ブロック等を含む黒褐色土の貼床が認められた。柱穴は4本(深さ0.37m~0.51m)で、柱間の距離は東西1.98m~2.23m、南北1.6m~1.76mを測り、ほぼ対角線上の配置をとる。床面には南西部の柱穴近くで炭化物が集中する箇所が認められる。

遺物は貼床上面で甕や壺、高环等の土師器や須恵器、磨石、敲石等65点がまばらに出土している。そのうち須恵器(389)についてはSA 2の遺物と接合する。また10cm~15cm規模の棒状の砂岩礫が10数点認められる。そのうちの1点については、敲打痕が認められるが、他のものには使用痕や加工痕等は認められなかつた。これらの例は都城市坂元A遺跡の弥生後期の住居跡や中尾遺跡の古墳時代の住居跡でも確認されている。

337~341は壺である。そのうち337は胴部に最大径をもち、口縁部がやや直立気味に開く。339は小型で、



第91図 A地点 1号竪穴住居跡(SA 1)実測図(S=1/60)



第92図 A地点 1号竖穴住居跡 (SA 1) 出土遺物実測図 (S=1/4, 1/3)

同様に胴部に最大径をもち、頸部で屈曲し、口縁部は内湾しながら立ち上がる。340は口縁部に最大径をもち、頸部の屈曲は他のものに比べ強い。

342は壺である。口縁部が直立気味に立ち上がり、外面には指頭痕が顕著に認められる。

343～345は高環である。そのうち343は環部で、口縁部と体部に明瞭な段をもつ。344・345は脚部で、そのうち344は下方へ開きながら、裾部で弱く屈曲し、大きく開くのに対し、345はラッパ状に開く。

346は砂岩製の磨石である。表面の一面のみ磨痕が認められる。347は敲石である。砂岩製の棒状礫の長軸側の両端および右側面の一部に敲打痕が認められる。

2号竖穴住居跡 (SA 2) (第93図、第94図348～355、第95図356～378、第96図379～394)

S A 2は、D 3グリッド北西部に位置し、主軸の方向はN-2.5°-Wをとる。北東端を木根によって破壊されているものの、4.67 m × 4.49 mの方形プランを呈し、床面積は $15\text{m}^2 + \alpha$ を測る。また検出面からの深さは、最深で0.27 mである。床面壁際に幅8～16cm、深さ6～10cm程度の壁帶溝が認められ、四方に巡る。柱穴は17基確認されているが、中央の2本両壁際付近のもの（柱間2.86 m、深さ0.34 m～0.42 m）が主柱穴になるものと考えられる。その他、南側と中央東側の2箇所で硬化面、中央東側の硬化面近くで焼土が確認されている。埋土は黒褐色土主体である。

遺物は、中位～床面近くで甕や壺、高環等の土師器をはじめ、須恵器や鉄器や石器等約200点出土し、中央から南側に広がって出土している。

348～355は甕である。最大径を口縁部にもつもの（348～350）と胴部に最大径をもつもの（351

～355)に大別できる。器面調整は共通してナデ調整が施されているが、部分的にミガキ状になるものも認められる。

最大径を口縁部にもつもののうち、348は口縁部が僅かに屈曲し、やや内湾気味に開く。胴部はあまり張らずに、平底の底部へ至る。底部外面には木葉圧痕が認められる。対して349については、口縁部がやや直立気味に開き、胴部上位で張りながら、丸底の底部に向かって窄まる。350は口縁部から胴部の資料で、349の器形に似るが、長い口縁部を有する。

胴部に最大径をもつものは、その上位に最大径をもつもの(352・355)とその中位に最大径をもつもの(351・353・354)に2分される。そのうち前者については、口縁部等の違いが認められ、口縁部がやや直立ぎみに開き、頸部の屈曲が弱いもの(353)と頸部が「く」の字状に強く屈曲し、口縁部がやや外方に開くもの(355)がある。後者については、口縁部が共通してやや直立ぎみに開く。両者とも底部は厚みのある丸底を有している。

356～365は壺である。口縁部は、共通して外傾する。胴部に関しては、球状になるもの(356)や偏球状になるもの(359)等が認められる。361は口縁部が直立気味に立ち上がり、下部に接合面が認められることから二重口縁壺の可能性が考えられる。362は頸部近くに貼付突帯を有し、ヘラ状工具による刻目が認められる。364・365は丸底である。

366～378は高杯である。そのうち366は坏部の口縁部と体部の境に段をもち、外方へ直線的に開く。また脚部は下方へ開きながら、裾部で屈曲し、大きく開く。また367・369・372は坏部の口縁部と体部の境で屈曲するのに対し、368・370・371の坏部は屈曲が弱い(370には段が入る)。372は口縁部が直口気味に立ち上がる。373～378は脚部の資料である。そのうち373・374・376は下方へ開きながら、裾部で屈曲し、大きく開くのに対し、375・377はラッパ状に開く。378はエンタシス状の脚柱部を有する。

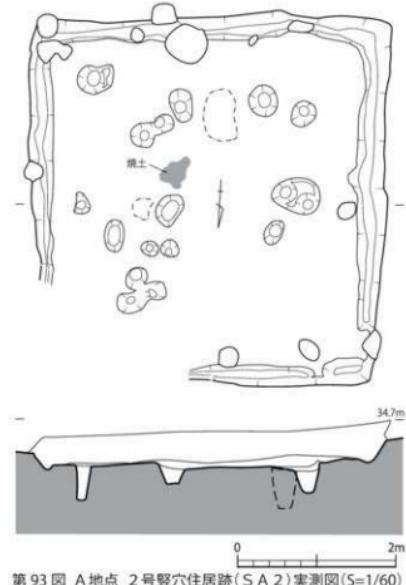
379～386は鉢である。口縁部が内湾しながら立ち上がるるもの(389～382)や頸部で屈曲し、外反しながら開くもの(383～385)、胴部が張らず、外方へ開きながら口縁部が外反するもの(386)が認められる。底部は平底(380・382・386)や上げ底(381・384)、丸底気味(383)のものがあり、底部には木葉圧痕を有するもの(381・382・386)も認められる。

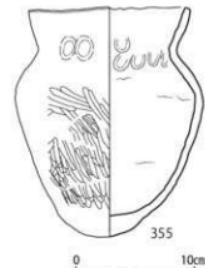
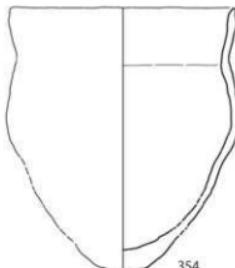
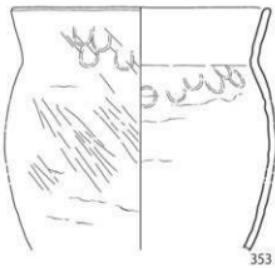
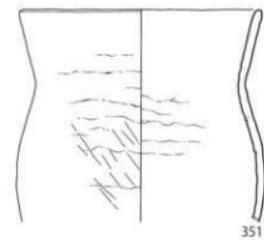
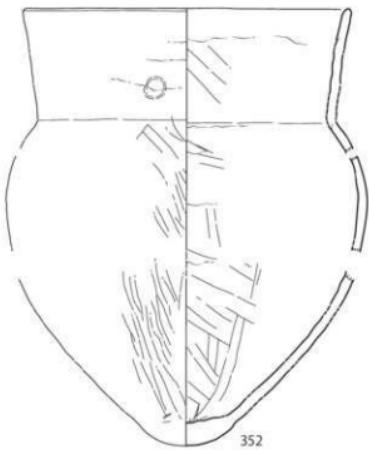
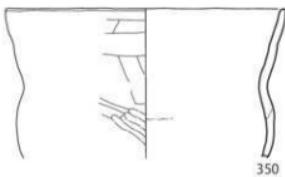
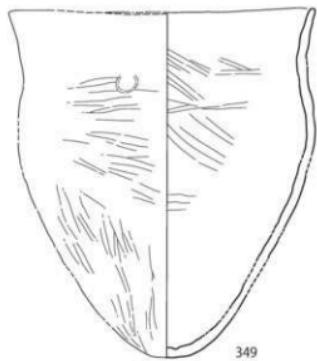
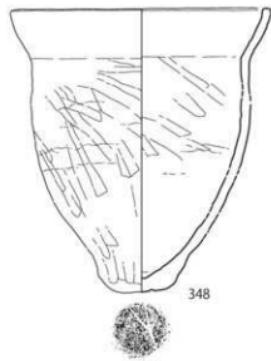
387・388は壺で丸味が強く、丸底である。387には粘土の繋ぎ目が認められ、指頭痕が強く入る。内面にはハケ目調整が認められる。

389は須恵器の坏蓋で天井部と体部との境に明瞭な段をもち、口縁部はやや外傾し、端部に段を有する。天井部の上位を欠損しているため、有蓋高杯の蓋の可能性も考えられる。時期的には陶邑編年のTK 23ないしTK 47段階に相当すると考えられる。SA 1出土のものと接合する。

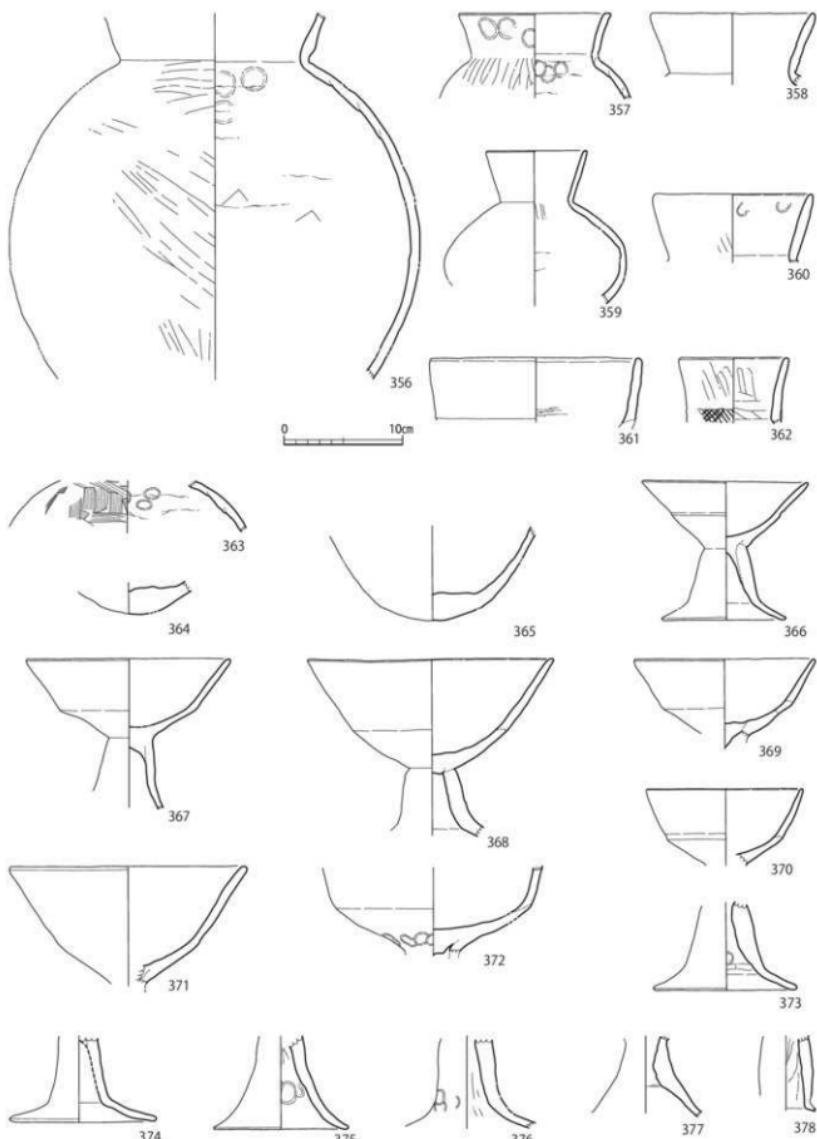
390は鉄製の刀子である。鋒と柄部を欠損する。断面形は楔形を呈し、闇は錯のため不明瞭だが、わずかに細くなることから刃間の可能性がある。

391は打製石斧である。砂岩製で表面に躍面

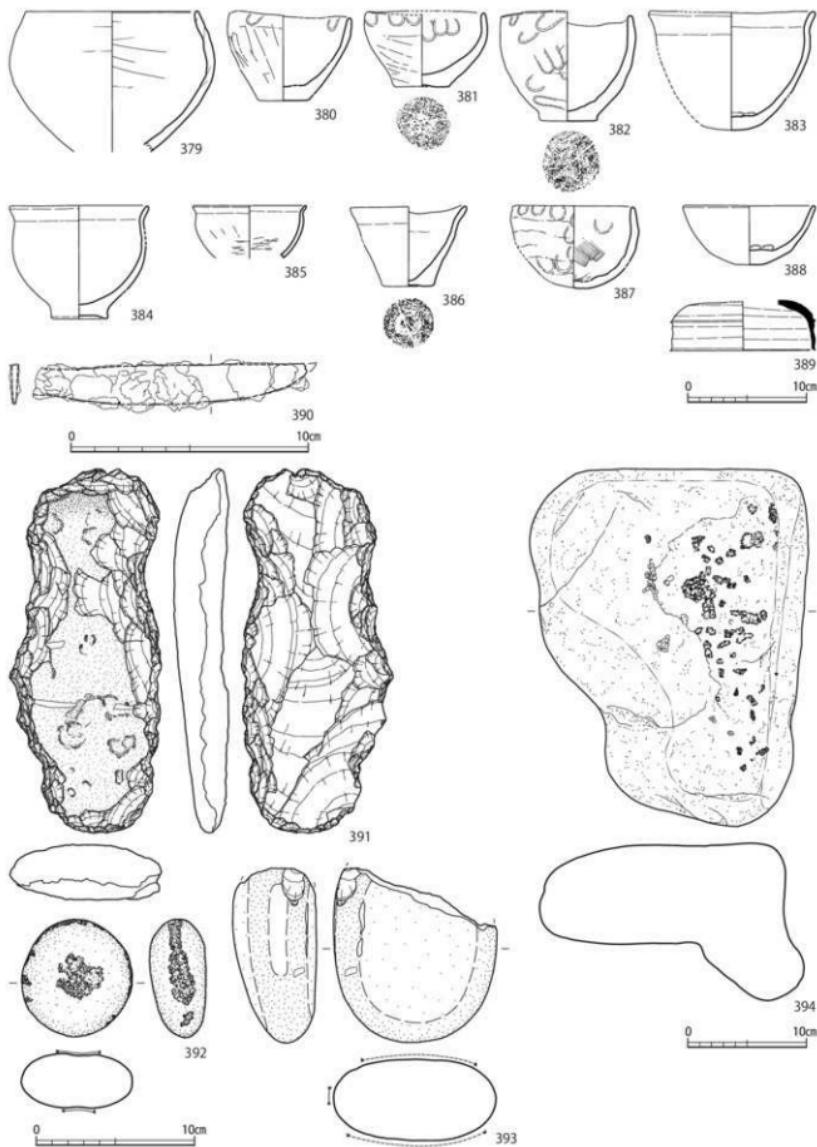




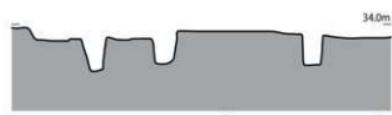
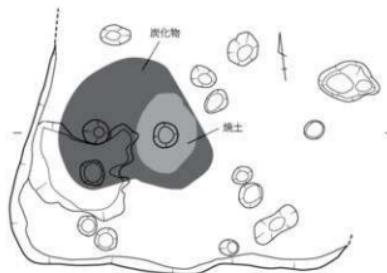
第94図 A地点 2号竪穴住居跡（S A 2）出土遺物実測図 1 (S=1/4)



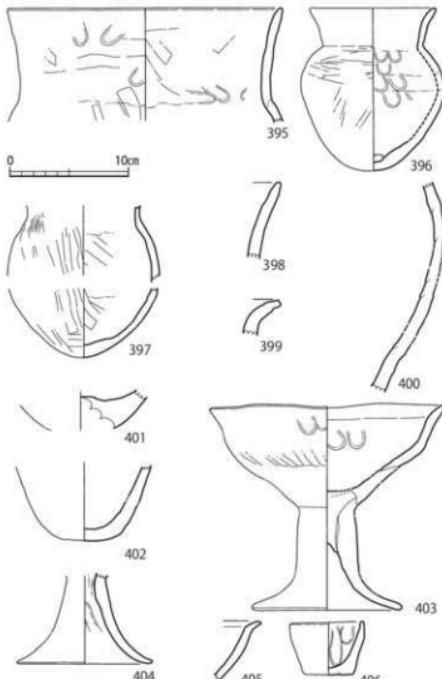
第95図 A地点 2号竖穴住居跡 (SA 2) 出土遺物実測図 2 (S=1/4)



第96図 A地点 2号竪穴住居跡（SA 2）出土遺物実測図 3 (S=1/4, 1/3, 1/2)



第97図 A地点 3号竪穴住居跡(SA 3)実測図(S=1/60)



第98図 A地点 3号竪穴住居跡(SA 3)出土遺物実測図(S=1/4)

を有する縦長剥片を素材に縁辺に両面から加工を行っている。また基部には抉入部が認められる。

- 392は凹石である。砂岩製で全体的に赤化している。両面中央には敲打による凹みが明瞭に入るほか、両側面および上面にも敲打痕が認められる。
- 393は磨石である。約1/3を欠損する。左側面には明瞭な磨痕が認められるのに対し、表裏面の磨痕はあまり明瞭ではない。尾鈴山酸性岩類似。
- 394は台石である。砂岩製で、断面L字を呈する礫の表面には敲打痕が認められる。

3号竪穴住居跡(SA 3) (第97図、第98図395~406)

S A 3はB 3グリッド南側で位置している。遺構は削平を受け、深さは0.15 mと浅く、北側はS E 2に切られている。竪穴は西壁(2.71 m)から南壁(4.19 m)の2面のみ残存しておらず、復元するとおそらく4 m規模になるものと考えられる。また住居の床面には、南西部の壁際に約1.5 m規模の不定形の落ち込みが認められ、落ち込みの北西部から床面の中央付近にかけて炭化物や焼土が集中する。埋土は黒色土主体で4層に分かれ、埋土の中位～床面近くで甕や高环等の土師器や須恵器等が出土している。主軸の方向はN-82.5°-Wをとる。

395~401は甕である。そのうち396は胴部の上半に最大径を有し、頸部の屈曲が強く、外反しながら口縁部が開く。底部は丸底である。397は胴部が丸く張り、丸底を有する。胴部中央に最大径が認められ、外面にはミガキが顕著に認められる。395や398は口縁部が直立気味に立ち上がる。400は胴部、401・402は底部である。そのうち401は底面に被熱による剥落が認められる。

403・404は高环である。そのうち403は环部の口縁部と体部に段をもち、外反しながら口縁部が開く。また脚部は裾部で屈曲し、大きく開く。404はラッパ状に開く脚部である。

405は鉢、406はミニチュア土器である。

番号	種別	器種	出土地点	法量(cm)		手法・調整・工程ほか			焼成	色調			施主の特徴	備考
				上辺	底部	高さ	外 面	内 面		外 面	内 面	外 面		
337	土器部 口縁部 -底部	甕	A SA 1	23.4		工具による斜め方向 のナデ	斜め方向のナデ	良好 に赤褐色	褐色	褐色	褐色	1mm以下の灰白色、灰色地。3mm以下の の赤色、褐色地色。5mm以下の灰白色、 褐色地色を含む	外面部部分的にスズ付 着、内部全体的に黒化	
338	土器部 肩・部 -底部	甕	A SA 1			斜め・縦方向のナデ	斜め方向のナデ	良好 に赤褐色	褐色	褐色	褐色	3mm以下の黒色地色。7mm以下の灰褐色、 褐色地色を含む	外面部全体的にスズ付 着、内部全体的に黒化	
339	土器部 口縁部 -底部	甕	A SA 1	12.6		横方向のナデ 工具による斜め・縦方 向のナデ	斜め方向のナデ	良好 に赤褐色	に赤褐色	褐色	褐色	1mm以下の黒色地色。2mm以下の灰白 色地色。6mm以下の褐色地色を含む	外面部全体的にスズ付 着、内部全体的に黒化	
340	土器部 口縁部 -底部	甕	A SA 1	14.4		ナデ	ナデ	良好 棕 色	褐色	褐色	褐色	1mm以下の黒色の角柱の調節時。3mm 以下の灰白色地。5mm以下の褐色地色。3mm 以下の白色地色。4mm以下の灰褐色地 色を含む	外面部スズ付着外面部 黒化強度	
341	土器部 口縁部 -底部	甕	A SA 1			横方向のナデ 粗面粗	横方向のナデ 粗面粗	良好 灰褐色	に赤褐色	褐色	褐色	2mm以下の灰白色地。3mm以下の黒色 の光沢感。5mm以下の灰褐色地色を含 む		
342	土器部 口縁部 -底部	甕	A SA 3	14.5		ナデ 斜め方向のナデ 粗面粗	斜め方向のナデ 粗面粗	良好 棕 色	褐色	褐色	褐色	3mm以下の灰白色地。4mm以下の茶褐色 地色。8mm以下の灰色地色を含む		
343	土器部 高・延 部	甕	A SA 1			横方向のナデ 斜め方向の工具底	横方向のナデ	良好 棕 色	に赤褐色	褐色	褐色	1mm以下の黒色地。4mm以下の灰褐色 地色。外面部にスズ付 着、黒化		
344	土器部 高・延 部	甕	A SA 1	10		ナデ	ヨコナデ	良好 に赤褐色	褐色	褐色	褐色	1mm以下の黒色地の状況時。2mm以下 の灰白色地。3mm以下の灰褐色地 色を含む	外面部一部にスズ付 着、施主、黒化	
345	土器部 高・延 部	甕	A SA 1	11.6		横方向のナデ	斜め方向に工具底 横方向のナデ	良好 棕 色	に赤褐色	褐色	褐色	2mm以下の黒褐色地。3mm以下の灰白 色地。4mm以下の灰褐色地。5mm以下の 灰褐色地色を含む	外面部全体的に黒化 強度	
346	土器部 口縁部 -底部	甕	A SA 2	21.2		横方向のナデ 工具による斜め・縦方 向のナデ	工具による斜め方向 のナデ ナデ	良好 に赤褐色	褐色	褐色	褐色	2mm以下の灰白色地。3mm以下の黒色 地色。5mm以下の茶褐色地色を含む	外面部スズ付着、底部 に木柵痕	
347	土器部 口縁部 -底部	甕	A SA 2	23.5		横方向のナデ 粗面粗	横方向のナデ 粗面粗	良好 に赤褐色	褐色	褐色	褐色	2mm以下の黒色地。3mm以下の黒色 地色。5mm以下の灰白色地色を含む	外面部全体的に黒化 強度	
350	土器部 口縁部 -底部	甕	A SA 2	23.6		横・縦・斜め方向の工 具ナデ	横・縦・斜め方向の工 具ナデ	良好 に赤褐色	褐色	褐色	褐色	2mm以下の灰白色地。灰褐色地。黑色 地色を含む	外面部に一部黒化部分 あり	
351	土器部 口縁部 -底部	甕	A SA 2	20		横方向のナデ 粗面粗	横方向のナデ 斜め方向のナデ	良好 棕 色	褐色	褐色	褐色	4mm以下の黒褐色地。7mm以下の灰白 色地。10mm以下の茶褐色地色を含む	外面部と全体的に 黒化、内部に黒化部 分あり	
352	土器部 口縁部 -底部	甕	A SA 2	27.25		横・斜め方向のナデ 縦・斜め方向の工具ナ デ	横・斜め・縦方向のナ デ	良好 に赤褐色	に赤褐色	褐色	褐色	3mm以下の透明光沢感。4mm以下の黑 色地。5mm以下の茶褐色地色。5mm以下 の灰白色地を含む	外面部全体的にスズ付 着、内部に黒化部 分あり	
353	土器部 口縁部 -底部	甕	A SA 2	21.8		斜め方向のナデ 粗面粗	横・斜め方向のナデ 粗面粗	良好 棕 色	褐色	褐色	褐色	1mm以下の透明光沢感。1mm以下の黑 色地。5mm以下の茶褐色地色。5mm以下 の灰白色地を含む	外面部全体的にスズ付 着、施主、内部全体的に 黒化、一部黒化	
354	土器部 口縁部 -底部	甕	A SA 2	18.5		横・斜め方向の工具ナ デ	工具による斜め方向 のナデ ナデ	良好 に赤褐色	に赤褐色	褐色	褐色	5mm以下の灰白色地色、褐色地色を含む	外面部とも部分的に 黒化	
355	土器部 口縁部 -底部	甕	A SA 2	13.6	19.5	横方向のナデ 斜め・縦方向の工具に よるナデ	斜め方向のナデ 粗面粗	良好 に赤褐色	褐色	褐色	褐色	3mm以下の黒色地。暗赤褐色地。5mm以 下の赤褐色地。7mm以下の茶褐色地 色を含む	外面部とも部分的に 黒化、外面部スズ付着	
356	土器部 肩・延 部	甕	A SA 2			横・斜め・縦方向のナ デ	一部に斜め方向の工 具ナデ 粗面粗	良好 棕 色	褐色	褐色	褐色	2mm以下の透明光沢感。黒色地。4mm 以下の茶褐色地。4mm以下の褐色地。暗赤 褐色地色を含む	外面部とも黒化、外 面部スズ付着	
357	土器部 口縁部 -底部	甕	A SA 2	12.8		ナデ 粗面粗	ナデ 粗面粗	良好 棕 色	褐色	褐色	褐色	2mm以下の黒色地の状況時。3mm以下 の灰白色地。5mm以下の茶褐色地 色を含む	外面部とも黒化	
358	土器部 口縁部 -底部	甕	A SA 2	14		ヨコナデ	ヨコナデ	良好 に赤褐色	に赤褐色	褐色	褐色	3.5mm以下の灰白色地。4mm以下の灰 色地。微弱の光沢感を含む	外面部とも黒化	
359	土器部 口縁部 -底部	甕	A SA 2	8.4		横・斜め方向の工具ナ デ	横方向の工具ナ デ 横・斜め方向の工具 ナデ	良好 に赤褐色	褐色	褐色	褐色	4mm以下の灰白色地。5mm以下の茶褐色 地色。7mm以下の灰褐色地色を含む		
360	土器部 口縁部	甕	A SA 2	13.3		横方向のナデ 粗面粗	横方向のナデ ナデ	良好 に赤褐色	に赤褐色	褐色	褐色	1mm以下の灰白色地。灰色地。3mm以下 の赤褐色地。4mm以下の灰白色地色を含む 4mm以下の黒色地の状況時	外面部一部黒化、スズ 付着	
361	土器部 口縁部	甕	A SA 2	18		ヨコナデ	不定方向の工具ナデ	良好 に赤褐色	褐色	褐色	褐色	4mm以下の灰白色地。4mm以下の茶褐色 地色。4mm以下の灰白色地色を含む 4mm以下の黒色地の状況時		
362	土器部 口縁部	甕	A SA 2	8.8		横方向のナデ 斜め方向の工具ナ デ 刻印突起	横方向の工具ナ デ 横・斜め方向の工具 ナデ	良好 に赤褐色	褐色	褐色	褐色	3mm以下の灰白色地。黒色地。3mm 以下の茶褐色地色を含む		
363	土器部 肩・延 部	甕	A SA 2			不定方向のハケ目後 に斜め方向のナデ	横・斜め方向のナデ 粗面粗	良好 に赤褐色	褐色	褐色	褐色	2mm以下の黒褐色地。3mm以下の灰白 色地。4mm以下の赤褐色地。6mm以下 に赤褐色地色を含む	外面部全体的に黒化、 スズ付着	

第 19 表 A 地点 穫穴住居跡出土土器觀察表 1

器種	種別	器種	出土地点	法量(cm)			手法・調整・工程ほか			施成	色調		施主の特徴	備考	
				上径	底径	高さ	外面	内面	外面		外面	内面			
364	土師器	壺	近畿部 A S A 2				ナデ	鉛頭槌	良好	に赤褐色	に赤褐色	4mm以下の褐色系、5mm以下の灰褐色系、9mm以下の黒褐色を含む	内面炭化物付着		
365	土師器	壺	近畿部 A S A 2				全体的に褐色が著しく調節不明	斜め方向のナデ	良好	橙色	橙色	1mm以下の黒褐色系、7mm以下の灰褐色系、9mm以下の黒褐色を含む	内面全体的に褐色が著しい		
366	土師器	高杯	近畿部 A S A 2	13.9	10.3	11.75	横方向のナデ 丁寧なナデ	横方向のナデ 丁寧なナデ	良好	橙色	橙色	2mm以下の灰白色系、3mm以下の灰褐色系、4mm以下の赤褐色を含む	外側一部黒度、風化気味		
367	土師器	高杯	近畿部 A S A 2	17			横・斜め方向の工具ナデ 横・斜め方向の工具ナデ	横・斜め方向の工具ナデ 横・斜め方向の工具ナデ	良好	橙色	明黄色	3mm以下の灰黃褐色、4mm以下の赤褐色系、5mm以下の灰白色を含む	内面全体に一部黒度、風化が著しい		
368	土師器	高杯	近畿部 A S A 2	20.8			ナデ部分的に工具痕	ナデ部分的に工具痕	良好	橙色	橙色	3mm以下の茶褐色系、4mm以下の灰白色を含む	外側全体にスス付着、内面炭化物付着		
369	土師器	高杯	近畿部 A S A 2	15.3			ナデ	ヨコナデ	良好	に赤褐色	に赤褐色	2mm以下の灰褐色系、4mm以下の灰白色系、5mm以下の茶褐色を含み、微細な灰褐色を含む	外側部分的にスス付着		
370	土師器	高杯	近畿部 A S A 2	13.25			ナデ(風化気味)	ナデ(風化気味)	良好	橙色	黄褐色	1mm以下の黒褐色系、3mm以下の灰白色系、5mm以下の赤褐色を含む	内面とも一部黒度、風化気味		
371	土師器	高杯	近畿部 A S A 2	19.6			横方向の工具ナデ	横方向の工具ナデ 横・斜め方向の工具ナデ	良好	橙色	橙色	3mm以下の灰白色・赤褐色を含む	外側一部黒度		
372	土師器	高杯	近畿部 A S A 2				ヨコナデ 鉛頭槌	ヨコナデ 鉛頭槌	良好	橙色	に赤褐色	3mm以下の茶褐色・褐色系	4mm以下の灰褐色・褐色系	内面とも風化	
373	土師器	高杯	近畿部 A S A 2	12.1			ナデ	横方向の工具痕 横方向のナデナデ	良好	橙色	に赤褐色	微細な透明白色系、2mm以下の灰白色系、4mm以下の茶褐色を含む	外側部分的に黒度		
374	土師器	高杯	近畿部 A S A 2	12.4			ナデ	ヨコナデ	良好	橙色	橙色	1mm以下の灰褐色系、1.5mm以下の黒褐色系、4mm以下の灰白色系、5mm以下の灰褐色を含む			
375	土師器	高杯	近畿部 A S A 2	11.2			横・斜め方向のナデ	横・斜め方向のナデ	良好	浅黃褐色	に赤褐色	1mm以下の黒褐色系、7mm以下の灰白色を含む	外側全体的に風化		
376	土師器	高杯	近畿部 A S A 2				ヨコナデ、ナデ	指	ナデ	指	指	6mm以下の灰白色系、5mm以下の赤褐色を含む	外側一部黒度、スス付着		
377	土師器	高杯	近畿部 A S A 2				横・斜め方向のナデ	指	ナデ	指	指	3mm以下の灰白色系、3mm以下の灰褐色系、8mm以下の灰褐色を含む			
378	土師器	高杯	近畿部 A S A 2				ナデ	ナデ	良好	橙色	橙色	2mm以下の灰褐色系、4mm以下の灰白色系、6mm以下の茶褐色を含む	外側風化		
379	土師器	高杯	近畿部 A S A 2	14.6			横・斜め方向のナデ 横・斜め方向のナデ	横・斜め方向の工具痕 横・斜め方向の工具痕	良好	橙色	明黄色	3mm以下の灰白色系、4mm以下の灰褐色系、6mm以下の茶褐色を含む	外側スス付着、内面とも風化		
380	土師器	高杯	近畿部 A S A 2	10.2	4.3	7.55	横方向のナデ	横方向のナデ 工具による斜め方向のナデ	良好	に赤褐色	に赤褐色	2mm以下の灰白色系、3mm以下の茶褐色系	内面とも風化、内面に木葉压痕、底部に木葉压痕		
381	土師器	高杯	近畿部 A S A 2	9.9	4.7	6.35	斜め方向の工具痕 鉛頭槌	斜め方向の工具痕 鉛頭槌	良好	に赤褐色	に赤褐色	微細な黒褐色状灰褐色系、3mm以下の灰白色系、4mm以下の茶褐色を含む			
382	土師器	高杯	近畿部 A S A 2	10.9	4.85	9.2	斜め方向のナデ 横・斜め方向のナデ	斜め方向のナデ 鉛頭槌	良好	に赤褐色	に赤褐色	微細な透明白色系、5mm以下の灰白色系、茶褐色系、4mm以下の茶褐色を含む	底部に木葉压痕、内面風化が著しい		
383	土師器	高杯	近畿部 A S A 2	14.1		10	ヨコナデ 斜め方向の工具痕	ヨコナデ 鉛頭槌	良好	に赤褐色	に赤褐色	3mm以下の褐色・灰白色を含む	内面スス付着		
384	土師器	高杯	近畿部 A S A 2	11.55		8.5	横・斜め方向の工具ナデ 底部は縦方向の工具ナデ	横・斜め方向の工具ナデ 横・斜め方向の工具ナデ	良好	橙色	橙色	2mm以下の灰白色系、3mm以下の灰褐色系、4mm以下の赤褐色を含む	外側一部黒度、内面風化が著しい		
385	土師器	高杯	近畿部 A S A 2	9.6			ヨコナデ ヨコナデ	ヨコナデ 鉛頭槌	良好	に赤褐色	に赤褐色	1mm以下の灰褐色系、4mm以下の灰褐色系、5mm以下の茶褐色を含む	外側スス付着、風化気味、内面に黒度		
386	土師器	高杯	近畿部 A S A 2	9.8	4.4	6.8	ヨコナデ	工具による斜め方向	良好	明赤褐色	明赤褐色	2mm以下の灰褐色系、4mm以下の灰褐色系、5mm以下の茶褐色を含む	外側スス付着、底部に木葉压痕		
387	土師器	高杯	近畿部 A S A 2	10.1		6.9	ヨコナデ	全体的に赤い仕上げ	ヨコナデ、斜め方向	良好	に赤褐色	に赤褐色	2mm以下の灰褐色系、4mm以下の赤褐色系、5mm以下の茶褐色を含む	外側一部黒度	
388	土師器	高杯	近畿部 A S A 2	11.2		4.95	ヨコナデ ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ	良	橙色	灰褐色	1mm以下の灰白色系、5mm以下の茶褐色系、7mm以下の茶褐色を含む		
389	須恵器	口縁部 ～天井	A S A 2	12.2		4.2	回転ヘラケツリ 回転ナデ	回転ヘラケツリ 回転ナデ	良好	黄灰色	黄灰色	1mm以下の灰白色系、2mm以下の灰褐色系、4mm以下の茶褐色を含む	有蓋高杯の差の可能	質あり	

第20表 A地点 穫穴住居出土土器観察表2

図面番号	種別	器種	出土地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか			焼成	色調			施主の特徴	備考
				上寸	下寸	底部	外 面	内 面	外 面		外 面	内 面	外 面		
395	土師器	甕	上寸底部～瓶部	A	S A 3	23.1	横方向のナデ 斜め方向のナデ	斜め方向のナデ 斜め方向のナデ	良好	黒褐色	に赤褐色	青褐色	2mm以下の灰白色	表面な透明光沢、2mm以下の灰白色。 3mm以下の茶褐色と2mm以下の黄褐色	外表面スッキ付着 を含む
396	土師器	甕	上寸底部～瓶部	A	S A 3	10.6	ヨコナデ ナデ ヘラナデ	ヨコナデ ナデ	良好	に赤褐色	に赤褐色	青褐色	1mm以下の灰白色と、黒褐色状光沢と。 透明光沢を少量含み、3mm以下の赤褐色	外表面スッキ付着、風化 範囲、底面含む	
397	土師器	甕	上寸底部～瓶部	A	S A 3	丁寧な工具ナデ	斜め方向のナデ 一括織方のナデ	良好	暗灰褐色	に赤褐色	青褐色	1mm以下の灰白色と、4mm以下の赤褐色。 3mm以下の灰褐色を含む	外表面スッキ付着		
398	土師器	甕	上寸底部～瓶部	A	S A 3	縦・横方向のナデ	斜め・縦方向のナデ	良好	に赤褐色	暗褐色	青褐色	1mm以下の黒褐色状光沢と、2mm以下の 灰白色と。6mm以下の灰白色を含む	外表面スッキ付着		
399	土師器	甕	上寸底部～瓶部	A	S A 3	ヨコナデ 斜め方向のナデ	ヨコナデ、ナデ	良好	浅黄褐色	浅黄褐色	浅白褐色	2mm以下の黒褐色状光沢と、6mm以 下的灰白色と。9mm以下の茶褐色を含む	外表面スッキ付着		
400	土師器	甕	上寸底部～瓶部	A	S A 3	縦方向のナデ	縦・斜め方向のナデ 凹凸が多い	良好	に赤褐色	に赤褐色	青褐色	2mm以下の赤褐色と、灰褐色。	8mm以下の茶褐色を含む	外表面スッキ付着	
401	土師器	甕	底～瓶部	A	S A 3	斜め方向の工具ナデ	縦・斜め・横方向の 工具ナデ	良好	に赤褐色	浅黄褐色	青褐色	6mm以下の灰白色と、2mm以下の赤褐色	外表面スッキ付着		
402	土師器	甕	底～瓶部	A	S A 3	縦方向の工具ナデ	縦・斜め方向の工具 ナデ	良好	明赤褐色	に赤褐色	青褐色	6mm以下の灰白色を含む			
403	土師器	高杯	上寸底部～瓶部	A	S A 3	19.7 12 17.3	ヨコナデ、縦方向の工 具ナデ	縦は風化が著しく 凹凸が多い。 ヨコナデ、	良好	に赤褐色	暗褐色	青褐色	3mm以下の灰白色と、4mm以下の灰白 色と。褐色と。6mm以下の茶褐色。	表面全体的に風化 範囲、底面含む	
404	土師器	高杯	上寸底部～瓶部	A	S A 3	横方向のナデ	斜め・横方向のナデ 斜め方向の工具ナデ	良好	暗褐色	青褐色	青褐色	1mm以下の黒褐色状光沢と、4mm以 下的灰白色と。6mm以下の茶褐色。	6mm以下の灰白色を含む		
405	土師器	高杯	上寸底部～瓶部	A	S A 3	ヨコナデ 横・斜め方向のナデ	斜め方向の工具ナデ 縦方向の工具ナデ	良好	に赤褐色	青褐色	青褐色	1mm以下の黒褐色状光沢と、1.5mm以 下の灰白色と、黒褐色。	2mm以下の赤褐色と、2mm以下の赤 褐色を含む		
406	土師器	二重口	上寸底部～瓶部	A	S A 3	5.9 4 4.5	ヨコナデ、ナデ 底部に工具痕 物語	ヨコナデ 縦方向にナデ 底部に工具痕	良好	に赤褐色	暗褐色	青褐色	2mm以下の赤褐色と、2mm以下の灰 白色と。4mm以下の褐色を含む	外表面一部黒色	

第 21 表 A 地点 穫穴住居跡出土土器観察表 3

図面番号	器種	注記番号	出土地点	層位	計測値				石材	備考
					最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)		
346	磨石	S A 1-49	A・S A 1	—	11.1	10.05	5.2	891.4	砂岩	
347	砾石	S A 1-47	A・S A 1	—	15.95	6.8	5.3	817.5	砂岩	
391	打製石斧	S A 2-133	A・S A 1	—	15.35	6.4	2.35	254.1	砂岩	全体的に赤変
392	門石	S A 2-73	A・S A 2	—	7.35	6.95	3.5	254.2	砂岩	
393	磨石	S A 2	A・S A 2	—	10.97	10.25	5.25	787	尾崎山酸性岩類	約 1/3 欠損
394	台石	S A 2-122	A・S A 2	—	30.15	23.6	13.35	11500	砂岩	

第 22 表 A 地点 穫穴住居跡出土石器計測表

図面番号	器種	注記番号	出土地点	層位	計測値				備考
					最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	
390	刀子	S A 1-49	A・S A 2	—	11.6	2.2	0.5	22.8	鋸と柄部を欠損

第 23 表 A 地点 穫穴住居跡出土鐵器計測表

第4節 古代以降

1. 古代以降の遺構と遺物

A 地点では古代以降の遺構として、古代の掘立柱建物跡 1 棟をはじめ、中世では道路状遺構 1 条、溝状遺構 1 条が確認されている。また表土中や擾乱層中で、古代～近世の遺物が確認されている。

(1) 掘立柱建物跡

A 地点では多数のピットを検出した。埋土は大きく 3 種類（黒色土、黒褐色土、暗褐色土）に分かれるもの、大きさにはかなりのばらつきがあった。SB 1 を構成する柱穴規模と比して、その他のピットは比較的小振りのものが多く、調査中に配置等の検討を行ったが、掘立柱建物跡の柱穴として認定するまでには至らなかった。

1号掘立柱建物跡 (SB 1) (第 99 図)

SB 1 は B 5 グリッドから C 5 グリッド西側にかけて確認した。主軸は N-5.5°-W をとり、桁行 3 間 (4.7 m) × 梁行 2 間 (3.9 m) の建物跡 (底面積 19.25 m²) と考えられるが、西側は調査区端にあたるため、同方向に延びる可能性もある。柱穴の掘り形は円形から楕円形を呈し、直径は 0.26 m ~ 0.56 m、深さは 0.24 m ~ 0.52 m である。東側桁の柱穴の 1 基は擾乱の影響を受けており、確認できていない。埋土は黒色土主体であり、遺構内出土遺物として古代の須恵器甕の胴部片や土鍾 (416)、古墳時代の甕等が確認されている。

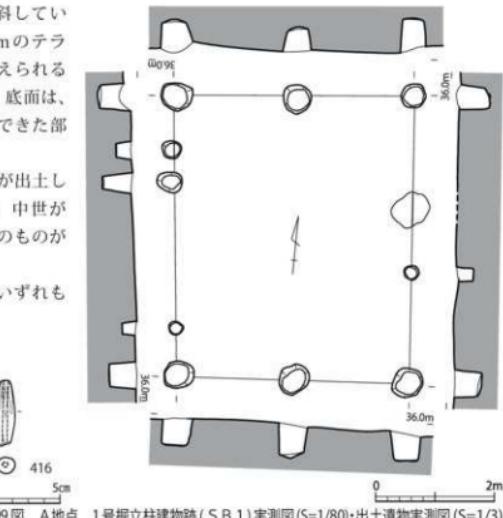
(2) 道路状遺構

1号道路状遺構 (SG 1) (第 100 図、第 101 図 407 ~ 415)

SG 1 は D 2 グリッド南西部から E 4・F 4 グリッドに位置する。検出規模は全長が 23.6 m を測り、北西方向から南東方向へ直線的に延びる。遺構は北西部が削平のために消失し、南東部は調査区外へと延びる。道幅は 3.4 m ~ 3.9 m、深さは 0.47 m ~ 0.72 m と南東方向に向かって傾斜している。遺構の西側には幅 0.3 m ~ 0.96 m のテラスが認められ、切り合いの可能性も考えられるが、埋土状況からは確認できなかった。底面は、比較的しまっているが、硬化面と確認できた部分は少ない。

遺物は、古代から中世の時期のものが出土している。そのうち古代の遺物が 410、中世が 407 ~ 409・411 ~ 414、古代～中世のものが 415 である。

407・408 は土師器の小皿である。いずれも底面の切り離しは回転ヘラ切りである。407 の底径は推定で 6.4 cm、408 は推定 9 cm である。409 は東播系須恵器の碗の底部である。410 は古代須恵器の杯蓋である。411 は白磁の碗で、底部から内湾しながら開く。外面体部下位から底部にかけて露胎となり、



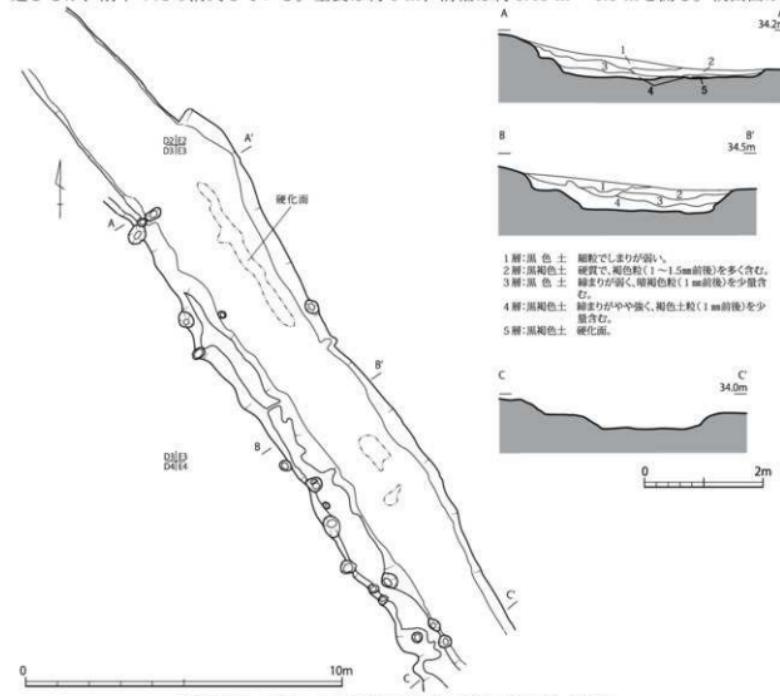
第99図 A地点 1号掘立柱建物跡 (SB 1) 実測図 (S=1/80)・出土遺物実測図 (S=1/3)

見込みは蛇ノ目軸剥ぎとなる。また見込みには重ね焼きによる砂目が部分的に認められる。太宰府分類の白磁碗VII類（12世紀中頃から後半）に相当する。412は備前系の壺の口縁部である。外面および内面の一部に自然釉がかかる。413・414は中国産の壺の口縁部と底部付近で、内外面に緑釉～褐釉がかかる。胎土等から同一個体と考えられる。415は土鍾で上半を欠損する。

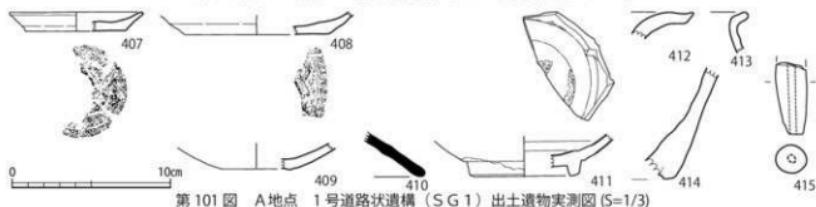
（3）溝状遺構

1号溝状遺構（S E 1）（第102図）

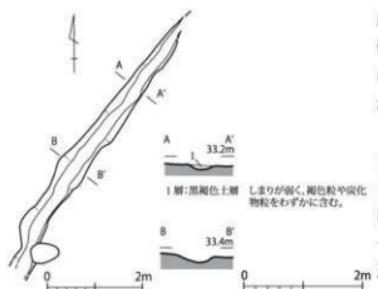
S E 1はA 2グリッドからB 2グリッド西側に位置する。やや蛇行しながら南西方向から北東方向へ延びるが、削平のため消失している。全長は約6m、溝幅は約0.45m～0.6mを測る。検出面から



第100図 A地点 1号道路状遺構（SG 1）実測図 (S=1/150)



第101図 A地点 1号道路状遺構（SG 1）出土遺物実測図 (S=1/3)



第102図 A地点 1号溝状構造 (SE 1) 実測図 ($S=1/100, 1/80$)

底面までの深さは0.09m～0.12mと北東側に向かって傾斜している。埋土は黒褐色土で構成されている。遺物は龍泉窯系の蓮弁文を有する青磁碗が1点出土しているが、小片のため図化は行わなかった。

(4) 古代～近世の遺物 (第103図 417～429)

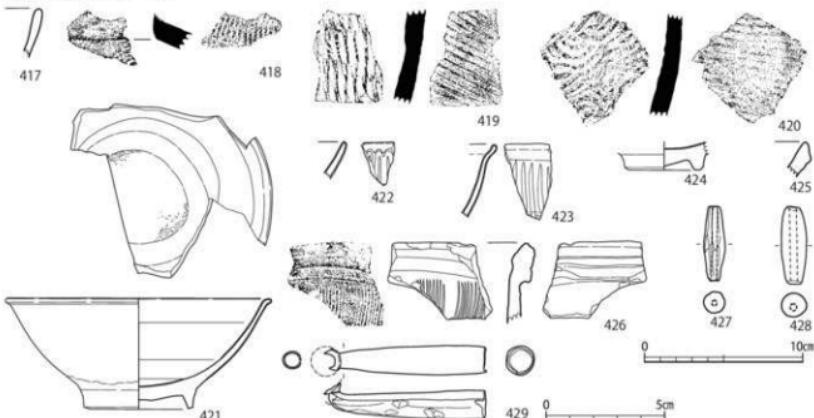
A地点では、表土中および擾乱層中等から古代から近世にかけて遺物が確認されている。そのうち古代は417～420、中世が421～425、古代～中世は427・428、近世は426・429である。

417は碗の口縁部である。418～420は須恵器である。

418は壺の頸部である。外面には平行タタキ、内面には同心円のタタキが認められる。419・420は壺である。外面はいざれも共通して平行タタキで、内面は419が同心円のタタキの上に平行タタキを、420は平行タタキの上に同心円のタタキが施されている。

421は白磁の端反碗である。底部から斜上方に向かってやや丸みを帯びながら、口縁部は屈曲する。外側底部下位から底部にかけて露胎となる。また内側に体部内面に2条の沈線が巡り、見込みは蛇ノ目釉剥ぎとなる。釉剥ぎの内側に重ね焼きによる砂目が部分的に認められる。これらの特徴から411と同じく、大宰府分類の白磁碗Ⅷ類 (12世紀中頃から後半) に相当する。

422～424は青磁である。422は龍泉窯系青磁の退化した蓮弁文を有する碗で上田分類のB～IV類(15世紀末葉～16世紀)に相當すると考えられる。423は同安窯系青磁の碗で、口縁部は「く」字状に外反し、体部外面には縱位の櫛目が認められる。体部下面部は露胎となる。424は胎土や釉色等から同一個体の可能性が考えられる。底部内面は釉が薄く、外面には露胎が認められる。大宰府分類の碗Ⅲ類(12世紀中頃から後半)と考えられる。425は東播系須恵器の片口鉢である。外面には自然釉が認められる。426は明石・堺系の焼締擂鉢の片口付近のものである。幅広の口縁部外面には2条の沈線が巡り、内面には1条の凹線が施されている。また内面体部には10条+ α を1単位とする細めの櫛目が間隔を空けて施されている。



第103図 A地点 古代～近世遺物実測図 ($S=1/3, 1/2$)

427・428は土錐である。429は、銅製煙管の雁首である。火皿部は一部を残し、欠損している。

2. 時期不明の遺構

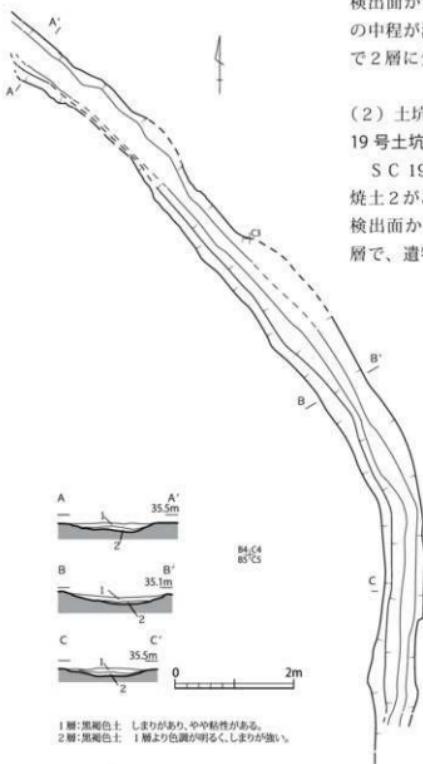
A地点では縄文時代早期～近世の遺構以外にも、溝状遺構1条や土坑2基、焼土1基、柱穴群が認められる。これらは遺物等の出土がないため、時期決定が困難であり、ここでは時期不明の遺構として扱う。ただしこれらの埋土については中世～近世の埋土に近いため、これら時期の所産に相当する可能性が考えられる。

(1) 溝状遺構

2号溝状遺構 (SE 2) (第104図)

SE 2はB3グリッドからC4・5グリッド中央にかけて確認した。C5グリッドでは直線的に北方向に延びながら、C4グリッドからB3グリッドにかけては北西方向へ湾曲しながら走る。南側部分が調査区外のため、全貌は明確でないが検出面での長さは約26.4mであり、溝幅は約1.2m～2mを測る。

検出面から底面までの深さは0.13m～0.18mである。溝の中程が浅く、両側がやや深くなる。埋土は黒褐色土主体で2層に分けられる。



第104図 A地点 2号溝状遺構 (SE 2) 実測図 (S=1/150, 1/80)



第105図 A地点 土坑 (SC) 実測図 (S=1/40)

が、埋土は早期のものよりも中世～近世の遺構の埋土に似る。

20号土坑（S C 20）（第105図）

S C 19はD 3グリッド東側に位置し、隣接して北東側にS G 1が、南西側約2.2m先にS A 2がある。0.9m×0.82mの楕円形プランを呈する。検出面からの深さは0.42mを測り、北西部にはテラスを有する。埋土は黒褐色土の1層で、遺物の出土はない。

25号土坑（S C 20）（第105図）

S C 25はC 3グリッド南西部に位置する。約1.28m東にはS C 19がある。0.51m×0.41mの楕円形プランを呈する。検出面からの深さは0.25mを測り、断面形はボウル状を呈し、焼土や炭化物が認められる。遺構内からは礫が1点確認されたが、その他に時期の特定できる遺物は認められなかった。

表面 番号	種類	器 種	出土 地位	法量 (kg)	手法・調査・文様ほか	計測値			地 質	土 の特徴	備 考	
						上 限	底 部	高 度	外 面	内 面		
407	土器器	口縁部 ～底部	A SG 1	推定 9.4	推定 6.4	1.2	回転ナデ ヘラ切り底	回転ナデ	良好	褐色	褐色	2mm以下の赤褐色を含む
408	土器器	全体 ～底部	A SG 1	推定 9	回転ナデ ヘラ切り底	全体的に風化	回転ナデ	良好	褐色	高い褐色	2mm以下の灰白色、3mm以下の褐色を含む、5mm以下の灰褐色を含む	
409	須恵器	底 部	A SG 1	推定 4.4	横方向のナデ 一部に定方向のナデ 板状の底面	ナデ	回転ナデ	堅織	褐色	褐色	2mm以下の灰白色、4mm以下の灰白色を含む	外縁スズ村着
410	須恵器	口縁部 ～底部	A SG 1	回転ナデ	回転ナデ	良好	褐色	褐色	褐色	褐色	0.5mm以下の灰白色、2mm以下の褐色、5mm以下の灰白色を含む	
411	白 瓷	全体 ～底部	A SG 1	推定 7	施釉、露胎、ケズリ 高台に砂付着	施釉 乾/日割剥離	施釉 乾/日割剥離	堅織	灰白色	灰白色	見込み船/日 輪剥離	
412	陶 器	口縁部 ～底部	A SG 1	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	回転ナデ	堅織	に高い褐色	褐色	0.5mm以下の灰白色、2mm以下の褐色を含む	輪削系	
413	陶 器	全体 ～底部	A SG 1	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	回転ナデ	堅織	灰オーリーブ色 に高い灰色	オーリーブ色	0.5mm以下の灰白色、2mm以下の褐色を含む	中国産、414 同一個体	
414	陶 器	全体 ～底部	A	施釉	施釉	施釉	堅織	オーリーブ色 灰白色	オーリーブ色 灰白色	0.5mm以下の灰白色、5.5mm以下の灰褐色を含む	中国産、413 同一個体	
417	土器器	口縁部	A	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	褐色	灰褐色	褐色	1mm以下の灰白色を含む	内面一部風化	
418	須恵器	全体 ～底部	A	平行タキ	同心円タキ?	堅織	暗褐色	褐色	褐色	1mm以下の灰白色、2mm以下の灰白色を含む		
419	須恵器	全体 ～底部	A トレンチ4	斜め方向の平行タキ半 幅	同心円タキの後に平行タキ半 幅	堅織	褐色	褐色	褐色	2mm以下の黒色、赤褐色、灰白色、5mm以下の灰褐色を含む		
420	須恵器	全体 ～底部	A	平行タキ	平行タキの後に同心円タキ	堅織	暗褐色	褐色	褐色	2mm以下の灰白色、灰白色、黑色を含む		
421	白 瓷	口縁部 ～底部	A トレンチ4	推定 16.6	推定 6.8	推定 6.8	施釉貫入、露胎 油取り	施釉貫入 乾/日割剥離	堅織	灰白色	灰白色	見込み船
422	青 瓷	全体 ～底部	A トレンチ9	施釉貫入 蓮瓣文	施釉貫入	堅織	灰オーリーブ色	灰オーリーブ色	堅織	灰オーリーブ色	同窯系	
423	青 瓷	口縁部 ～全体	A	蓮瓣文	施釉	堅織	灰オーリーブ色	灰オーリーブ色	堅織	灰オーリーブ色	同窯系	
424	青 瓷	全体 ～底部	A	4.45	施釉、回転ナデ 油取り	施釉貫入	堅織	灰オーリーブ色	灰オーリーブ色	堅織	同窯系	
425	須恵器	口縁部 ～底部	A 区	自然付着	ナデ	ナデ	堅織	褐色	褐色	褐色	鐵鑄な漆喰を含む	
426	陶 器	全体 ～底部	A 区	横方向のナデ	横方向のナデ	堅織	に高い褐色	に高い褐色	褐色	1mm以下の灰白色を含む	東播系	

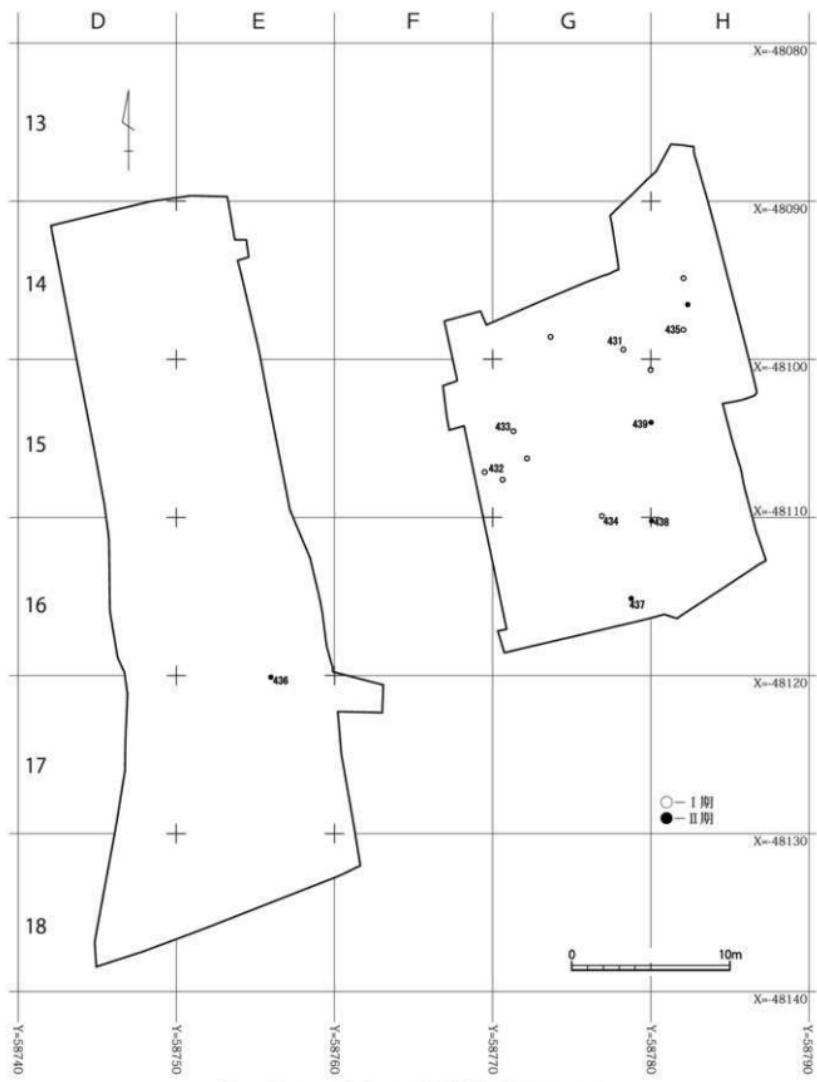
第24表 A地点 古代～近世土器観察表

表面 番号	器種	出土地位	色 調	胎 土	計 測 値					備 考
					最大長(c m)	最大幅(c m)	最大厚(c m)	穿孔徑(c m)	重 量(g)	
415	土器	A + SG 1	に高い褐色	細砂粒・光沢粒	3.0	1.4	1.3	0.35	4.4	上平歛
416	土器	A + S B 1	に高い赤褐色	砂粒・光沢粒	4.15	1.2	1.1	0.3	5.3	
427	土器	A	に高い赤褐色	細砂粒	4.7	1.4	1.35	0.4	7.1	
428	土器	A	淡赤褐色	2mm以下の灰色・黒色粒	4.9	1.6	1.5	0.4	11	

第25表 A地点 土鐘計測表

表面 番号	器種	出土地位	計 測 値				備 考	
			最大長(c m)	最大幅(c m)	最大厚(c m)	重 量(g)		
429	鉢	(無)	A	6.75	1.25	1.2	9.0	火葬部は一部を残す欠損

第26表 A地点 煙管計測表



第106図 B・C地点 旧石器時代遺物分布図 (S=1/300)

第IV章 B・C 地点の調査

第1節 旧石器時代

1. 第Ⅰ期

(1) 石器(第106図、第107図)

第Ⅰ期の石器群は、IX層からXC層にかけて11点が出土している。石器は散発的に出土しており、B地点のみで確認されている。石器の内訳は二次加工剥片1点、剥片7点、石核2点、原石1点である。利用石材は流紋岩、ホルンフェルス、頁岩、チャート、黒曜石である。

430は二次加工剥片である。幅広の剥片の末端から右側縁にかけて加工が施されている。チャート製である。

431～433は剥片である。そのうち431は縦長剥片で、打面は単剥離面構成され、表面中央には縦面を有する。432は幅広の剥片で上部の剥離の状況から打面再生剥片と考えられる。433も幅広の剥片で下部が欠損している。

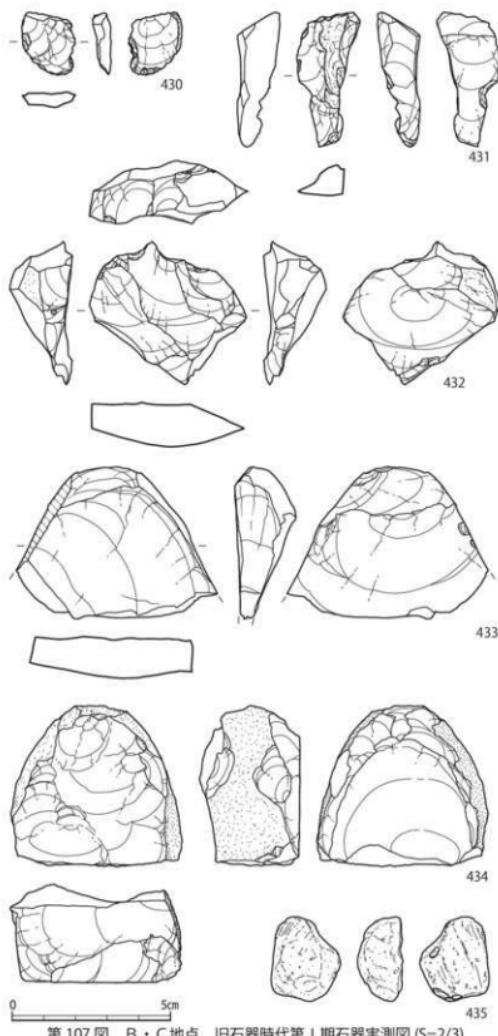
434は石核である。縦面の一端から剥片を作出している。下面の剥離はその際に剥離したものである。

435は黒曜石(产地不明)の原石か。

2. 第Ⅱ期

(1) 石器(第106図、第108図)

第Ⅱ期の石器群は、一部V層のものを含むもののVI層～VII層にかけて、わずかに6点が出土している。遺構は確認されず、石器は散発的に出土しており、B地点5点、C地点1点である。石器の内訳は剥片尖頭器1点、スクレイバー1点、二次加工剥片1点、微細剥離を有する剥片1点、剥片3点で、利用石材は流紋岩I d類1点、チャートII類1点、ホルン



第107図 B・C地点 旧石器時代第Ⅰ期石器実測図 (S=2/3)

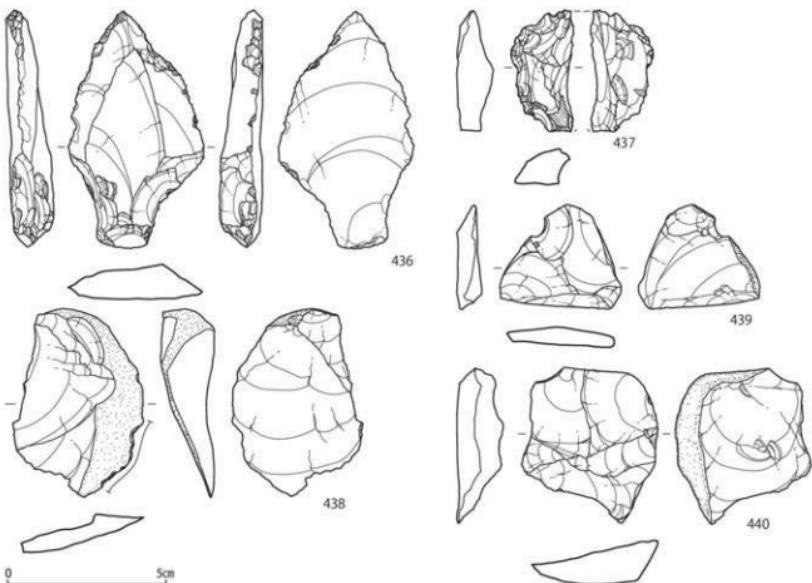
フェルス（V・VI類）4点である。

436は剥片尖頭器である。縦長剥片を素材に打面を基部側に置き、主要剥離面より先端部と基部に加工を施す。基部には抉入状の基部を有している。利用石材は流紋岩Ⅰd類である。

437はスクレイパーである。刃部のみの出土で基部側は欠損している。刃部は主要剥離面より加工が行われ、弧状を呈する。チャートⅡ類製である。

438は微細剥離を有する剥片である。凝灰岩製で打面から表面にかけて礫面を有し、左側縁上部は剥出の際に垂直割れを起こしている。右側縁下部に微細な剥離が認められる。

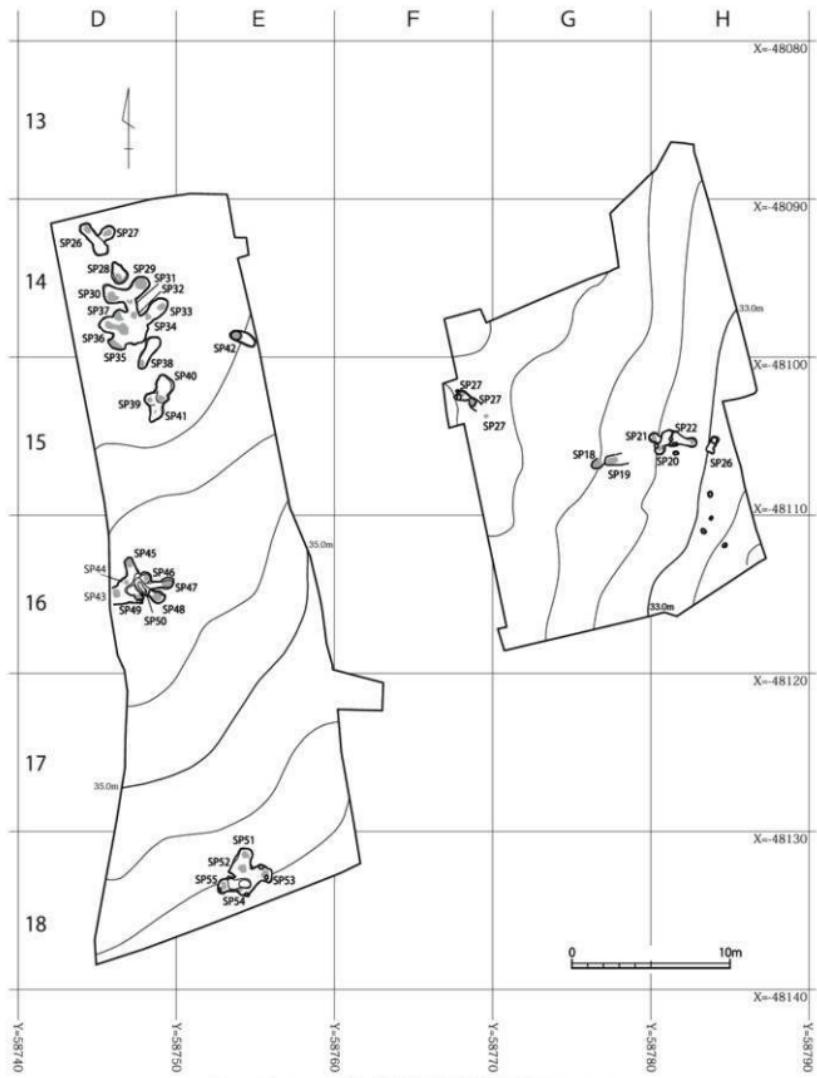
439・440は剥片である。どちらも求心状に剥離を行う石核より作出されたもので礫面を打面に設定している。なお440については、SH482出土のものであるが、同時代の所産と考えられる。



第108図 B・C地点 旧石器時代第II期石器実測図(5=2/3)

図面番号	器種	注記番号	出土地点	層位	計測値			石材	備考
					最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)		
430	二次加工剥片	B Tr4 X層	B・トレンチ4	X	2	1.7	0.6	2.3	チャートV
431	剥片	B IX上-32	B・G 14	IX	4.25	2	1.35	7.3	流紋岩Ⅰa
432	剥片	B IX-25	B・F 15	IX	4.5	4.95	2	28.5	流紋岩Ⅰa
433	剥片	B IX-24	B・G 15	IX	6.35	4.8	1.32	51.1	頁岩
434	石核	PTr10 X-1	B(試掘トレンチ10)	X	5.1	5.4	3.1	122.1	頁岩
435	原石	B XC上-67	B・H 14	X	3.55	2.9	1.9	20.2	黒曜石(产地不明)
436	剥片尖頭器	C V-16	C・E 17	VI	7.5	4.3	1.4	36.5	流紋岩Ⅰd
437	スクレイパー	B VII-8	B・G 16	VII	3.9	2	1.1	7.4	チャートⅡ
438	剥片	B VII-17	B・H 16	VII	5.9	4.15	1.7	23.2	凝灰岩
439	剥片	B VII-11	B・H 15	VII	3.3	3.75	6.5	9.1	ホルンフェルスV
440	剥片	B SH 25-1	B・SH 25	—	4.9	4.3	1.4	27	ホルンフェルスVI

第27表 B・C地点 旧石器遺物計測表



第 109 図 B・C 地点 繩文時代早期遺構分布図 (S=1/300)

第2節 繩文時代

1. 繩文時代早期の遺構と遺物

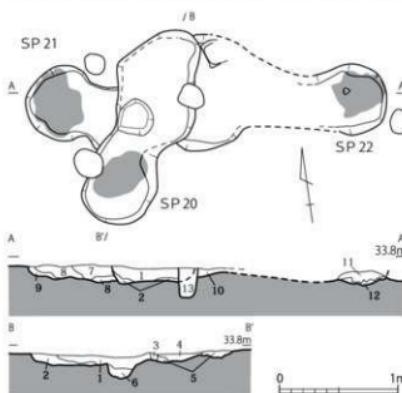
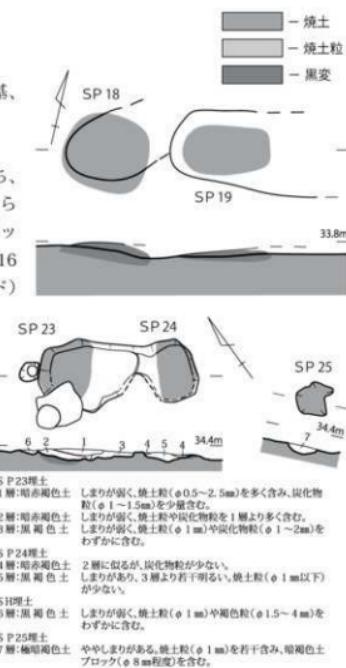
(1) 遺構

縄文時代早期の遺構はB・C地点で炉穴38基、土坑1基、ピット等が確認されている。

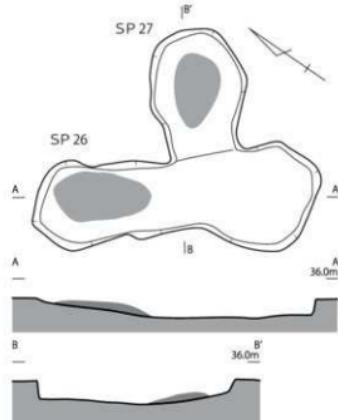
炉穴(S P) (第110図～114)

炉穴はB地点8基、C地点30基が確認している。そのうち、単独のもの3基、切り合いにより群をなすもの8群が認められ、C地点では調査区北側のD 14 グリッドからE 14 グリッド・D 15 グリッドに単独3基、群をなすもの3群の計16基(S P 26～S P 42)が集中し、調査区西側(D 16 グリッド)で1群(8基、S P 43～S P 50)、南側で1群(5基、S P 51～S P 55)の3箇所でまとまりが認められる。

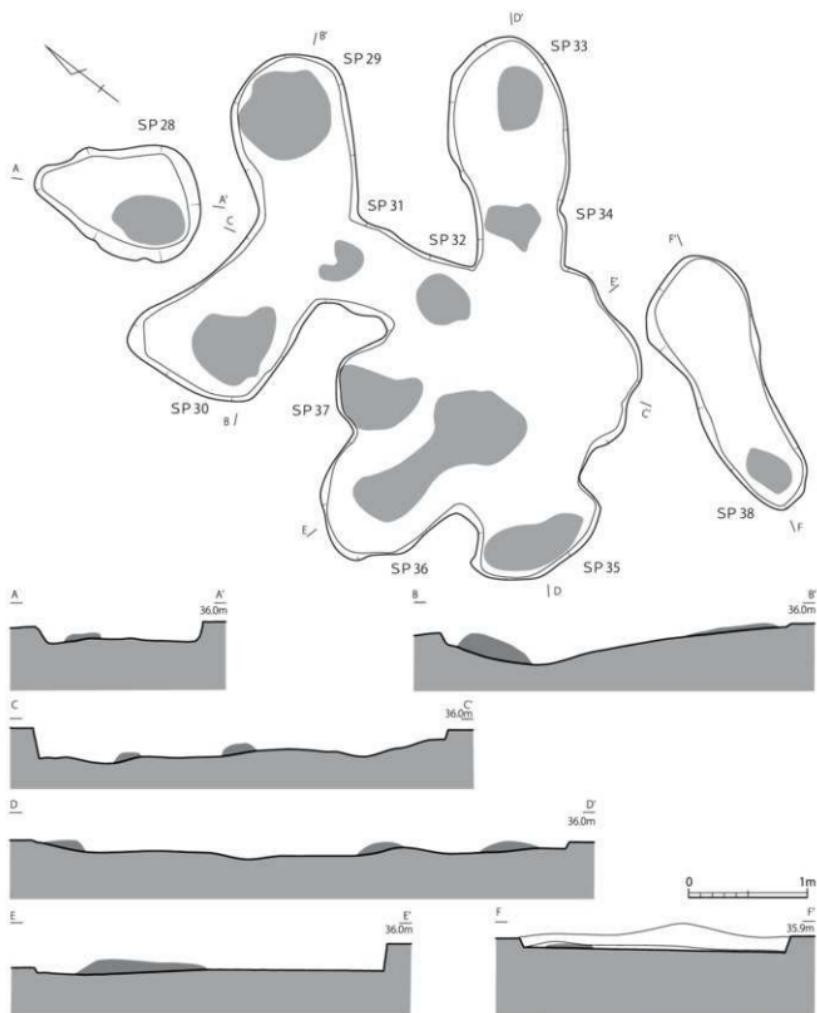
またB地点については後世の削平等により残存状態が悪く、炉部のみの検出が多いが、調査区中央から東側にかけて2群(5基、S P 18～S P 22)、北西側で



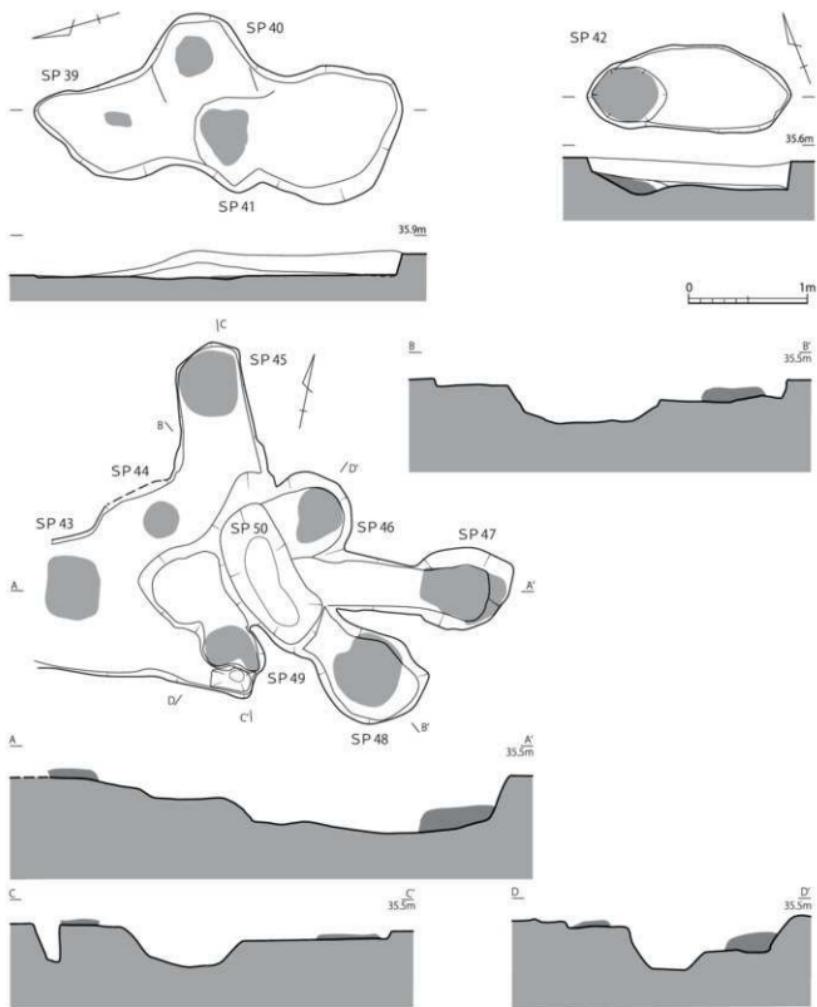
S H埋土
13層:黒褐色土 しまりが弱い。



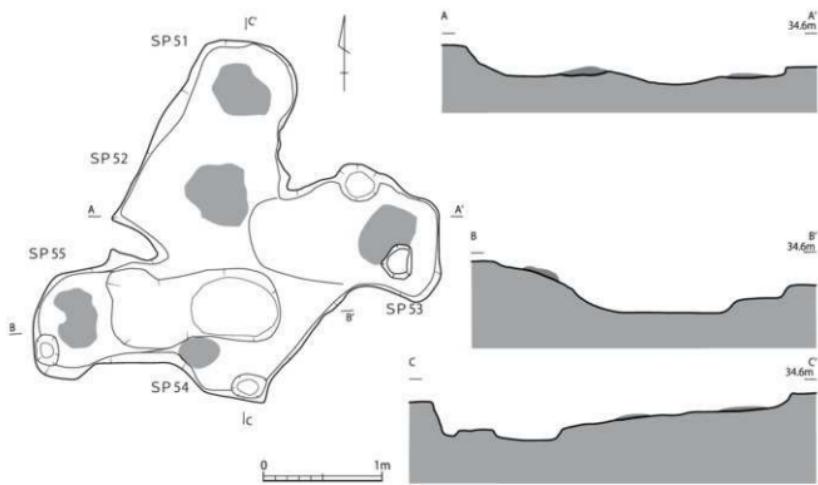
第110図 B・C地点 炉穴(S P) 実測図1(S=1/40)



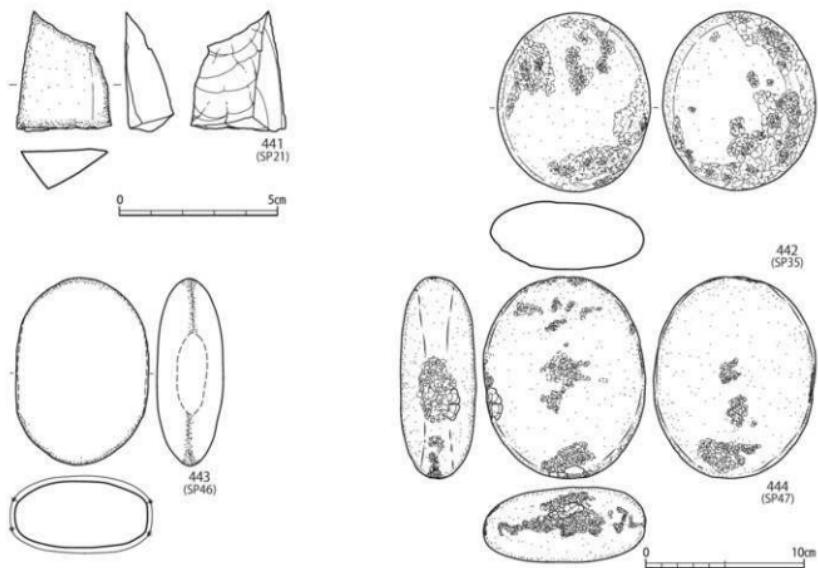
第111図 B+C地点 炉穴(SP) 実測図2(S=1/40)



第112図 B・C地点 炉穴(SP) 実測図3(S=1/40)



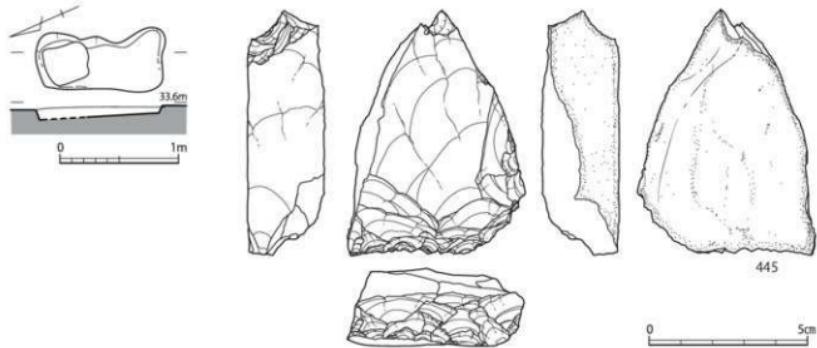
第113図 B+C地点 炉穴(S.P) 実測図4(S=1/40)



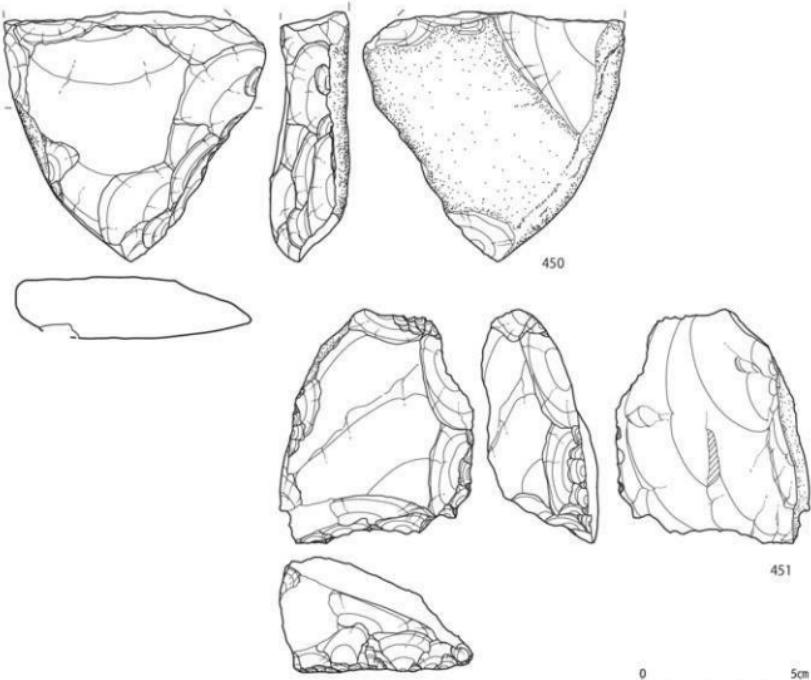
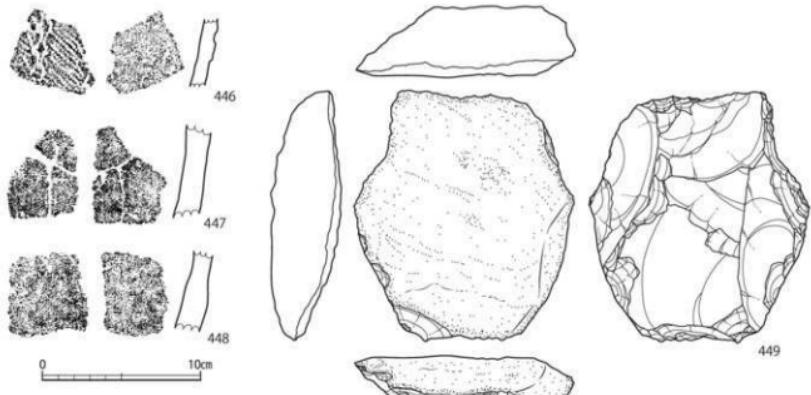
第114図 B+C地点 炉穴内出土遺物実測図(S=1/3)

No.	遺構番号	層位	調査区 (グリッド)	計測値 (m)			出土遺物	備考	日遺構番号	
				長軸	短軸	深さ				
1	SP18	VII	B・G 15	0.84±a	× 0.73±a	0.11	—	削平を受け、炉部のみ確認。炭化物を含む。	ESP1	
2	SP19	VII	B・G 15	0.99±a	× 0.62	0.06	—	削平を受け、炉部のみ確認。炭化物を含む。	ESP2	
3	SP20	VII	B・H 15	—	1.75 × 0.78	0.1	—	削平のため、底面近くまで削平を受けていた。3基の切り合いで、	ESP3	
4	SP21	VII	B・G 15・H 15	0.79±a	× 0.64	0.14	鉄片	SP20は梢円形プランを呈し、炉部と場所の地盤付近がぐぐれる。 SP20は底面積0.75m ²	ESP4	
5	SP22	VII	B・H 15	1.67±a	× 1	0.11	—	—	ESP5	
6	SP23	VII	B	0.86	× 0.6	0.08	—	削平を受け、底面近くまで削平を受ける。炭化物を含む。	ESP6	
7	SP24	VII	F 15	0.52±a	× 0.47±a	0.07	—	SP23・SP24の切り合いで關係は不明	ESP7	
8	SP25	VII	B F 15	0.82±a	× 0.62	0.07	—	削平を受け、炉部のみ確認。炭化物を含む。	ESP8	
9	SP26	VII	C	—	2.46 × 0.94	0.18	—	2基の切り合いで、2基とも炭化物を含む。そのうちSP1は梢円形プランを呈する。切り合いで關係は不明。	ESP1	
10	SP27	VII	D 14	1.06±a	× 0.87	0.2	—	—	ESP2	
11	SP28	VII	C・D 14	1.43	× 1.01	0.17	—	梢円形プランを呈し。炭化物を含む。底面積0.71m ²	ESP3	
12	SP29	VII	—	1.59±a	× 0.95	0.1	—	—	ESP4	
13	SP30	VII	—	1.50±a	× 1.15	0.28	—	—	ESP5	
14	SP31	VII	—	—	—	0.3	—	—	ESP6	
15	SP32	VII	—	—	2.08±a	× 0.74	0.2	—	—	ESP7
16	SP33	VII	C	—	—	—	9基の切り合いで、アーメーバ状を呈する。切り合いで關係は不明。	ESP8		
17	SP34	VII	D 14	2.12±a	× 1.0	1.30	—	炭化物を含む。底面積0.23m ²	ESP9	
18	SP35	VII	—	—	1.1±a	× 1.2	1.2	鐵石	—	ESP10
19	SP36	VII	—	—	2.98±a	× 1.0	1.4	—	—	ESP11
20	SP37	VII	—	—	1.02±a	× 0.72	1.1	—	—	ESP12
21	SP38	VII	C	—	2.27	× 0.92	0.19	—	梢円形プランを呈する。ブリッジは確認できず。炭化物を含む。底面積1.2m ²	ESP13
22	SP39	VII	D 14・D 15	—	1.34±a	× 0.87	0.07	—	—	ESP14
23	SP40	VII	C	—	0.75±a	× 0.8	0.11	—	3基の切り合いで、そのなかでもSP34の残りが良い。切り合いで關係は不明。炭化物を含む。	ESP15
24	SP41	VII	D 15	—	1.72±a	× 1.16	0.22	—	—	ESP16
25	SP42	VII	C	—	1.73	× 0.75	0.29	—	梢円形プランを呈する。ブリッジは確認できず。炉部は開口よりも一段深い。炭化物を含む。底面積0.87m ²	ESP17
26	SP43	VII	—	—	1.36±a	× 1.09	0.1	—	—	ESP18
27	SP44	VII	—	—	—	0.57	0.08	—	—	ESP19
28	SP45	VII	—	—	1.3±a	× 0.79	0.18	—	—	ESP20
29	SP46	VII	C	—	0.62±a	× 0.73±a	0.22	鐵石	8基の切り合いで、アーメーバ状を呈する。西側は調査区外に延びる。切り合いで關係は不明。そのうちSP50は土壌が認められないとため、土壌の可能性がある。すべての炉中に炭化物が認められた。	ESP21
30	SP47	VII	E 18	—	1.75±a	× 0.7	0.48	鐵石	—	ESP22
31	SP48	VII	—	—	1.02±a	× 0.78	0.18	—	—	ESP23
32	SP49	VII	—	—	1.24±a	× 0.63±a	0.08	—	—	ESP24
33	SP50	VII	—	—	1.21	× 0.55	0.38	—	—	ESP25
34	SP51	VII	—	—	—	0.91	0.14	—	—	ESP26
35	SP52	VII	—	—	1.98	× 1.2	0.20	—	—	ESP27
36	SP53	VII	C・E 18	—	1.96±a	× 0.95	0.22	—	5基の切り合いで、アーメーバ状を呈する。切り合いで關係は不明。すべての炉中に炭化物が認められた。底面積は4.73m ² 。	ESP28
37	SP54	VII	—	—	2.07	× 0.88	0.36	—	—	ESP29
38	SP55	VII	—	—	1.19±a	× 0.68±a	0.26	—	—	ESP30

第28表 B・C地点 炉穴一覧表



第115図 B地点 26号土坑(SC26)実測図(S=1/40)および出土遺物実測図(S=2/3)



第116図 B・C地点 繩文時代早期遺物実測図 (S=2/3)

1群（3基、S P 23～S P 25）の2箇所にまとまりが認められる。

出土遺物は石器のみで、S P 21から剥片(441)が、S P 35(442)・S P 47(444)で敲石、S P 46(443)から磨石が出土している。441は頁岩製の剥片で、表面に礫面を有する。442や444は砂岩製の扁平な礫に敲打痕がいたるところに認められる。そのうち444は表裏面に磨面が認められることから、磨石としても使用されたものと考えられる。443砂岩製の扁平な礫の表裏両側面に磨面が認められ、特に両側面のものは顕著であり、平坦に形成されている。

土坑（S C）（第115図）

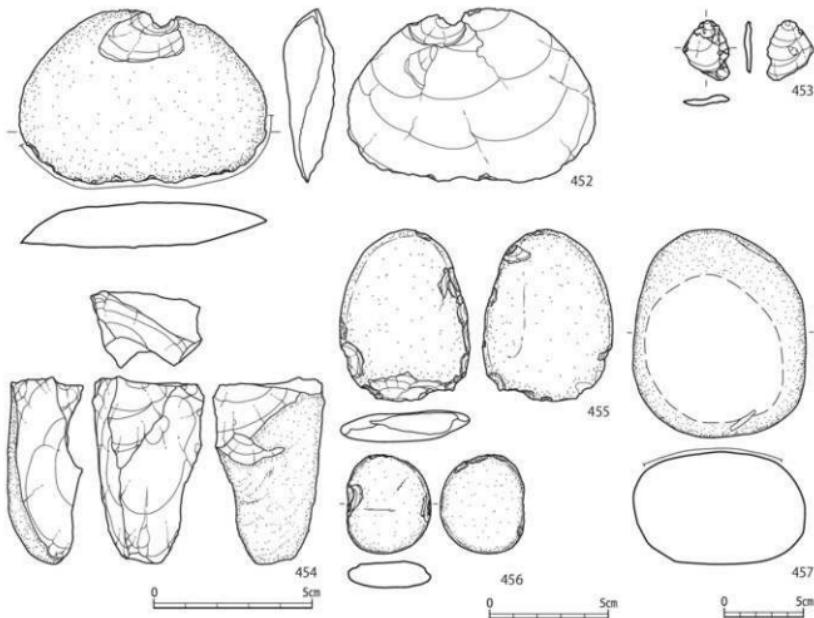
S C 26はB地点H 15グリッドに位置し、VI層で検出した。1.09 m × 0.55 mの楕円形を呈し、深さは0.09 mを測る。遺構の北側は時期不明のピットに切られている。遺物はスクレイバー（445）が1点出土している。

445はホルンフェルスIV類製の礫面を有する厚みのある剥片の打面側に、礫面から加工を行い、刃部を作出している。また右側縁には平坦剥離が認められる。

（2）土器（第116図446～448）

縄文時代早期の土器はB地点のV層でわずかに5点のみの出土している。これらは文様等の特徴から早期土器分類のIVc類（平柄式土器）とVIc類（無文土器）に分類できる。

IVc類は外面に縦位の結節縄文を施している一群で、平柄式土器に相当する。D 17グリッド1点お



第116図 B・C地点 縄文時代早期石器実測図 (S=2/3、1/2、1/3)

よりE 15 グリッド1点、E 16 グリッドの計3点出土している。そのうちD 17 グリッド出土の446は、E 16 グリッドのものと同一個体の可能性が高い。

Vc類はD 17 グリッドで1点(447)、E 17 グリッドで1点(448)出土している。どちらも厚手で内外ともナデ調整が認められる。

(3) 石器(第116図449~451、第117図452~457)

縄文時代早期の石器はC地点のV層で17点が出土している。石器の内訳はスクレイバー3点、石核1点、剥片7点、石錐1点、礫器1点、磨石3点で、出土は調査区の南側(D 16 グリッド~E 18 グリッド)で多く認められる。利用石材は流紋岩Ia類、頁岩、ホルンフェルスIV~VI類、砂岩、チャートII類等と多岐にわたる。

449~451はスクレイバーである。いずれもホルンフェルス製で、いずれも厚みのある剥片を素材に礫面(449・450)もしくは主要剝離面(451)より急角度の加工を施し、刃部を作出している。

452は微細剝離を有する剥片でホルンフェルスVI類製である。礫面を有する横長の剥片の末端に剝離痕が認められる。なお打面側の剝離は石核からの剝離時によるものである。454と同一母岩である。

453はチャートII類製の剥片である。454はホルンフェルスVI製の石核である。

455は小型の礫器である。頁岩製で末端側に刃部を形成している。456は石錐か。頁岩製の扁平な礫の短軸側に片面から加工を施すが、抉りがあまり明瞭でない。457は砂岩製の磨石である。表面にのみ磨面が認められる。

番号	器種	出土地点	層位	手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				外面	内面	焼成	外面		
446	深鉢削部	C D 17	V 結節繩文	ナデ	良好	褐色	褐色	2mm以下の黒色柱状光沢粒、3.5mm以下の灰白色粒を含む	内面は全体的に風化
447	深鉢削部	C E 17	V ナデ	ナデ	良好	褐色	灰褐色	1.5mm以下の黒色柱状光沢粒、2.5mm以下の灰褐色、3.5mm以下の灰白色、褐色柱状粒を含む	
448	深鉢削部	C D 17	V 複方向のナデ	ナデ	良好	褐色	にぶい黄褐色	2mm以下の灰白色、にぶい褐色、6mm以下の灰褐色を含む	外面上にス付着

第29表 B・C地点 縄文時代早期土器観察表

番号	器種	注記番号	出土地点	層位	計測値			石材	備考
					最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)		
441	剥片	B SP 4	B SP21	—	3.8	3	1.5	13.4	頁岩 旧B地点SP 4
442	敲石	C SP 4~12	C・SP35	—	11.25	9.6	4.3	651.5	砂岩 旧C地点SP 4
443	磨石	C SP21-1	C・SP46	—	11.75	8.4	4.2	642.8	砂岩 旧C地点SP 21
444	敲石	C SP22-1	C・SP47	—	12.7	10.2	4.75	926.2	砂岩 旧C地点SP 22
445	スクレイバー	B SC 1	B・SC26	—	7.75	5.6	2.5	134.3	ホルンフェルスⅣ 旧B地点SC 1
449	スクレイバー	P tr12 V	C (試掘トレンチ12)	V	7.8	6.9	2.2	140.6	ホルンフェルスⅣ
450	スクレイバー	C V -26	C・E17	V	7.8	8.25	2.5	165.2	ホルンフェルスⅣ
451	スクレイバー	C D18 V層	C・D18	V	7.35	5.95	3.4	140.5	ホルンフェルスⅤ
452	使用痕剥片	C D18 V層	C・D18	V	5.45	7.75	1.6	70.5	ホルンフェルスⅤ
453	剥片	C V	C	V	1.85	1.45	0.2	0.4	チャートII
454	石核	C V -33	C・E17	V	5.95	3.6	2.35	46.2	ホルンフェルスⅤ
455	礫器	C V -2	C・E16	V	7.3	5.4	1.25	67.8	頁岩
456	石錐	C V -37	C・E17	V	5.5	4.65	1.5	57.1	頁岩
457	磨石	C V -44	C・E18	V	13.15	10.9	7.1	1565	砂岩

第30表 B・C地点 縄文時代早期石器計測表



第 118 図 B・C 地点 繩文時代晩期～近世以降遺構分布図 (S=1/300)

2. 縄文時代晚期の遺構と遺物

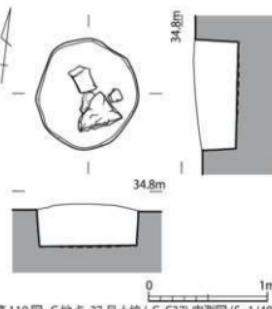
C 地点では縄文時代晚期の土坑 1 基とそれに伴う遺物が確認されている。

27 号土坑 (S C 27) (第 119 図、第 120 図 458 ~ 461)

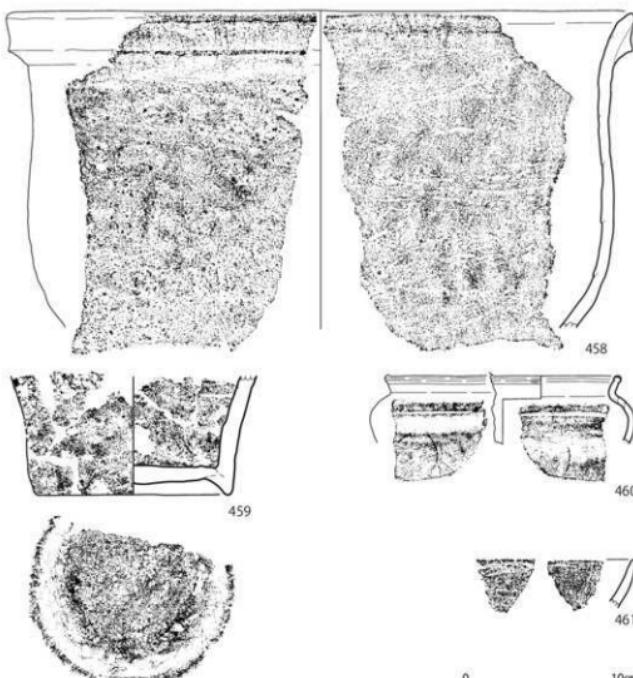
S C 27 は C 地点 D 18 グリッド西側で検出した。遺構は $0.94 \text{ m} \times 0.86 \text{ m}$ の円形に近いプランを呈し、検出面から深さは約 0.28 m 、床面積 0.56 m^2 を測る。埋土は黒褐色土主体で 3 層に分かれ。底面近くには $20 \sim 30 \text{ cm}$ 程度の板状の凝灰岩 3 点とともに土器が出土している。

遺物は縄文時代晚期の深鉢や浅鉢が出土している。これらは黒川式土器もしくは黒川式に並行する土器群である。

458 は深鉢で口縁端部直下に断面三角形の幅広の貼付突帯を有する。内外面ともナデ調整が施されている。459 は深鉢の底部である。やや外傾しながら立ち上がり、底部はあげ底を呈する。内外面ともナデ調整を施されている。S H 638 出土のものと接合する。



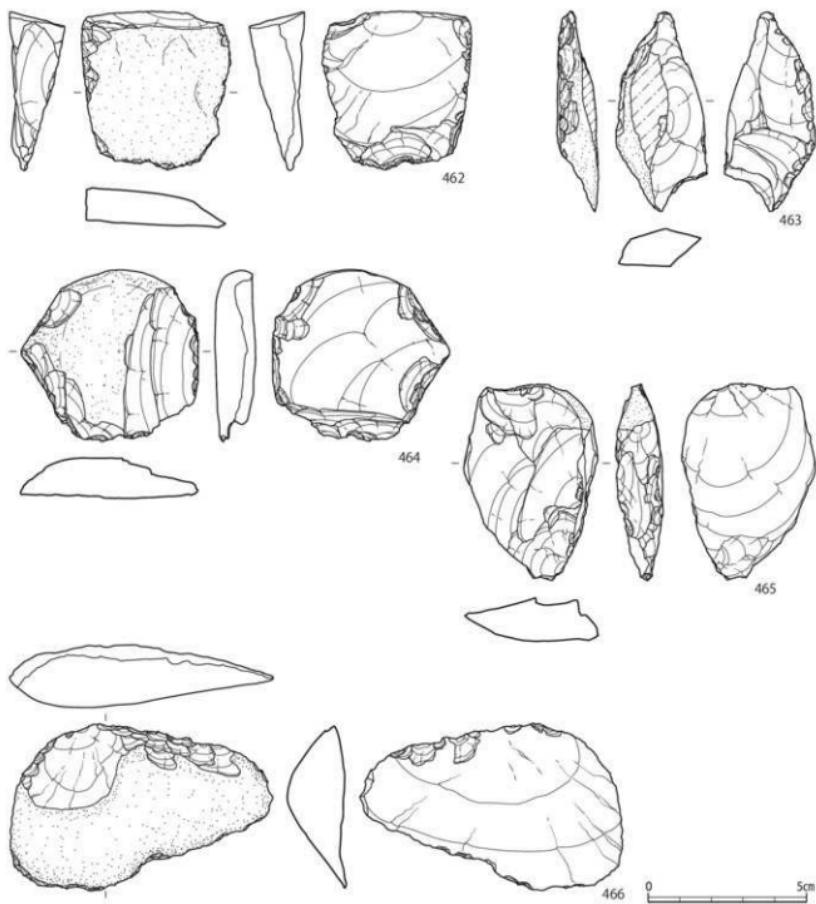
第 119 図 C 地点 27 号土坑 (S C 27) 実測図 ($S=1/40$)



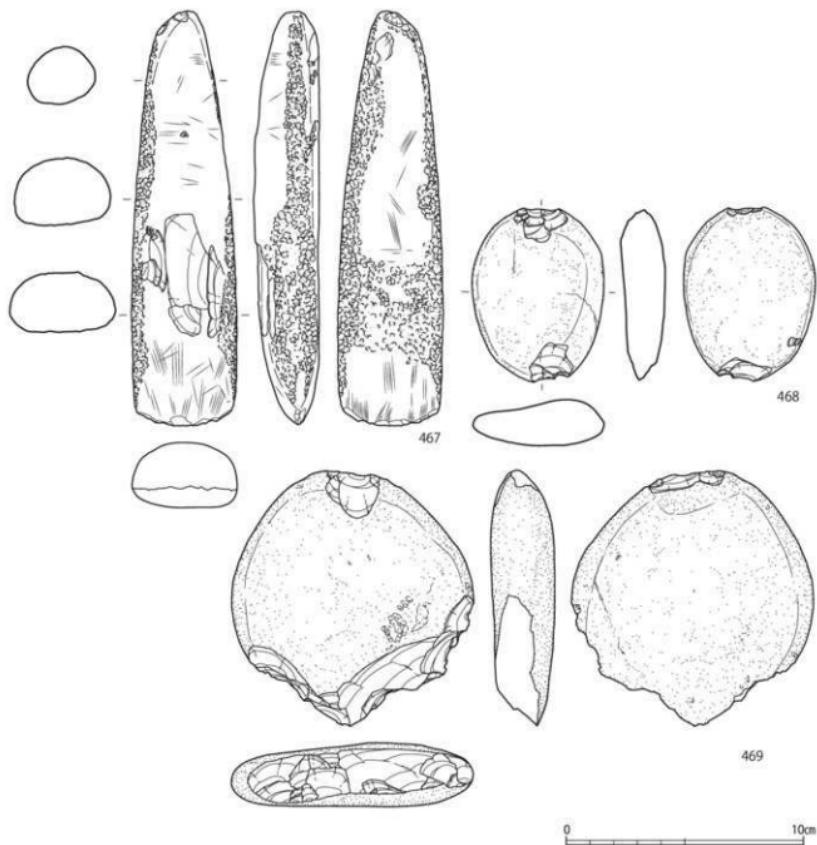
第 120 図 B・C 地点 27 号土坑 (S C 27) 出土実測図 ($S=1/3$)

460 は精製浅鉢である。胸部最大径が口径よりも大きいもので、丸い胸部に短い玉縁状の口縁部を有する。また欠損しているため、詳細は不明だが、口縁部の一部には突起（ヒレ状突起の可能性がある）が認められる。内外面にミガキ調整が施されている。また口縁部の沈線文内的一部分には赤色顔料が付着している。

461 は粗製の浅鉢で、外面にはススが付着している。



第121図 B・C地点 繩文時代石器実測図1 (S=2/3)



第122図 B・C地点 繩文時代石器実測図2(S=1/2)

3. 繩文時代の石器（第121図462～466、第122図467～469）

縄文時代晩期以降の遺構や表土及び攪乱土中から出土したものを一括した。時期は縄文時代の所産と考えられるが、細かな時期まで特定できなかったもので、そのうちの一部について説明したい。

462は頁岩製のエンドスクレイパーである。礫面を有する幅広の剥片の末端部に、礫面から加工を行い、刃部を形成している。464は頁岩製のラウンドスクレイパーである。礫面を有する剥片の周縁を両面から加工を施している。463は緑色凝灰岩製のサイドスクレイパーである。左側縁側を両面から加工を行い、刃部を作出している。

465・466は二次加工剥片である。そのうち465は頁岩製で、礫面打面を有する縦長剥片の右側面側下部中央に主要剥離面から加工を施している。また466は砂岩製で礫面を有する横長の剥片を素材に打面側に二次加工を施している。末端部分はガジリが多いものの、一部に微細な剥離痕が認められるこ

とから、鎌形剥片石器の可能性がある。

467は磨製石斧である。乳房状を呈し、両側面及び裏面の一部には敲打調整が認められる。刃部は片面を呈する。凝灰岩製。

468は石錘である。扁平な砂岩礫の長軸側を両面から加工を施し、紐掛部を作り出している。

469は礫器である。扁平な砂岩礫の下部に片面から加工を行い、刃部を作出している。また上部にも加工が認められることか石錘を転用した可能性が考えられる。

画面 番号	器種	地點	層位	手法・調整・文様ほか		焼成		色調		胎土の特徴	備考
				外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面		
458	深 縫 底 部	C S C 27 SH 638	-	剥離突削 横ナギ後に削おさえ 横方向に削いナギ	横方向にナギ 削め方向に工具痕 斜め方向のナギ	良好	橙色 にぶい褐色	2.5mm以下の褐灰色粒、4mm以下の 灰褐色粒、6mm以下の灰白色粒を含む	旧C地點S C 1、SH 70 口径は39.3cm 外面にスス付着		
459	深 縫 底 部	C S C 27 SH 638	-	不定方向のナギ	横・斜め方向のナギ 横方向のナギ 工具痕	良好	橙色 橙色	2mm以下の黒褐色粒、3mm以下の 灰褐色のある灰白色粒、明瞭灰褐色、 4mm以下の灰白色粒を含む	旧C地點S C 1、SH 70 あけ底、口径12.2cm底部 に一部黒斑、入穴有		
460	浅 縫 底 部	C S C 27	-	沈縞文 ミガキ 口縫部に突起あり	沈縞文 ミガキ	良好	黒褐色 黒褐色	1.5mm以下の灰白色・黒褐色粒、4 mm以下の褐灰色粒を含む	旧C地點S C 1 口径は14.6cm 底部内に赤色顔料付着		
461	浅 縫 底 部	C S C 27	-	横方向の条痕 スス付着	横方向の条痕後、削 おさえ	良好	黒褐色 にぶい褐色	1mm以下の黒褐色・灰白色粒を含む	旧C地點S C 1		

第31表 B・C地點 繩文時代晚期土器観察表

画面 番号	器種	注記番号	出土地點	計測値				石材	備考
				最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)		
462	スクレイバー	B S C 2	B S C 28	5	4.75	1.7	43.7	頁岩	旧B地點S C 2
463	スクレイバー	B S H 1	B S H 455	6.3	2.9	1.25	18.7	緑色凝灰岩	旧B地點S H 1
464	スクレイバー	B カクラン	B 攪乱	7.2	1.7	1.7	111.6	頁岩	旧B地點S C 2
465	二次加工剥片	B S C 2	B S C 28	6.25	4.25	1.5	39.5	頁岩	旧B地點S C 2
466	二次加工剥片	C S H 67	C S H 635	8.25	5.25	1.95	66.4	砂岩	
467	磨製石斧	B S H 7	B S H 461	17.45	4.5	2.8	320.2	凝灰岩	旧B地點S H 7
468	石錘	B S H 21	B S H 477	7.35	5.55	1.9	104.4	砂岩	旧B地點S H 21
469	礫器	B S C 2	B S C 28	10.75	2.7	2.7	390.8	砂岩	旧B地點S C 2

第32表 B・C地點 繩文時代石器計測表

第3節 弥生以降

1. 弥生時代～中世の遺物

(1) 弥生時代～古代の遺物（第123図 470～479）

B・C地点ではピット（S H）等の遺構及び表土層や攪乱層等から弥生時代～古墳時代にかけての遺物がわずかながら確認されている。掲載している遺物のうち、470・479は弥生時代、471～477は古墳時代、478は古代の所産である。

470は二重口縁壺の口縁部で櫛描による波状文を描いている。内面はナデ調整が施されている。

471～437は甕である。そのうち471は口縁部が外反しながら延びており、内外面ともナデ調整を施されている。472は外面に平行タタキが施されており、全体的にスヌが付着している。内面はナデ調整である。473は底部付近で外面は縦・斜位のタタキ、内面は縦・斜位のナデ調整を施されている。474はS H 623出土で壺の底部である。475は高環の脚部で「ハ」の字に開く。S H 619出土。476～478は須恵器である。そのうち476は环蓋の口縁部、477・478は甕の胸部である。

479は平根系鉄錆の罐身部分である。断面形は平造である。

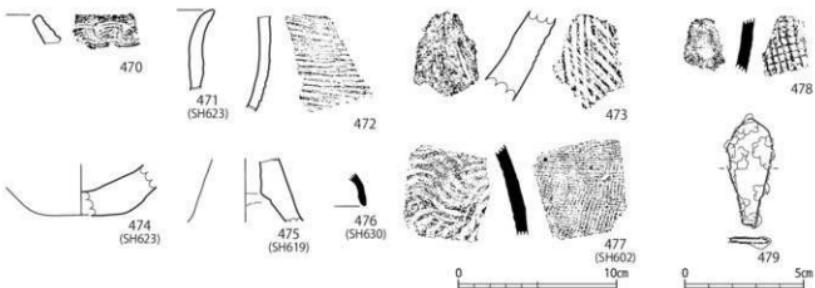
(2) 中世の遺物（第124図 480～501）

B・C地点では、中世の遺物について小片が多く、年代が特定できないものも多いが、その中で22点を図化した。なお482・489～492はS C 27、487がS H 460出土で、他は表土及び攪乱層からの出土である。

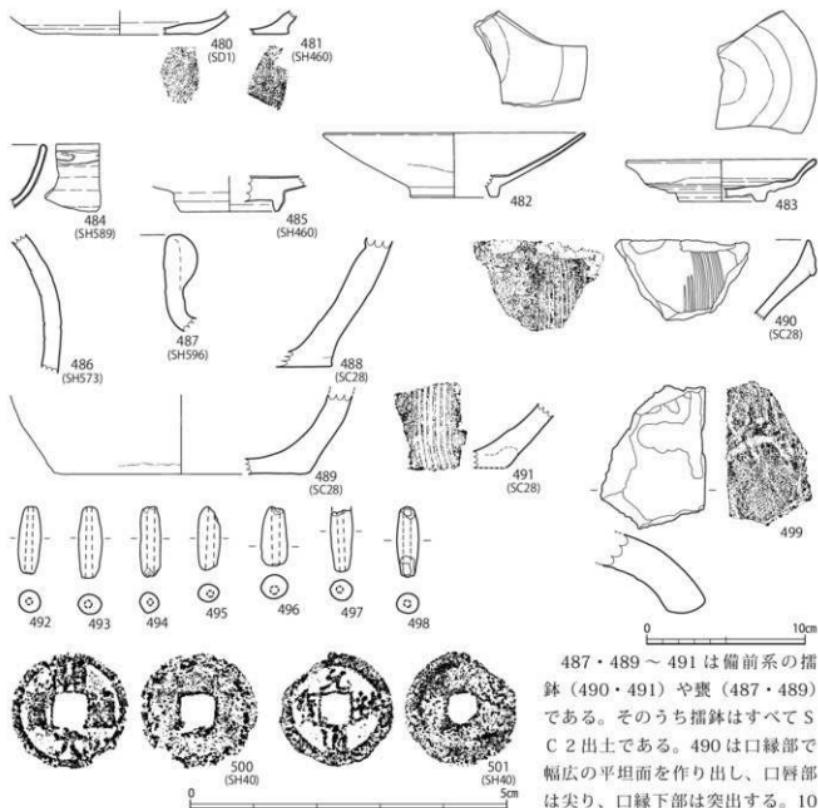
480・481は土師皿である。いざれも底面の切り離しは回転糸切りである。

482は白磁の碗である。底部から斜上方に向かって直線的に開き、体部外側中位から底部にかけて無釉となる。また内面の体部上方に1条の圈線が巡り、見込みには蛇ノ目釉剥ぎとする。大宰府分類の白磁碗Ⅷ-2類（12世紀中頃から後半）と考えられる。また483は高台をもつ皿で、体部中位で屈曲し、外反しながら口縁部に至る。体部中位から高台にかけて露胎が認められる。見込みには、蛇ノ目釉剥ぎが認められる。

484・485は青磁碗である。そのうち484は口縁部から体部までの資料で口縁部には片切彫りによる波化した雷文帯が認められる。体部の割りが著しくある。上田分類のC-I-III類（15世紀末葉）にあたる。485は底部で釉が厚く、見込みには不明瞭ながら印花が認められる。高台下部外側は斜めに面取されており、釉は高台内までかかり、拭き取っているが、一部釉が残っている。14世紀から15世紀の所産である。



第123図 B・C地点 弥生時代～古代遺物実測図 (S=1/3, 1/2)



第124図 B・C地点 中世遺物実測図(S=1/3、1/1)

する捕目が認められる。487は口縁部を折り返して、ヨコナデ等で整形、断面を長楕円形に仕上げている。S H 596出土。なおS H 606やS H 638等にも腰の胴部片が出土している。

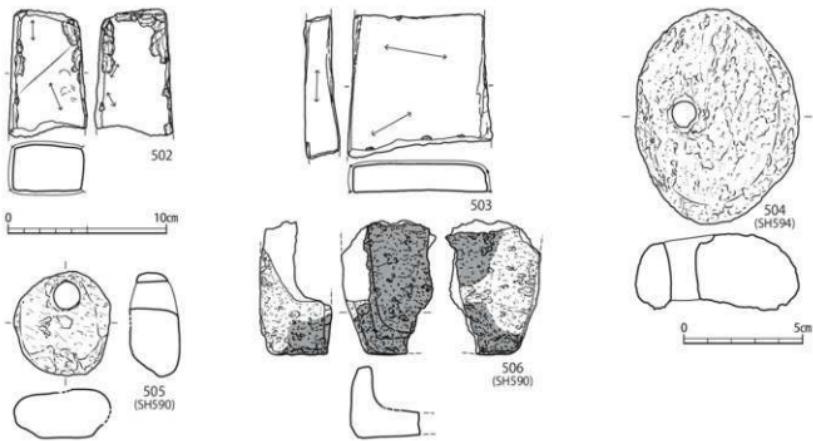
486は須恵質腰の胴部、488は陶質腰の底部片で焼きが甘く、内側が橙色を呈する。

492～498は土錘である。B・C合わせて12点出土している。ここでは残存状況の比較的良好な7点を図化した。大半のものは中位に最大幅をもつが、496のように片端に最大幅をもち、もう一端に向かって細くなるものも認められる。完形に近いもの平均値は、長さ約4.15cm、幅約1.43cm、重量約7.06gである。

499は軒丸瓦。四部には布目が認められる。焼成が甘く、暗褐色を呈する。

500・501はS H 608出土の古銭である。そのうち、500は開元通宝(唐、初鑄845年か?)で、腐食が著しく、緑色を呈する。背面は無文である。501は元祐通宝(北宋、初鑄1086年)で部分的に腐食により緑色を呈している。縁周の半分以上を欠損している。

487・489～491は備前系の擂鉢(490・491)や盞(487・489)である。そのうち擂鉢はすべてSC2出土である。490は口縁部で幅広の平坦面を作り出し、口唇部は尖り、口縁下部は突出する。10条1単位とする捕目が認められる。491は底部である。8条1単位と



第125図 B・C地点 石製品実測図 (S=1/3, 1/2)

(3) 石製品 (第125図 502～506)

これら石製品はC地点のピットや擾乱層で出土したものである。時期は古代～中世の所産と考えられるが、中世以降の可能性も捨てきれない。

502・503は砥石であり、どちらとも砂岩製である。502は表裏面及び左側面の3面が使用されており、そのうち表面には使用により、斜めに稜が入る。503は表面及び両側面を砥面としている。

545～547は軽石製品である。504・505は有孔軽石である。どちらも円盤状に整形されており、504には中央左寄り、505には中央から上方寄りに孔が穿たれている。浮子として利用された可能性が考えられる。506は容器を模したものであろうか。約1/4が残存しているものと考えられ、丁寧に整形されている。大半が黒変している。

2. 近世以降の遺構と遺物

B地点では、近世の掘立柱建物跡1棟や近世墓1基、近代以降の土坑2基等が確認されている。また遺構以外にも表土及び擾乱層から近世の遺物が出土している。

(1) 掘立柱建物跡

2号掘立柱建物跡 (SB2) (第126図)

SB2はB地点G16グリッドに位置し、VI層で検出した。主軸はN-16.2°-Wをとり、桁行2間(4.5m～4.71m)×梁行2間(約3.9m)の建物跡(床面積17.92m²)と考えられる。桁行の柱間は北西桁が2.68m、1.82m、北東桁が2.8m、1.91m、梁行の柱間は北梁が1.58m、2.31m、南梁が2.05m、1.85mを測る。桁行の平均柱間は2.3m、梁行の平均柱間は1.95mである。

柱穴は円形から楕円形を呈し、直径は0.34m～0.57m、深さは0.2m～0.68mである。埋土は黒褐色土主体であり、遺物は近世の袋物もしくは火入の底部と考えられる磁器片や鉄製品(507)が出土したが、そのうち磁器片は小片のため、図化はしていない。537の鉄製品は板状を呈し、片側へ向かって薄くなる。

(2) 近世墓

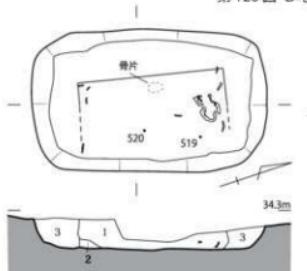
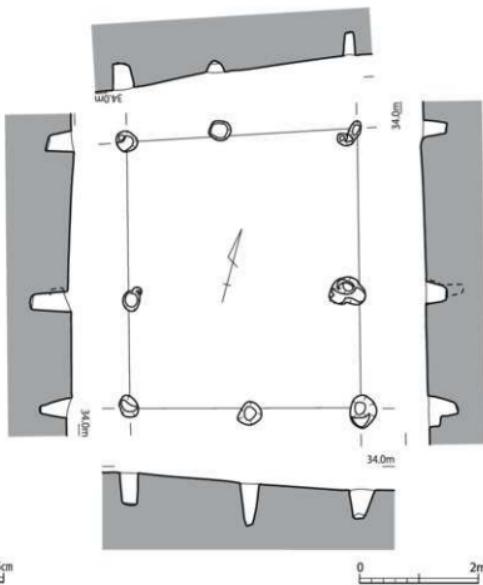
1号近世墓 (SD 1) (第127図)

SD 1はB地点F 14 グリッド南東端からF 15 北東端に位置し、IX層で検出した。主軸方向はN-12.2°-Eをとる。遺構は1.99 m × 1.2 mの隅丸長方形プランを呈し、検出面の深さ0.27 m、底面積1.55 m²を測る。埋土は暗褐色ブロック等を含む黒褐色土を主体とし、3層に分かれ。中央には黒色土の落ち込みがあり、黒色土と黒褐色土の境では鉄釘が出土した。また黒色土中には頭蓋骨の一部（右側頭頂骨の一部と右側側頭骨の外耳孔周辺部分、下頬骨）と歯とともに寛永通宝が確認されている。黒色土の範囲は1.23 m × 0.5 m + α を測り、土坑主軸より、さらに6°西に振る。おそらく木棺が腐蝕した部分に黒色土が流入したもの

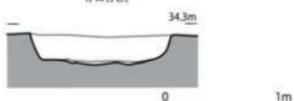


507

第126図 B地点 2号掘立柱建物跡 (SB 2) 実測図 (S=1/80) 及び出土遺物実測図 (S=1/2)



- 1層: 黒色土 粘質ややしまりがある。暗褐色土粒(φ 1~2 mm)や暗褐色土ブロック(φ 2~5 mm)を多く含む。
2層: 黒褐色土 粘質ややしまりがない。1層よりやや明るく、黒褐色土粒(φ 1~2 mm)を多く含む。
3層: 黑褐色土 やや粘質でややしまりがある。暗褐色土ブロック(φ 2.5~6 mm)を多く含み、A Tブロック(φ 2~5 mm)をわずかに含む。



第127図 B地点 1号近世墓 (SD 1) (S=1/40) 及び出土遺物実測図 (S=1/2)



と考えられ、人骨の位置関係から仰臥の状態で埋葬されていたものと推測される。

なお、人骨は上井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムの松下孝幸氏の分析結果によれば壯年男性の人骨の可能性が高いとされている。

508～518は鉄製の釘である。断面が長方形もしくは方形を呈する。そのうち508や509、510、518の頭部が軸上端頭部から折り曲がり、先端が内側に丸く巻き込む特徴から、巻頭釘である。また511や515、516については腐蝕が著しく、判別が困難である。

また掲載しているものの大半に木質が付着、もしくはその痕跡が認められる。多くは脣部から先端部にかけて縦方向の木目もしくはその痕跡が認められるが、508は頭部から首部にかけて横方向と2方向の木目が認められる。516・518は脣部から先端部にかけて横方向の木目が認められる。なお516の木質に隠れた部分については、軟X線によれば、渦巻状に変形している。

519・520は寛永通宝である。そのうち519は暗灰色を呈する。表面に書かれている文字は明瞭に確認できるものの、脆弱である。

(3) 土坑

近世以降の土坑が2基（SC 28・29）確認されている。そのうちSC 28からは縄文時代の石器や古墳時代の土師器、中世の陶磁器類や近世の陶磁器・鉄器、近代の陶磁器等が出土しており、またSC 29では洋釘が出土している。ここでは縄文時代～近代までの遺物を含むSC 28について説明を加えたい。

28号土坑（SC 28）（第128図、第129図521～529）

SC 28はB地点G 16グリッド東側からH 16グリッド西側に位置し、VI層で検出した。5.2m×2.5mの長楕円形プランを呈する大型の土坑で検出面からの深さは0.74mを測る。底面積は6.8m²である。埋土は粘りのある黒色土主体で3層に分かれる。遺物は遺構中央付近から古墳時代の土師器や中世の青磁や近世の陶磁器、瓦等の他、クロム青磁や「型紙摺り」の碗など明治期以降のものも出土しており、近代の所産と考えられる。ここでは近世に属する遺物を抽出して報告することにする。

521は唐津の陶器碗である。体部には白化粧土による波状文、内面には粗い文様が刷毛目で施されている。また豊付けに砂目が認められる。17世紀後半。

522は広東碗で、1780年から1810年代の所産である。外面には暦文が描かれ、内面見込みに一重の園線が施されている。また見込み中央には文様が認められるが欠損のため、不明である。

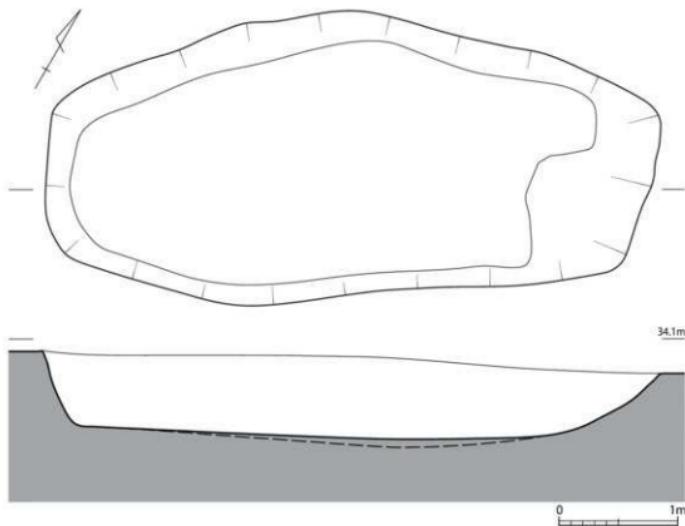
523は肥前系の染付五寸皿である。外面には簡略化された唐草文が施されており、高台内には、渦福文が認められる。また内面には半菊花文が描かれ、見込にはコンニャク印判（形骸化されていない五弁花）が認められる。17世紀後半から18世紀前半。

524は高台内中央部を円形に削り込む、いわゆる「蛇の目凹形高台皿」である。豊付けには軸がかかり、内面には船遊びをする人物が描かれている。18世紀後半。

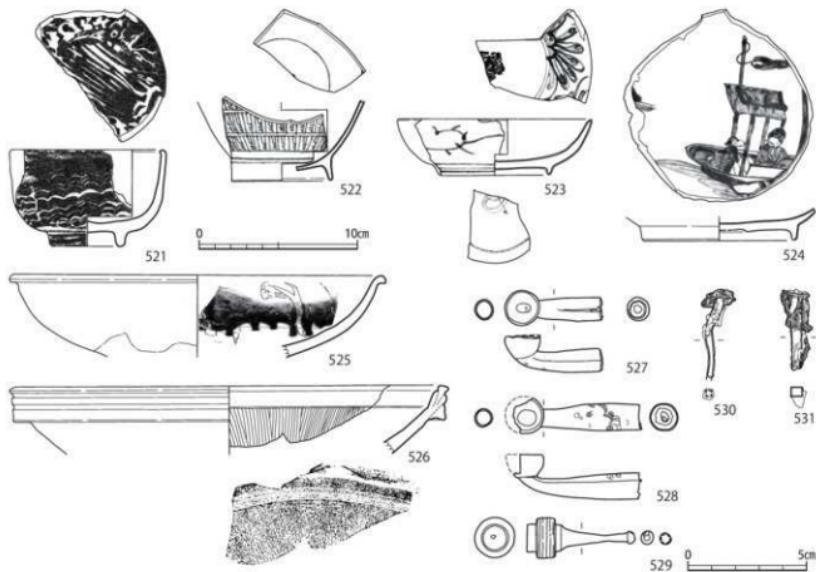
525は陶器皿である。口縁端部を外方に折り返し、外面の体部中位から下方に鉄軸が認められる。内面および体部外面中位まで明黄褐色の軸を施し、さらにその上に白泥と鉄軸により文様が描かれている。時期不明だが、近世後半の所産か。

526は明石・堺系の焼締擂鉢である。暗赤褐色を呈し、幅広の口縁部には2条の沈線が廻り、内面端部には1条の細沈線が施されている。また内面体部には9条1単位の細めの擂目を密に施す。18世前半の所産である。

527～529は銅製の煙管である。そのうち527・528は雁首である。528は火皿部が約1/2欠損している。首部はあまり湾曲せずに、首部上面には毛彫による図柄（草花か）が施されている。529は528と比べ、首部が短く、湾曲もさらに弱い。どちらも管内に羅字が残存する。528は吸口である。小



第128図 B地点 28号土坑（S C 28）実測図（S=1/40）



第129図 B地点 28号土坑（S C 28）出土遺物実測図（S=1/3、1/2）

口から口付に向かって、1/3程の部分に稜をもち、やや湾曲しながら窄まり、口付部で玉状に膨らむ。小口と稜の間には、厚みのある肩付が巻かれており、その上には5条の沈線が巡らされている。

530・531は、鉄製の釘で、いずれも断面が方形を呈する。どちらも先端部が欠損している。いずれも木質が付着している。

(4) 近世の遺物（第130図532～537）

B・C地点では、近世の遺物が数多く出土している。多くが表土及び造成土中からの出土であり、そのうち、12点を図化した。

532・533は土師器小皿である。いずれも底面の切り離しは回転糸切りである。厚みがあり、口唇部端部は丸く調整している。中世のものと比べ硬質である。532は体部が内湾気味に立ち上がるのにに対して、533は外湾気味に立ち上がる。どちらも口径は6.6cmである。532はSH591、533がSH593で出土である。

534は肥前系の染付端反碗で、1820年代から1860年代の所産である。釉の定着が悪く、高台脇に釉ちぢみが認められる。外面には虫籠文が描かれている。なお、欠損部付近には文様が描かれているが判然としない、おそらく蝶であろう。また口縁内側には四方禪文が認められ、見込には一重圓線内に虫？が描かれている。

538は試掘トレーンチ5出土のチャート製火打ち石である。稜の潰れが顕著である。

536～538は寛永通宝である。そのうち537は背文銭である。暗赤褐色を呈し、他の2点より一回り小さく、背面の縁幅が広い。背面には「元」の文字が認められる。

3. 時期不明の遺構

(1) 掘立柱建物跡

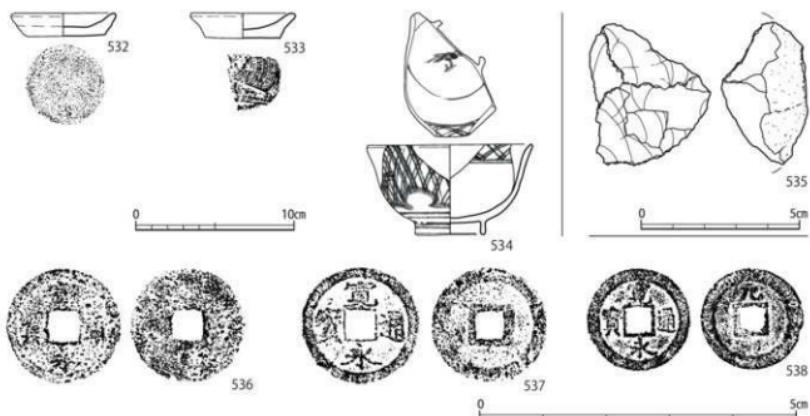
B・C地点では、約350基におよぶピット群を検出した。そのうち多くのピットには遺物が伴わず、時期決定が困難である。そのなかで近世の建物跡以外に2棟確認されている。

3号掘立柱建物跡（SB3）（第131図）

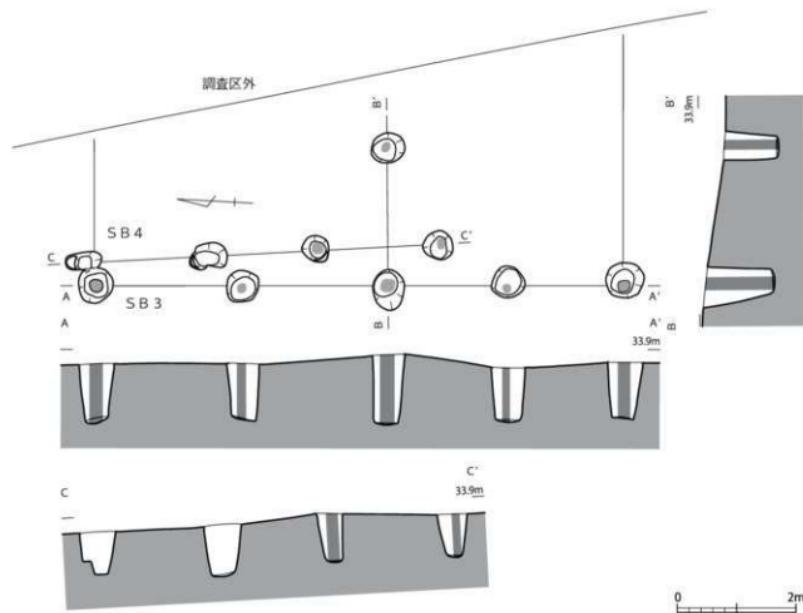
SB3はB地点H14グリッドからH15グリッド北側にかけて位置する。東側が調査区外に延びるため、全容は不明だが、桁行4間（8.92m）×梁行1間（2.37m）以上の建物跡と考えられる。建物跡は主軸がN-5.3°-Wをとり、桁行2間（4.5m）×梁行2間（3.9m）で、桁行の柱間は2.47m、2.49m、2.0m、1.93mである（平均柱間2.23m）。柱穴の掘り形は円形から楕円形を呈し、直径は0.53m～0.69m、深さは0.9m～1.2mを測り、底面のレベルはほぼ揃う。柱穴には全て柱痕跡を有し、柱痕跡から推定される柱径は0.16m～0.23mである。梁行は南北とも確認されていないが、桁行中央の柱穴に並ぶ柱穴があり、床束柱になる可能性がある。建物内からの遺物等の出土はなかった。VI層検出。

4号掘立柱建物跡（SB4）（第131図）

SB4はB地点H16グリッドに位置する。4基の柱穴が、N-8°-Wの方向をとり、1列（全長6m）に並ぶ。柱間は北から2m、1.92m、2mとほぼ間隔が揃う。柱穴は楕円形を呈し、直径は0.46m～0.63m、深さは0.7m～0.88mで、底面のレベルはほぼ揃う。また南側の柱穴2基について柱痕跡を有し、北側の柱穴はSB3の柱穴を切っている。東西に延びる柱穴は確認されていないため、柵列の可能性もあるが、調査区外に延びる可能性も考えられることから、ここでは掘立柱建物跡とした。



第130図 B地点 近世遺物実測図 (S=1/3, 1/2)



第131図 B地点 掘立柱建物跡 (SB) 実測図 (S=1/80)

番号	種別	部位	地点	高さ	法量 (cm)			手法・調整・工程ほか	施成	色調	断面上の特徴	備考			
					(B)	(B)	外面								
470	斧	上部	秦	C				ナデ 横刃吹灰 上刃部ナデ	横ナデ 風気吹灰	良好	浅黄褐色 浅黄褐色	2mm以下の黒褐色、2.5mm以下の 灰褐色、3mm以下の 褐色、灰褐色を含む			
471	土師器	土	土	C				ナデ 威力によるナデ斜め方向ナデ	不定方向のナデ 斜め方向ナデ	良好	明黄褐色 明黄褐色	2.5mm以下の灰褐色、3.5mm 以下の灰褐色を含む	旧C地点 S H 56		
472	土師器	土	土	C				平行タキ	不定方向のナデ	良好	にじむ褐色 黒褐色	1mm以下の黒褐色、5mm 以下の灰褐色を含む	外表面付着		
473	土師器	土	土	C				縦め方向タ タキ	斜め方向のナデ全体化 横め方向化	良好	にじむ褐色 褐色	3mm以下の黒褐色、7mm以下の 灰褐色を含む			
474	土師器	土	土	C	推定	5.5		縦・斜め方向ナ デ	ナデ	良好	にじむ褐色 灰褐色	2mm以下の黒褐色、3mm以下の 灰褐色を含む	内面黒化灰味 旧C地点 S H 55		
475	土師器	土	土	C				ナデ 威力による工具ナデ 工具による押さえ	威力による工具ナデ 工具による押さえ	良好	褐色 褐色	2mm以下の黒褐色、4mm以下の 灰褐色、5mm以下の 褐色を含む	旧C地点 S H 51		
476	瓦	瓦	瓦	C				回転ナデ	回転ナデ	堅韌	灰色 灰色	0.5mm以下の灰褐色を含む	旧C地点 S H 62		
477	瓦	瓦	瓦	C				カナリ後、平行タ タキ	同心円工具底	堅韌	オーリーバラ色 灰色	0.5mm以下の灰褐色、1mm以下の 灰褐色を含む	外表面黒化味 旧C地点 S H 34		
478	瓦	瓦	瓦	C				筋目タキナ	ナデ	堅韌	黄褐色 黄褐色	良			
480	土師器	土	土	B	推定	10.6		回転ナデ 糸切り底	回転ナデ	良好	褐色 褐色	繊細な透明白色粒、0.5mm以下の 灰褐色を含む			
481	土師器	土	土	B	推定	6.2		威力によるナデ 糸切り底	威力方向のナデ	良好	灰褐色 灰褐色	1mm以下の黒褐色、2mm以下の 褐色を含む	内面黒化灰味 旧B地点 S H 6		
482	白 瓷	白 瓷	白 瓷	B	推定	17.2	6.2	推定	施加 時刻附近に洗練1条 見跡/日目割ぎ	堅韌	灰白色 灰白色	1mm以下の黒褐色、2mm以下の 褐色を含む	中国 12 C中		
483	白 瓷	白 瓷	白 瓷	B	推定	11.9	5.4	施加 露窓 つけ目	施加 露窓 つけ目	堅韌	灰白色 灰白色	1mm以下の黒褐色を含む			
484	青 瓷	青 瓷	青 瓷	C				当輪	当輪	堅韌	灰オーリーバ 灰オーリーバ	1mm以下の黒褐色を含む	旧C地点 S H 21 露窓 15 C中		
485	青 瓷	青 瓷	青 瓷	B	推定	6.2		施加貫入 底部は踏鉢	施加貫入 底部は踏鉢	堅韌	灰白色 にじむ褐色	1mm以下の黒褐色、灰白色、 淡黄褐色を含む、1mm程度の 灰白色の点を含む	旧B地点 S H 6 露窓室 14 C~15 C		
486	施加器	施加器	施加器	C				威力方向ナデ 威力方向ナデ 不定方向のナデ	威力方向の工具ナデ	堅韌	灰白色 灰白色	2mm以下の黒褐色、4mm以下の 灰褐色、6mm以下の 褐色を含む	内面付着 旧C地点 S H 5		
487	陶 器	陶 器	陶 器	C				横め方向ナデ 工具ナデ	横め方向ナデ	堅韌	相灰色 相灰色	3mm以下の黒褐色、相褐色、 4mm以下の灰褐色、8mm以下の 褐色を含む	旧C地点 S H 28 前削		
488	陶 器	陶 器	陶 器	B	推定	SC28		横・斜め方向の工具 ナデ 底面ナデ	横・斜め方向の工具 ナデ 底面ナデ	不完全	灰褐色 褐色	0.5mm以下の黒褐色、3mm以下の 灰白色を含む	旧B地点 S C 2		
489	陶 器	陶 器	陶 器	B	推定	SC28	16.2	威力方向ナデ ヨコナデ 底面ナデ	ヨコナデ	堅韌	暗赤褐色 にじむ褐色	1mm以下の黒褐色、2mm以下の 灰褐色、3mm以下の 灰白色、黑褐色、7mm以下の 赤褐色を含む	旧B地点 S C 2 前削		
490	陶 器	陶 器	陶 器	B	推定	SC28		ヨコナデ後、一部 威力方向ナデ 工具部はヨコナデ	ヨコナデ 7条の標文	堅韌	灰赤色 にじむ褐色	1mm以下の黒褐色、2mm以下の 灰褐色、3mm以下の 灰白色、黑褐色、9mm以下の 赤褐色を含む	旧B地点 S C 2 前削		
491	陶 器	陶 器	陶 器	B				幾十ヶ所、屋方向 にナデ	8条の標文	堅韌	灰褐色 灰褐色	1mm以下の黒褐色、2mm以下の 灰褐色、3mm以下の 灰白色、黑褐色、9mm以下の 赤褐色を含む	旧B地点 S C 2 前削		
522	陶 器	陶 器	陶 器	B	推定	SC28	9.6	4.7	白化粧による波 状紋	白化粧による文様	堅韌	オーリーバ オーリーバ	1mm以下の黒褐色、17 C後半	旧B地点 S C 2 前削	
521	染 付	染 付	染 付	B	推定	SC28	6.2	削文	削文 削文内に文様	堅韌	明緑灰色 明緑灰色	明緑灰色 明緑灰色	精良	旧B地点 S C 2 17 C後半~18 C前半	
523	染 付	染 付	染 付	B	推定	SC28	6.8	3.55	施化した波状紋 高台面に施波紋 五瓣文	下限文 高台面に施波紋 五瓣文	堅韌	明緑灰色 明緑灰色	明緑灰色 明緑灰色	精良	旧B地点 S C 2 17 C後半~18 C前半
524	染 付	染 付	染 付	B	推定	SC28	9.55	死ノ目凹形高面	遊びをする人物画	堅韌	灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	精良	旧B地点 S C 2 18 C後半	
525	陶 器	陶 器	陶 器	B	推定	SC28	23.8	鉛輪	白輪と施輪による文 様	堅韌	にじむ褐色 相赤褐色	相赤褐色 相赤褐色	精良	旧B地点 S C 2 前削	
534	陶 器	陶 器	陶 器	B	推定	SC28	17	ヨコナデ 波紋 ケズリ	ヨコナデ ヨコナデ後、柳様文	堅韌	暗赤褐色 暗赤褐色	黒褐色 黒褐色	黒褐色 黒褐色	黒褐色 黒褐色	
532	土師器	土師器	土師器	C	SH591	6.6	4.8	1.5	回転ナデ 糸切り底	回転ナデ	良好	にじむ褐色 褐色	0.5mm以下の黒褐色、1.5mm以下の 灰褐色、全周部、1mm以下 の底白色を含む	旧C地点 S H 23	
533	土師器	土師器	土師器	C	SH593	6.6	4.7	1.8	ヨコナデ 糸切り底	回転ナデ	良好	褐色 褐色	0.5mm以下の灰褐色、灰褐色 褐色、赤褐色を含む	旧C地点 S H 25	
534	染 付	染 付	染 付	B	推定	10.3	4.2	四方薄文 圓形内に虫文?	四方薄文 圓形内に虫文?	堅韌	明赤色 明赤色	明赤色 明赤色	精良	肥厚 19 C前半	

第33表 B・C地点 土器観察表

番号	器種	出土地點	色調	胎土	計測値				備考
					最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	穿孔徑(cm)	
492	土鍤	C	灰褐色	細砂粒	4.3	1.4	1.4	0.45	7
493	土鍤	C	黑褐色	細砂粒	4.55	1.5	1.35	0.45	7.5
494	土鍤	C	にふい黄褐色	細砂粒	4.45	1.3	1.4	0.4	6.7
495	土鍤	C	にふい黄褐色	細砂粒	4	1.4	1.15	0.4	6
496	土鍤	C	黒褐色	微細な灰白色粒	3.7	1.6	1.5	0.5	8.6
497	土鍤	C	にふい黄褐色	細砂粒・1mm以下の粉色粒	3.9	1.4	1.3	0.4	6.6
498	土鍤	B	にふい黄褐色	微細な透明な状態	4.4	1.4	1.25	0.45	6.3

第34表 B・C地点 土鍤計測表

番号 高さ	種類	出土地點	手法・調整・文様はか		模様	色調		胎土の特徴	備考
			西面	門面		裏面	西面		
499	丸瓦	(試掘)トレンチ7	ナデ	布目状面	ヘラによる面取り	不完全	暗紅黄色	暗紅黄色	2mm以下の褐色・灰白 色粒を含む 裏面～中央部のみ埋存

第35表 B・C地点 瓦觀察表

番号	器種	出土地點	計測値				石材	備考
			最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)		
503	砥石	Cトレンチ3	8.95	9.1	2.2	292.1	砂岩	
502	砥石	C	8.0	4.95	3.1	213.2	砂岩	
504	有孔解石	C・SH594	9.0	6.8	3.2	51.2	軽石	旧C地点SH26
505	有孔解石	C・SH590	4.4	4.1	2.1	9.1	軽石	旧C地点SH22
506	解石製品	C・SH590	5.65	3.95	3.0	7.0	軽石	旧C地点SH22
535	火打ち石	試掘トレンチ5	4.45	3.8	2.7	39.6	チャート	

第36表 B・C地点 石器計測表

番号	器種	出土地點	計測値				備考
			最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	
497	鉄鏃	C	4.85	2.1	0.55	4.9	毛頭彫か、茎部欠損
507	鉄製品	B・SB 2 P 5	7.35	5.95	3.4	140.5	B地点旧S B 1 P 5
508	鉄釘	B・SD 1	8.2	1.5	0.7	7.8	木質付着
509	鉄釘	B・SD 1	8.25	1.45	0.75	6.1	木質付着
510	鉄釘	B・SD 1	8.4	1.38	0.5	6.5	木質付着
511	鉄釘	B・SD 1	6.25	1.4	0.9	6.5	木質付着
512	鉄釘	B・SD 1	6.05	0.96	0.7	4.1	頭部欠損、木質付着
513	鉄釘	B・SD 1	4.6	1.25	0.8	3.5	頭部欠損、木質付着
514	鉄釘	B・SD 1	4.25	0.9	0.5	2.1	頭部欠損、木質付着
515	鉄釘	B・SD 1	3.75	1.5	0.6	3.8	先端部欠損
516	鉄釘	B・SD 1	4.1	1.7	0.4	2.4	木質付着
517	鉄釘	B・SD 1	3.8	1.4	0.55	1.5	頭部欠損
518	鉄釘	B・SD 1	4.85	2.4	1.25	10.2	先端部欠損、木質付着
527	煙管(管首)	B・SC28	5.35	15	1.85	0.9	B地点旧S C 2、管首内に羅字残存、真鍮製
528	煙管(管首)	B・SC28	4.1	1.45	1.85	4.1	B地点旧S C 2、管首内に羅字残存、毛彫りによる象文?真鍮製
529	煙管(吸口)	B・SC28	4.55	1.7	1.7	10.9	B地点旧S C 2、真鍮製
530	鉄釘	B・SC28	3.4	1.3	0.9	2.6	B地点旧S C 2
531	鉄釘	B・SC28	3.4	1.3	0.9	1.5	B地点旧S C 2

第37表 B・C地点 金属製品計測表

番号	銭貨名	出土地點	計測値				備考
			銭径(cm)	内径(cm)	穿径(cm)	重量(g)	
500	開元通宝	C・SH608	2.5	2.1	0.7	2.5	一部欠損、唐(初唐845年?)
501	元祐通宝	C・SH608	2.5	1.8	0.65	1.8	一部欠損、北宋(初開1086年)
518	寛永通宝	B・SD 1	2.5	2	0.6	1.1	一部欠損、脆弱
519	寛永通宝	B・SD 1	2.4	2	0.55	2.5	
536	寛永通宝	B(試掘トレンチ7)	2.45	2	0.65	1.8	
537	寛永通宝	B(試掘トレンチ7)	2.45	2	0.6	2.6	
538	寛永通宝	B(試掘トレンチ7)	2.2	1.7	0.55	1.8	背文に「元」

第38表 B・C地点 銭貨計測表

第V章 自然科学分析

宮崎県延岡市吉野第2遺跡出土の近世人骨

松下孝幸*

【キーワード】：宮崎県、近世人骨、保存不良、男性

はじめに

宮崎県延岡市吉野町に所在する吉野第2遺跡の発掘調査が、一般国道10号延岡道路建設に伴い、平成12年(2000年)10月から平成16年(2004年)3月まで行われた。この遺跡のB地点から1基の近世墓が検出され、人骨が出土した。

延岡市から出土した古人の量は少なく、わずかに熊野江積石塚箱式石棺の弥生時代人骨(内藤・他、1980)があるくらいで、近世人骨の報告例はない。

また、宮崎県での近世人骨の調査例も少なく、宮崎学園都市堂地東遺跡(松下・他、1982)、小林市水落遺跡(佐伯・他、1992)、高鍋町野首第1遺跡(松下、2007)の調査・報告例があるだけで、その他筆者が宮崎県史の原稿を執筆する際に鑑定した宮崎市納屋向遺跡の例があるに過ぎない。

今回出土した近世人骨の保存状態はきわめて悪かったが、取り上げられており人骨について人類学的観察や計測をおこなったので、人骨所見を報告しておきたい。

資料

今回の調査では1基の近世墓(SD1)から1体の人骨が検出された。墓壙は長方形で、釘が検出されていることから埋葬構造は木棺墓(寝棺)と推定されている。また、人骨には寛永通宝が伴っていた。人骨は考古学的所見から、近世人骨とみられる。

本人骨は、下記の所見からあまり歳をとっていない(おそらく壮年)男性骨と思われる。なお、年齢区分は第39表の基準のとおりである。

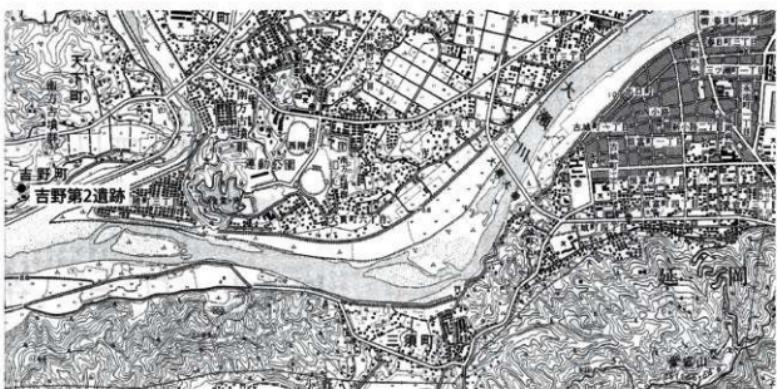
第39表 年齢区分 (Table 39. Division of age)

	年齢区分	年	齢
未成人	乳児	1歳未満	
	幼児	1歳～5歳	(第一大臼歯萌出直前まで)
	小児	6歳～15歳	(第一大臼歯萌出から第二大臼歯根完成まで)
	成年	16歳～20歳	(蝶後頭軟骨結合癒合まで)
成人	壮年	21歳～39歳	(40歳未満)
	熟年	40歳～59歳	(60歳未満)
	老年	60歳以上	

注) 成年という用語については土井ヶ浜遺跡第14次発掘調査報告書(1996)を参照されたい。

* Takayuki MATSUSHITA

The Doigahama Site Anthropological Museum [土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム]



第132図 遺跡の位置 (1/25000) (Fig.132 Location of the Yoshino 2 site, Nobeoka City, Miyazaki Prefecture)

所 見

残存していたのは頭蓋の一部と歯である。頭蓋の残存部分は第133図に示しているように、右側頭頂骨の一部と右側側頭骨の外耳孔周辺部分および下顎骨である。骨質は著しく脆弱化しており、保存状態は悪い。ラムダ縫合の右側の一部が観察できたが、この部分は内外両板とも開離していたようである。右側外耳道の観察ができたが、骨腫は認められない。下顎骨も保存状態はよくない。下顎体の後面が残っていたが、残存部分から径は大きかったと推測される。

上下両顎の歯が残っていた。大部分は遊離歯冠である。残存歯を歯式で示した。

8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
/	/	/	/	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	/	/

〔/ : 不明、番号は歯種〕

【1：中切歯、2：側切歯、3：犬歯、4：第一小白歯、5：第二小白歯、6：第一大臼歯、7：第二大臼歯、

8：第三大臼歯】

咬耗度はBrocaの1～2度で、前歯群は2度(咬耗が部分的に象牙質まで及ぶ)であるが、小白歯は1度(咬耗がエナメル質のみ)が多く、大臼歯は1度である。前歯群の咬耗が後歯群よりも強いことから、歯の咬合形式は鉗子状咬合であった可能性が強い。

性別は、下顎骨の径が大きそうであること、歯の径が大きいことから、男性と推定した。年齢はすべての縫合の観察ができたわけではないが、観察できたラムダ縫合の一部が内外両板とも開離していたことから、それほど歳をとっていないようなので、壮年としておきたい。

要 約

宮崎県延岡市吉野町にある吉野第2遺跡の平成12年度(2000年度)の発掘調査で、人骨が1体出土した。保存状態はよくなかったが、人類学的観察をおこない、以下の結果を得た。

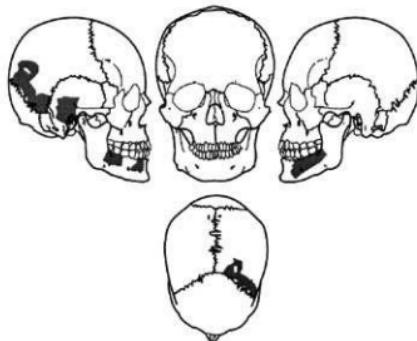
1. 人骨は1基の木棺墓から1体出土した。埋葬姿勢は仰臥だったと推測される。
2. この人骨は近世に属する人骨である。
3. 骨質が脆くて、保存状態は悪く、頭蓋の一部と歯が残存していたに過ぎない。頭蓋は右側の頭頂骨と側頭骨および下顎骨で、下顎骨の径は大きそうである。
4. 本人骨は壮年の男性骨と思われる。
5. 保存状態が悪かったので、頭型、顔面の形態、鼻根部の様態、推定身長値などを知ることはできなかった。今後の出土に期待したい。

『謝辞』

掲筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた宮崎県埋蔵文化財調査センターの皆様方に感謝致します。

『参考文献』

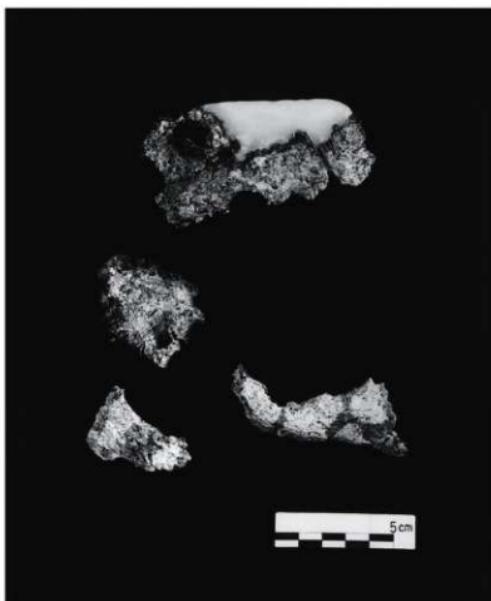
1. 松下孝幸・他、1982：宮崎学園都市堂地東遺跡出土の近世人骨。宮崎学園都市埋蔵文化財調査概報(Ⅲ)：47～55。
2. 松下孝幸、1997：宮崎県の古人骨。宮崎県史、通史編 原始古代1：784～794。
3. 松下孝幸、2007：宮崎県高鍋町野首第1遺跡出土の近世人骨。野首第1遺跡Ⅱ 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第157集：191～195。
4. 内藤芳鶴・他、1980：延岡市熊野江・積石塚箱式石棺の弥生時代人骨について。宮崎県文化財発掘調査報告書22：8-16。
5. 佐伯和信・他、1992：宮崎県小林市水落遺跡出土の近世人骨。小林市文化財報告書第5集：付篇1～20。



吉野第2遺跡出土頭蓋（男性・壮年）

第133図 人骨の残存図（アミかけ部分）

(Fig.133 Regions of preservation of the skeleton. Shaded areas are preserved.)



吉野第2遺跡出土人骨

1号人骨（男性・壮年）

(The Yoshino2, young adult male)

第VI章　まとめ

吉野第2遺跡は、五ヶ瀬川および大瀬川の分岐点付近に発達した標高約37mの丘陵上に位置し、旧石器時代から縄文時代早期・後期～晚期、弥生時代、古墳時代、古代～近世以降までの遺構や遺物が確認されている。ここでは主要な時代について簡単にまとめていきたい。

旧石器時代

旧石器時代では、始良Tn火山灰層（以下A T）を挟み、A T下位で第Ⅰ期が、A T上位で第Ⅱ・Ⅲ期が確認されている。そのうちA地点では第Ⅱ・Ⅲ期、B地点が第Ⅰ期、B・C地点で第Ⅱ期が認められる。

第Ⅰ期はIX層（極暗褐色土：黒色帶）からXc層（褐色土）で確認されている。小型で幅広の剥片を素材にした二次加工剥片や縫長剥片等が出土しているが、量的に少なく、指標となる製品類が認められないことから時期決定に欠ける。出土層位からみれば宮崎10段階編年（宮崎旧石器談話会2005、秋成2005）の第1～2段階のものと考えられる。なお周辺では吉野遺跡第7次調査にてAT下位で小型のナイフ形石器（第3段階）が主体とする石器群が確認されている。

第Ⅱ期については、本遺跡の主体となる石器群で大きく2つの時期に分かれる可能性が指摘できる。一つは二側縁加工や切出形を呈するナイフ形石器、縫長剥片素材の瀬戸内技法の影響を受けたナイフ形石器、大型の角錐状石器、台形石器を組成する一群が挙げられる（B地点では剥片尖頭器が出土している）。そのうちI類の二側縁加工や切出形のナイフ形石器は赤木遺跡第1次調査（延岡市）第I文化層や坂元遺跡（清武町）でも認められ、瀬戸内技法の影響を受けたナイフ形石器（IV類）等の資料が認められる点が共通している。またB地点の剥片尖頭器は当該期のものと考えられ、赤木遺跡第1次調査第I文化層の石器組成と共通する。これらのことから同編年の5段階に比定できるものと考えられ、狸谷型ナイフ形石器が認められないことから、同段階でも新相を示すものと考えられる。

またもう一つは、V類の小型の縫長剥片を素材にして基部に僅かな加工を行うナイフ形石器で、その特徴より終末期のものと考えられ、同編年の7段階に比定できる。

当該期の遺構は、礫群が4基確認されている。検出層位がVI層（S I 4・S I 5）中のものとVI層下位もしくはVII層下位～VII層のもの（S I 1～S I 3）とに分かれ、前者は約0.4mと比較的小型であるのに対し、後者は約0.7m～約1mとやや広範囲にまとまる。また大半が破碎礫で構成されている点が共通している。若干のレベル差が認められるものの、5段階のものに伴うものと考えられる。

第Ⅲ期とした細石核等については、舟形状を呈し、打面側のみ石核調整を行うことや流紋岩製等の点から船野型細石核に相当し、素材のあり方や調整等より同細石核でも古い様相を呈する。これらは同編年の9段階に比定できる。

縄文時代早期

縄文時代早期では、A地点で平地式住居跡1軒や集石遺構28基、炉穴16基、土坑22基、またB・C地点では炉穴38基、土坑1基等が確認されている。そのうち平地式住居跡（S A 4）については、縄文時代早期前半の例としては吾平遺跡（高千穂町）や内屋敷遺跡（小林市）、縄文時代中期の例では下耳切第3遺跡（高鍋町）で確認されている。本遺跡のものは平面積が約13m²と内屋敷遺跡のもの（約4.9～9m²）より大型で、下耳切第3遺跡のもの（9～14m²）の規模に近い。また北西側にも柱穴群が認められることから他に存在していた可能性が考えられる。

また集石遺構のうち、配石を有するものについては石材に板状の凝灰岩を利用しており、特徴的であ

る。凝灰岩は軽量で加工しやすい特徴をもつことから好んで利用されたものと考えられ、近隣の今井野第2遺跡でも板状の凝灰岩が配石に利用される例が多く、地域的な特徴と言えるであろう。また S I 9、S I 16、S I 24、S I 27、S I 28 の 5 基については S A 4 と一定の間隔を持つように配置されていることから S A 4 と同時期ないし近い時期の所産と考えられる。

炉穴について A 地点では単独で確認されているものが大半を占めるに対し、B・C 地点では重複するものが大半であり、単独のものは少数と対称的である。また B・C 地点では削平を考慮する必要があるものの、遺構内にも焼石が殆ど出土せず、集石遺構が存在しなかった可能性も考えられ、興味深い。

土器については、早期前葉～後葉の土器が認められ、そのうち VI 類土器（陽弓式土器）が本遺跡の主体を成す一群であり、I b 類の政所式土器（中原 II 式）や V 類の押型文土器等 I ~ V 類土器が少量認められる。そのうち I b 類の政所式土器（中原 II 式）をはじめとする I 類土器や II・III 類土器については器壁の厚さや内面の調整（丁寧なナデ）等類似する部分も多く、近い時期のものと考えられる。また政所式土器と陽弓式土器のうち、器壁の厚い一群（VI a 類）については器壁の厚さや底底という点では共通するものの、ナデ調整以外に指頭痕が顕著に認められる等調整の違いも認められ、両者の関係に不明な点も多く検討を要する。

これらの土器の他に稲荷山式、もしくは稲荷山式～早水台土器段階に併行する考えられる V 類の押型文土器や C 地点では後続する IV c 類土器（平柄式土器）が出土している。

石器については、流紋岩やホルンフェルス、砂岩、チャート、頁岩といった旧石器時代から利用されているもの以外にも千枚岩や水晶、黒曜石、花崗岩等種類が豊富になる。また組成も打製石鎌をはじめ、尖頭状石器、局部磨製尖頭器、スクレイパー、石錐、楔形石器、石斧、礫器等バラエティーに富み、なかでも石斧、礫器等が多い特徴は別府原遺跡（西都市）や内城跡（宮崎市）等と共に通の様相を示す。

古墳時代

古墳時代の遺構は A 地点で中期の竪穴住居跡（S A）3 軒が確認されている。S A 1・S A 2 とも 4 m 規模の長方形プランを呈する。そのうち S A 1 には貼床を有し、S A 2 には壁帶溝が認められる。また S A 3 については、削平や時期不明の溝状遺構に切られているため、規模は不明ながらも、残存する一辺が 4 m を超えることから、他の住居跡と同規模になると思われる。また遺構の主軸方位については、S A 2・S A 3 が東西方向を向くのに対し、S A 1 は南北方向を向いているものの、遺構同士の間隔は概ね等間隔を保つ。遺構の切り合い等が認められず、南西側に広がる可能性があるにせよ集落としては、小規模のものであったものと考えられる。

各住居跡からは数多くの遺物が出土し、なかでも S A 2 の遺物量が最も多く、甕や壺、高环、鉢、塊等の土器師、須恵器の环蓋等、多種にわたる。そのうち甕については丸底を有し、胴部に最大径をもちながら口縁部がやや直立ぎみに聞くものが量的に多く認められ、他に胴部と底部については同様の特徴をもちながら、頭部が「く」の字状に強く屈曲し、口縁部がやや外方に聞くものや最大径を口縁部にもち、口縁部がやや直立気味に聞くもの、平底で最大径を口縁部にもち、口縁部が屈曲し、胴部があまり張らないもの等が少量ながら認められる。また壺については、口縁部が外傾し、球状になるものや偏球状になるもの、頭部近くに刻目貼付突帯を有するもの等が出土している。高环では、环部の一部で口縁部と体部の屈曲が強いものが認められるものの、大半は口縁部と体部の屈曲が弱く、一部で口縁部と体部の境に段をもつもので、口縁部が長くなり、环部が深くなる傾向がある。また脚部の大半は下方へ開きながら、裾部で屈曲し、大きく聞くものやラッパ状に聞くものが多く、エンタシス状の脚柱部を有するものも僅かながら認められる。鉢では、口縁部が内湾しながら立ち上がるものの頭部で屈曲し、外反しながら聞くもの、胴部が張らず、外方へ開きながら口縁部が外反するものが認められる。

同様に S A 1 で確認されている甕や壺、高环等も S A 2 と同様の特徴を有する。またこれらの器種に

加え、S A 1、S A 2 では須恵器の环蓋（両遺構間で接合）が出土し、陶邑編年（田辺編年）の T K 23ないし T K 47段階に併行すると考えられる。これらは今塙屋・松永編年（今塙屋・松永 2002）の4期～5期に相当し、甕の丸底が増えることや高环の环部が深くなるものが多くなること等から新相に近いものと考えられる。

S A 3については、甕については頸部の屈曲が強いものも認められるものの、口縁部が長くなり、丸底の底部が認められることから他住居跡のものと同様の特徴を有する。また高环については他住居跡のものと比べて器高が高いものの、环部の口縁部と体部の屈曲が弱く、調整により境界に段を付ける特徴から新相と考えられ、時期的には他住居跡の遺物と近い時期と考えられる。

中世

B・C 地点に隣接する土持卒塔婆は文明 14 年（1482 年）に建立され、松尾城を築いたとされる土持宣綱、その子の全繁、両者の妻の戒名が刻まれている。この卒塔婆一帯は光福寺の推定地になっているものの、同寺については、文献等に残されておらず不明な部分も多い。そのため B・C 地点の両地点では、同寺に関連する遺構等の確認が期待されたが、明確には確認されていない。

ただし、両地点では 15 世紀末葉の簡略化した雷文帯の青磁碗（上田分類 C-Ⅲ類）や 14 世紀から 15 世紀の見込みに印花文を有する碗、14 世紀から 15 世紀の備前系の陶器（甕や擂鉢）が柱穴から出土している他、近世以降の土坑や表土中等から 12 世紀中頃から後半の白磁（大宰府分類の白磁碗Ⅷ-2 類）、備前系の陶器（甕や擂鉢）、土師器の小皿、瓦等が出土しており、当該期の生活の痕跡を垣間見ることができる。

またここで注目されるのが、時期不明とした 3 号掘立柱建物跡、4 号掘立柱建物跡の存在である。これらは柱間隔が一定であることや一定の深さを有すること（S B 3 の深さが 0.9 m～1.2 m、S B 4 が 0.7～0.88 m）、また柱穴内では柱（痕跡）の周囲をしっかりと埋め固められている（図版 3、B 地点 S B 3 柱穴埋土状況参照）。さらに確認されている他の古代や近世の掘立柱建物跡と比べ、しっかりと造りであること、3 号掘立柱建物跡は桁行 4 間 × 梁行 1 間以上と大規模であること等から勘案して、これらの建物が同寺に関連する施設である可能性を指摘しておきたい。

ただ遺物等がこれらの遺構には伴わないため、光福寺との関連はあくまでも推測の域をでないが、調査区外（東側）へと遺構の展開が想定できることから、さらに検討を進める必要がある。

参考・引用文献

- 田辺昭三 1981「須恵器大成」角川書店
森田勉 1982「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
上田秀夫 1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
宮崎県 1998『宮崎県史』通史編Ⅰ 原始・古代1
太宰府市教育委員会 1998『大宰府条坊跡XV-1陶磁器分類編』太宰府市の文化財第 49 集
延岡市教育委員会 2001『延岡市の文化財』
今塙屋毅行・松永幸寿 2002「日向における古墳時代中～後期の土師器—宮崎平野部を中心にして—」『古墳時代中・後期の土師器—その編年と地域性—』第 5 回九州前方後円墳研究会 第 5 回九州前方後円墳研究会実行委員会
東和幸 2002「地下茎植物採掘痕と考えられる掘り込み」『考古学資料と民具資料の総合的研究』財團法人鹿児島県育英財團平成 13 年度研究助成報告書
宮崎県旧石器談話会 2005「宮崎県下の旧石器時代遺跡概観」『旧石器考古学』第 66 号 旧石器談話会
秋成雅博 2005「宮崎 10 段階編年の概要」『九州旧石器』第 9 号 九州旧石器文化研究会



吉野第2遺跡遠景（西より）



調査区全景（平成 12 年度調査）